

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 25 —

西ノ原遺跡第3・4次
大西遺跡第4次

福岡県豊前市所在遺跡の調査

2016

九州歴史資料館



西ノ原遺跡・大西遺跡遠景

序

福岡県では、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成19年度から27年度まで東九州自動車道建設事業に伴う発掘調査を実施してきました。本書は同事業に伴って発掘調査を実施した福岡県東部、豊前市に所在する弥生時代・古墳時代の集落遺跡の報告です。現在では行政区が異なることから二つの遺跡として報告しますが、本来は一連の遺跡であったと思われます。弥生時代の遺構としては中期の貯蔵穴、後期の環濠や竪穴住居跡があり、古墳時代の遺構には竪穴住居跡等があります。特に後者は、本調査区の北東に近接する塔田琵琶田遺跡の竪穴住居跡との対比に興味深い点が見られました。これらの調査成果が地域の古代史への関心を高めるとともに、古代史の研究に寄与することができれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には、西日本高速道路株式会社および関係諸機関、豊前市・同教育委員会、そして地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成28年3月31日

九州歴史資料館
館長 杉光 誠

例　言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県豊前市大字大西・同永久に所在する遺跡群の発掘調査の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第25集にあたる。
2. 発掘調査・報告書作製は、西日本高速道路株式会社九州支社中津工事事務所の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。

なお、調査・報告書作製に関して福岡県高速道路対策室、豊前市・同教育委員会の多大な御協力を得た。
3. 西ノ原遺跡・大西遺跡は、東九州自動車道中津工事事務所管内の第29地点にあたる。
4. 本書に掲載した写真は、遺構を城門・海出が、遺物は九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。

なお、空中写真は東亜航空技研株式会社に委託して、ラジコンヘリ等を使用して撮影したものである。
5. 本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て、調査担当が作成した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、岡田の指導の下で実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/25,000地形図「中津・土佐井・椎田・下河内」を改変したものである。

また、使用する座標は世界測地系による。
9. 本書は調査担当の海出の草稿を基に、坂本（Ⅲ・Ⅳ土器以外の出土遺物）、飛野（Ⅲ・Ⅳ出土土器・V）、小澤（I・II・III遺構）が分担執筆し、編集は飛野が行った。

目 次

卷頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

	頁
Iはじめ	1
1 調査の経過	1
2 西ノ原遺跡の調査経過	5
3 大西遺跡の調査経過	6
4 調査の組織	7
II位置と環境	9
1 地理的環境	9
2 歴史的環境	9
III西ノ原遺跡第3・4次調査の報告	13
1 調査の概要	13
2 調査の成果	13
(1) 概要	13
(2) 坪穴住居跡	14
(3) 挖立柱建物跡	70
(4) 土坑	70
(5) 溝	83
(6) 通路状遺構	109
(7) その他の遺構と遺物	112
IV大西遺跡第4次調査の報告	119
1 調査の概要	119
2 調査の成果	119
(1) 概要	119
(2) 坪穴住居跡	121
(3) 挖立柱建物跡	136
(4) 土坑	145
(5) 溝	153
(6) その他の遺構と遺物	209
Vおわりに	216
1 遺跡の変遷	216
2 弥生時代後期の環濠	220

図版目次

巻頭図版 西ノ原遺跡・大西遺跡遠景

西ノ原遺跡

図版1	1 上空から調査地をのぞむ（南東から） 3 上空から調査地をのぞむ（西から）	2 上空から調査地をのぞむ（南西から）
図版2	1 調査地上空から南をのぞむ	2 調査地上空から東をのぞむ
図版3	1 第3・4次調査区全景（合成、上が北）	2 第3次調査区（上が北）
図版4	1 4号竪穴住居跡（南東から） 3 7号竪穴住居跡（南東から）	2 6号竪穴住居跡（南東から）
図版5	1 7号竪穴住居跡カマド（南東から） 3 10号竪穴住居跡カマド（南東から）	2 9~11・18号竪穴住居跡（上が西）
図版6	1 11号竪穴住居跡（南東から） 3 16号竪穴住居跡（上が北）	2 11号竪穴住居跡カマド（南西から）
図版7	1 16号竪穴住居跡（南東から） 3 17号竪穴住居跡（西から）	2 16号竪穴住居跡カマド（上が西）
図版8	1 20・21号竪穴住居跡（南東から） 3 22号竪穴住居跡カマド（南東から）	2 22~26・30号竪穴住居跡（上が東）
図版9	1 23・24号竪穴住居跡（北東から） 3 27号竪穴住居跡カマド（南東から）	2 27号竪穴住居跡（南東から）
図版10	1 29号竪穴住居跡（南東から） 3 30号竪穴住居跡（南西から）	2 29号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版11	1 31号竪穴住居跡（南から） 3 32号竪穴住居跡（北東から）	2 31号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版12	1 32号竪穴住居跡カマド（北南から） 3 35号竪穴住居跡カマド（南東から）	2 34号竪穴住居跡カマド（北西から）
図版13	1 37号竪穴住居跡（南東から） 3 1号土坑土層（北から）	2 1号土坑（東から）
図版14	1 2号土坑（南東から） 3 4号土坑（南西から）	2 3号土坑（東から）
図版15	1 5・6号土坑（南東から） 3 9号土坑（南東から）	2 7・8号土坑（南西から）
図版16	1 10号土坑（南東から） 3 12号土坑（南西から）	2 11号土坑（南西から）
図版17	1 13号土坑（南西から） 3 15号土坑（南から）	2 14号土坑（南東から）
図版18	1 16号土坑（南から） 3 18号土坑（西から）	2 17号土坑（東から）
図版19	1 19号土坑（西から） 3 1号溝（環濠）土層（北東から）	2 1号溝（環濠）上層遺物出土状況（西から）

図版20	1 1号溝（環濠）完掘状況（東から） 3 II区全景（東から）	2 2号通路状遺構（南から）
図版21	西ノ原遺跡出土遺物1（3・4号竪穴住居跡）	
図版22	西ノ原遺跡出土遺物2（4号竪穴住居跡）	
図版23	西ノ原遺跡出土遺物3（4号竪穴住居跡）	
図版24	西ノ原遺跡出土遺物4（4・7・11・16・22・24・31号竪穴住居跡）	
図版25	西ノ原遺跡出土遺物5（31・32・34・35号竪穴住居跡）	
図版26	西ノ原遺跡出土遺物6（3・6・18号土坑・1号溝）	
図版27	西ノ原遺跡出土遺物7（1号溝）	
図版28	西ノ原遺跡出土遺物8（1号溝）	
図版29	西ノ原遺跡出土遺物9（1号溝）	
図版30	西ノ原遺跡出土遺物10（1号溝）	
図版31	西ノ原遺跡出土遺物11（土製品・石製品等）	
図版32	西ノ原遺跡出土遺物12（石製品等）	
大西遺跡		
図版33	1 調査区遠景（南から）	2 調査区遠景（南東から）
図版34	1 4次調査区全景（合成、上が北）	2 調査区北部（上が北）
図版35	1 調査区中央部（上が北）	2 調査区南部（上が北）
図版36	1 調査区東部（北から）	2 調査区西部（北から）
図版37	1 1号竪穴住居跡・1号掘立柱建物跡（北から） 3 3号竪穴住居跡壁際土坑（西から）	2 2・3号竪穴住居跡（南東から）
図版38	1 4号竪穴住居跡（南東から） 3 6号竪穴住居跡（東から）	2 5号竪穴住居跡（北から）
図版39	1 7号竪穴住居跡（南東から） 3 7号竪穴住居跡壁際土坑完掘状況（北西から）	2 7号竪穴住居跡壁際土坑・梯子根痕（西から）
図版40	1 8号竪穴住居跡（南東から） 3 10号竪穴住居跡（南東から）	2 9・11号竪穴住居跡（南東から）
図版41	1 10号竪穴住居跡カマド（南東から） 3 13号竪穴住居跡（南東から）	2 12号竪穴住居跡（北から）
図版42	1 14号竪穴住居跡（南東から） 3 3号掘立柱建物跡（北東から）	2 2号掘立柱建物跡（北東から）
図版43	1 5号掘立柱建物跡（東から） 3 7号掘立柱建物跡（南西から）	2 6号掘立柱建物跡（北東から）
図版44	1 8号掘立柱建物跡（北東から） 3 10号掘立柱建物跡（南西から）	2 9号掘立柱建物跡（西から）
図版45	1 11号掘立柱建物跡（北東から） 3 1号土坑（北東から）	2 12号掘立柱建物跡（南西から）
図版46	1 2号土坑（北から） 3 3号土坑土層（西から）	2 3号土坑（西から）
図版47	1 4号土坑（南西から） 3 6・7号土坑（南東から）	2 5号土坑（南から）

図版48	1 9号土坑（南西から） 3 11号土坑（北西から）	2 10号土坑（北西から）
図版49	1 12号土坑（南西から） 3 8号土坑完掘状況（東から）	2 8号土坑検出状況（東から）
図版50	1 1号溝（環濠）上層遺物出土状況（東から） 3 1号溝（環濠）北半部（南から）	2 1号溝（環濠）下層遺物出土状況（北から） 4 1号溝（環濠）南半部（北から）
図版51	大西遺跡出土遺物1（2・3・6・8～10号竪穴住居跡・5号土坑）	
図版52	大西遺跡出土遺物2（6・7・9号土坑・1号溝）	
図版53	大西遺跡出土遺物3（1号溝）	
図版54	大西遺跡出土遺物4（1号溝）	
図版55	大西遺跡出土遺物5（1号溝）	
図版56	大西遺跡出土遺物6（1号溝）	
図版57	大西遺跡出土遺物7（1号溝）	
図版58	大西遺跡出土遺物8（1号溝）	
図版59	大西遺跡出土遺物9（1号溝・P57）	
図版60	大西遺跡出土遺物10（P57・鉄製品）	
図版61	大西遺跡出土遺物11（石製品）	

表目次

	頁
表1 東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧 3

挿図目次

	頁
第1図 福岡県豊前市西ノ原・大西遺跡の位置	1
第2図 東九州自動車道中津工事事務所管内路線図及び調査地点位置図 (1/100,000)	2
第3図 西ノ原遺跡・大西遺跡周辺地形図 (1/5,000)	4
第4図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)	10
西ノ原遺跡	
第5図 西ノ原遺跡3・4次調査区遺構配置図 (1/300)	折込
第6図 3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	17
第7図 3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	18
第8図 4号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)	20
第9図 4号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/4)	21
第10図 4号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)	22
第11図 4号竪穴住居跡出土土器実測図4 (1/3、1/4)	24
第12図 4号竪穴住居跡出土土器実測図5 (1/3、1/4)	25
第13図 4号竪穴住居跡出土土器実測図6 (1/4、1/3)	26
第14図 4号竪穴住居跡出土土器実測図7 (1/3)	27
第15図 4号竪穴住居跡出土土器実測図8 (1/3)	28
第16図 4号竪穴住居跡出土土器実測図9 (1/3)	29
第17図 6号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	30
第18図 7号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	32
第19図 7~11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	33
第20図 8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34
第21図 10号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	36
第22図 11号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	37
第23図 11・13・16・17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	38
第24図 12・18号竪穴住居跡実測図 (1/60)	40
第25図 13~15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	42
第26図 16号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	44
第27図 17・19・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)	46
第28図 20~24・27~31号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	48
第29図 21・22号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	49
第30図 23~25号竪穴住居跡実測図 (1/60)	50
第31図 26・27号竪穴住居跡実測図 (1/60)	52
第32図 28・29号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	54
第33図 30・31号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	56
第34図 32~34号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	58
第35図 32・34号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	60
第36図 35・36号竪穴住居跡・同力マド実測図 (1/60、1/30)	62
第37図 35・37号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	63

第38図	37・38号竪穴住居跡実測図（1/60）	64
第39図	39~41号竪穴住居跡実測図（1/60）	66
第40図	42~44号竪穴住居跡実測図（1/60）	68
第41図	1号掘立柱建物跡・出土土器実測図（1/60・1/3）	70
第42図	1~4号土坑実測図（1/40）	72
第43図	1・3・5・6号土坑出土土器実測図（1/4）	74
第44図	5~10号土坑実測図（1/40）	75
第45図	9・11・13・15・17号土坑出土土器実測図（1/4）	76
第46図	11~16号土坑実測図（1/40）	78
第47図	17~19号土坑実測図（1/40）	80
第48図	18・19号土坑出土土器実測図（1/4）	81
第49図	1号溝実測図（1/120、1/60）	82
第50図	1号溝1区1層出土土器実測図（1/3）	84
第51図	1号溝1区3層出土土器実測図1（1/4、1/3）	86
第52図	1号溝1区3層出土土器実測図2（1/3）	87
第53図	1号溝1区3層出土土器実測図3（1/3）	88
第54図	1号溝1区3層出土土器実測図4（1/4、1/3）	89
第55図	1号溝2区1層出土土器実測図1（1/4、1/3）	90
第56図	1号溝2区1層出土土器実測図2（1/3）	92
第57図	1号溝2区1層出土土器実測図3（1/4）	94
第58図	1号溝2区1層・1~4層出土土器実測図（1/4、1/3）	95
第59図	1号溝2区3層出土土器実測図（1/3）	96
第60図	1号溝3区出土土器実測図1（1/4、1/3）	98
第61図	1号溝3区出土土器実測図2（1/3）	99
第62図	1号溝3区出土土器実測図3（1/4、1/3）	100
第63図	1号溝3区出土土器実測図4（1/3）	101
第64図	1号溝4区出土土器実測図（1/3）	102
第65図	1号溝5区3層出土土器実測図1（1/4、1/3）	104
第66図	1号溝5区3層出土土器実測図2（1/3）	105
第67図	1号溝5区3層出土土器実測図3（1/3）	106
第68図	1号溝5区搅乱・3号溝・谷状落ち込み出土土器実測図（1/4、1/3）	107
第69図	1~3号通路状遺構実測図（1/60）	108
第70図	通路状遺構出土土器実測図（1/3）	110
第71図	谷状落ち込み土層実測図（1/60）	112
第72図	西ノ原遺跡出土土製品・石製品実測図1（1/2、2/3）	113
第73図	西ノ原遺跡出土石製品実測図2（1/3）	114
第74図	西ノ原遺跡出土石製品実測図3（1/4）	115
第75図	西ノ原遺跡出土石製品実測図4（1/4、1/2）	116

大西遺跡

第76図	大西遺跡4次調査区遺構配置図 (1/300)	総述
第77図	1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	120
第78図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	122
第79図	3・5号竪穴住居跡実測図 (1/60, 1/30)	124
第80図	3～5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	126
第81図	4・6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	127
第82図	6～10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	128
第83図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60, 1/30)	129
第84図	8・9・11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	130
第85図	10・13号竪穴住居跡実測図 (1/60, 1/30)	132
第86図	11・14号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	134
第87図	12号竪穴住居跡実測図 (1/60)	135
第88図	14号竪穴住居跡実測図 (1/60, 1/30)	136
第89図	1～5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	137
第90図	6・7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	138
第91図	8～10号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	140
第92図	11・12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	142
第93図	1～6号土坑実測図 (1/40, 1/20)	144
第94図	1～3・5・6号土坑出土土器実測図 (1/3)	146
第95図	7～12号土坑実測図 (1/40)	148
第96図	7・9・10号土坑出土土器実測図 (1/3)	150
第97図	1号溝実測図 (1/120, 1/60)	152
第98図	1号溝出土鉄製品実測図 (1/2)	153
第99図	1号溝1区上層出土土器実測図 (1/4, 1/3)	154
第100図	1号溝1区下層出土土器実測図 (1/3)	156
第101図	1号溝2区上層出土土器実測図1 (1/4)	157
第102図	1号溝2区上層出土土器実測図2 (1/3)	158
第103図	1号溝2区上層出土土器実測図3 (1/3)	160
第104図	1号溝2区上層出土土器実測図4 (1/3)	161
第105図	1号溝2区下層出土土器実測図1 (1/3)	162
第106図	1号溝2区下層出土土器実測図2 (1/3)	163
第107図	1号溝2区下層出土土器実測図3 (1/3)	164
第108図	1号溝2区下層出土土器実測図4 (1/3)	165
第109図	1号溝2区下層出土土器実測図5 (1/4, 1/3)	166
第110図	1号溝2区下層出土土器実測図6 (1/3)	167
第111図	1号溝2区下層出土土器実測図7 (1/3)	168
第112図	1号溝3区上層出土土器実測図1 (1/4)	170
第113図	1号溝3区上層出土土器実測図2 (1/3)	172
第114図	1号溝3区上層出土土器実測図3 (1/3, 1/4)	173
第115図	1号溝3区上層出土土器実測図4 (1/4, 1/3)	174

第116図	1号溝3区上層出土土器実測図5 (1/3)	176
第117図	1号溝3区上層出土土器実測図6 (1/3)	177
第118図	1号溝3区上層出土土器実測図7 (1/3)	178
第119図	1号溝3区上層出土土器実測図8 (1/3)	179
第120図	1号溝3区上層出土土器実測図9 (1/4、1/3)	180
第121図	1号溝3区上層出土土器実測図10 (1/3)	181
第122図	1号溝3区下層出土土器実測図 (1/3)	182
第123図	1号溝4区上層出土土器実測図 (1/3)	183
第124図	1号溝4区上層出土土器実測図2・下層出土土器実測図 (1/4、1/3)	184
第125図	1号溝5区上層出土土器実測図1 (1/3)	186
第126図	1号溝5区上層出土土器実測図2 (1/3)	187
第127図	1号溝5区上層出土土器実測図3 (1/3)	188
第128図	1号溝5区下層出土土器実測図 (1/3)	189
第129図	1号溝6区上層出土土器実測図1 (1/3)	190
第130図	1号溝6区上層出土土器実測図2 (1/4、1/3)	191
第131図	1号溝6区上層出土土器実測図3 (1/3)	192
第132図	1号溝6区上層出土土器実測図4 (1/3)	193
第133図	1号溝6区上層出土土器実測図5 (1/3)	194
第134図	1号溝6区上層出土土器実測図6 (1/3)	195
第135図	1号溝6区上層出土土器実測図7 (1/3)	196
第136図	1号溝6区上層出土土器実測図8 (1/3)	197
第137図	1号溝6区下層出土土器実測図 (1/4、1/3)	198
第138図	1号溝7区上層出土土器実測図1 (1/4、1/3)	200
第139図	1号溝7区上層出土土器実測図2 (1/4、1/3)	201
第140図	1号溝7区上層出土土器実測図3 (1/3)	202
第141図	1号溝7区上層出土土器実測図4 (1/3)	203
第142図	1号溝7区上層出土土器実測図5 (1/3)	204
第143図	1号溝7区上層出土土器実測図6 (1/3)	260
第144図	1号溝8区下層他出土土器実測図 (1/3、1/4)	208
第145図	小溝群実測図 (1/80)	209
第146図	P57実測図 (1/20)	210
第147図	柱穴等出土土器実測図 (1/3)	211
第148図	西側包含層出土土器実測図 (1/3)	212
第149図	大西遺跡出土石製品実測図1 (2/3、1/1、1/2)	213
第150図	大西遺跡出土石製品実測図2 (1/2、1/3、1/4)	214
第151図	大西遺跡出土石製品実測図3 (1/4)	215
第152図	西ノ原遺跡・大西遺跡遺構変遷図 (1/600)	折込
第153図	上毛町郷ヶ原遺跡2号溝状遺構出土高杯 (1/8)	222

I はじめに

1 調査の経過

東九州自動車道の概要 東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点として、大分・宮崎・鹿児島の各県を結び、鹿児島市に至る延長約436kmの高速自動車国道である。九州道、大分道及び宮崎道とともに九州島において広域的な交通ネットワークを形成し、九州地域の総合的な発展を促すとともに、一般道の交通混雑を緩和、沿道環境を改善して地域間交通を円滑化し、また緊急時の代替路・迂回路機能などが期待され、計画された。本道路の建設は、既存の高速道路との共用部分以外では、椎田道路・宇佐別府道路・延岡道路など、各地において1990年代初頭から前半にかけて一般国道自動車専用道路の建設が先行した。その後、各自動車専用道路の間をつなぐように順次建設が進められ、1999年の大分米良IC - 大分宮河内IC間の開通を皮切りに、2014年度までに福岡県築上町 - 豊前市内的一部分を除いて開通した。

県内における東九州自動車道の工事進捗 福岡県内では、1991年に豊津IC - 椎田南IC間が国道10号線バイパス（自動車専用道路）として先行して開通した。東九州自動車道としての開通部分は2006年の北九州JCT - 菊田北九州空港IC間が最も早く、その後未開通部分の建設が順次進められてきた。2013年度には菊田北九州空港IC - 行橋IC間が、2014年度には行橋IC - 豊津IC間が、2015年度には宇佐IC - 豊前IC間も開通し、残る椎田南IC - 豊前ICの開通をもって県内での東九州自動車道がすべて開通する。

東九州自動車道建設に先立つ発掘調査 東九州自動車道の整備計画策定からの文化財調査にかかる経緯については、先行する報告書に詳しく記載されているために本書では割愛することとし、本書で報告する各調査の着手までの経緯をそれぞれ簡単に見ておきたい。

西ノ原遺跡・大西遺跡の既往の調査 西ノ原遺跡・大西遺跡の初現は、1968年に文化財保護委員会が刊行した遺跡分布地図（文化財保護委1968）である。一覧表中では豊前市大字大西に「大西遺跡」という弥生時代の散布地・墓地が挙げられる一方、地図上においては大字永久字西ノ原に含まれる現在の西ノ原遺跡の範囲が赤線により囲まれている。地図の範囲を示し間違えたものか。

つづいて1976年に福岡県教育委員会が刊行した遺跡分布地図（福岡県教委1976）には、豊前市大字永久にある遺跡として「西ノ原遺跡」が見られる（弥生時代の散布地、低台地上に所在。消滅）。しかし地図上に示された範囲はおおむね先行する1968年図を踏襲しており、あわせて大西遺跡の記載が欠落する。おそらく本図の編者は1968年図における「大西遺跡」の名称を、地図上の分布域が大字永久に含まれることを根拠として「西ノ原遺跡」へと改訂したのではないかと推察され



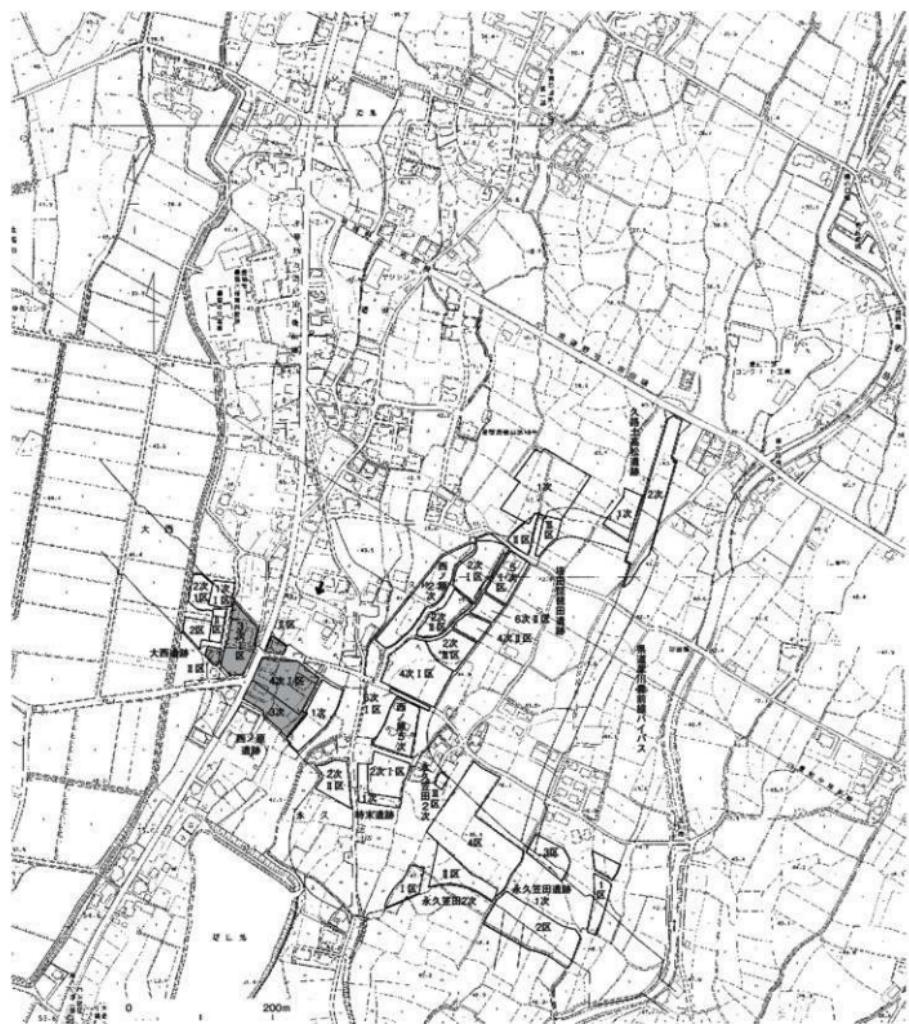
第1図 福岡県豊前市西ノ原・大西遺跡の位置



第2図 東九州自動車道中津工事事務所管内路線図及び調査地点位置図（1/100,000）

地点	工事件名	遺跡名	所 在 地	対象面積(m ²)	試掘年度	調査面積(m ²)	調査年度	報告年度	直刊報告書番号	備 考
2 中津	石堂大石ヶ丸遺跡	築上郡豪上町石堂	9027	H21~23	200	H23	H25	15集		
3 中津	福岡茶切古墳群	築上郡築上町上ノ河内	16644	H21~23	1000	H22	H25	15集		
4 中津	頑無古墳群 西一町田遺跡	築上郡築上町上ノ河内	19420	H22						遺跡なし
5 中津		築上郡築上町上ノ河内	2840	H21						遺跡なし
6 中津	中村西峰尾遺跡	築上郡築上町上ノ河内・豊前市中村	26972	H22	15000	H23~24	H25	15集		
7 中津	中村山柿遺跡	豊前市中村	16579	H21~22	700	H22	H25	15集		
8 中津		豊前市中村・馬場	10354	H21						遺跡なし
9 中津		豊前市中村・松江	42434	H24						遺跡なし
10 中津		豊前市松江	9905	H23						遺跡なし
11 中津		豊前市松江	26570	H21~23						遺跡なし
12 中津	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸	14462	H21	600	H23	H25	15集		
13 中津		豊前市西郷丸	12986	H21~23						遺跡なし
14 中津		豊前市西郷丸	2390	H21						遺跡なし
15 中津		豊前市西郷丸	9735	H22						遺跡なし
16 中津		豊前市西郷丸	10432	H22						遺跡なし
17 中津	川内下野添遺跡	豊前市川内	15972	H21~23	3600	H22~23	H25	15集		
18 中津		豊前市川内	16040	H21~23						遺跡なし
19 中津	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越	4963	H23~24	760	H24	H26	21集		
20 中津	大村湯畠遺跡	豊前市鳥越	8762	H23~24	1300	H24	H26	21集		一部豊前市により調査
21 中津		豊前市大村	0							
22 中津		豊前市大村	0							
23 中津		豊前市大村	0							
24 中津	天地山遺跡	豊前市大村	6777	H20~22						遺跡なし
25 中津	大村上野地遺跡 大村シキキ田遺跡	豊前市大村・荒畠	10527	H20~22~23	2600	H23	H25	15集		一部豊前市により調査
26 中津	荒畠山田原遺跡	豊前市荒畠	21821	H21~24	1000	H22	H25	15集		
27 中津		豊前市荒畠	9823	H21~22						遺跡なし
28 中津		豊前市大西	23122	H21~23						遺跡なし
29 中津	塔田琵琶田遺跡 大西遺跡 西ノ原遺跡 時木遺跡	豊前市大西・永久・塔田・久路上	63733	H21~24	35000	H23~25			H26 H27 H27 H27 H27	22集 21集(本冊) 25集 26集 27集
30 中津	久路上木階遺跡	豊前市久路上	9463	H23						遺跡なし
31 中津	鬼木溝添遺跡	豊前市鬼木	12636	H23						遺跡なし
32 中津	鬼木鉢立遺跡	豊前市鬼木	25256	H21~23	5500	H24	H26	21集		
33 中津	諸古方古墳群 七ヶ枝遺跡 春屋敷跡 道ノ本遺跡	築上郡上毛町諸方	12456	H20~23	3500	H20~22	H24	8集		上毛町試掘
34 中津	龍毛遺跡	築上郡上毛町諸方	11732	H20~21~23~24	5000	H21~24	H24	8集		上毛町試掘
35 中津	下尻高遺跡 ハカノ本遺跡	築上郡上毛町諸方・尻高	11517	H20~21	7200	H20~21	H24	7集		
36 中津	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安雲	10135	H20						一部上毛町により調査
37 中津	安曇山田遺跡	築上郡上毛町安雲・宇野	24970	H20~21	9400	H20~21	H24	7集		
38 中津		築上郡上毛町土佐井	22252	H20						遺跡なし
39 中津	土佐井遺跡2C-4区	築上郡上毛町土佐井	21860	H20~22	4400	H22~23	H25	16集		
40 中津	土佐井遺跡2A-2区	築上郡上毛町土佐井	13476	H20~22	600	H23	H25	16集		一部上毛町により調査
41 中津	土佐井小道遺跡 唐原山城跡	築上郡上毛町土佐井	7887	H21~22~24	1500	H22~24	H25	16集		
42 中津	ガサメキ道跡 穴ヶ葉山南遺跡	築上郡上毛町下唐原	33002	H21~22~24	4000	H22~24	H25	16集		一部上毛町により調査
43 中津		築上郡上毛町下唐原	25215	H21~22~23						遺跡なし
44 中津	大久保橋迫遺跡 (新池南古墳)	築上郡上毛町下唐原	13452	H22	7500	H22	H25	16集		
45 中津		築上郡上毛町下唐原	11997	H24						遺跡なし
46 中津	糸山古墳群	築上郡上毛町下唐原・上唐原	23977	H22~24	12000	H23~24	H26	23集		
47 中津	四ヶ塚山古墳群	築上郡上毛町下唐原	7193	H22~23	6000	H23	H27	28集		
48 中津	鏡追古墳群	築上郡上毛町下唐原	4577	H25	2000	H25	H27	28集		
49 中津	桜町遺跡	築上郡上毛町上唐原	14250	H24	8940	H24~25	H27	28集		
50 中津	桜町遺跡	築上郡上毛町上唐原	4735	H23	1050	H24~25	H27	28集		一部上毛町により調査

表1 東九州自動車道中津工事事務所管内における埋蔵文化財発掘調査地点一覧



第3図 西ノ原遺跡・大西遺跡周辺地形図 (1/5,000)

る。さらに1984年に文化庁が発行した全国遺跡分布地図（文化庁1984）にもほぼ1976年図とはほぼ同様の記載が見られる。

1987年に県営は場整備事業に先立って行われた試掘調査で、現在の大西遺跡の西側部分にあたる地点に文化財の包蔵が確認され、大西遺跡の第1次調査が行われた（豊前市教委1988）。調査箇所は大西遺跡第4次調査の西側水田にあたり、弥生時代後期の竪穴住居跡2軒を検出し、該期のはか古墳時代前末期・後期後半の土器が出土した。この調査により、これまで遺跡分布地図上に遺跡の掲載がなかった県道犀川農前線の西側にも遺跡が広がることが明らかとなるとともに、「大西遺跡」の名称が復活することとなった。

以上の結果、本低台地の東西両側斜面にはそれぞれ西ノ原遺跡・大西遺跡として周知化された遺跡（埋蔵文化財包蔵地）が並立し、現行の遺跡地図（豊前市教委2000）にも反映されている。

東九州自動車道建設にかかる発掘調査にいたる経過 東九州自動車道が周知化された両遺跡の範囲を横断することになり、福岡県教育委員会・九州歴史資料館では西日本高速道路株式会社（以下、ネクスコ西日本とする）の要請に応えて用地買収が終了した範囲から順次試掘・確認調査を開始した。大西遺跡については1987年度調査地の西側隣接地（水田部分）について2009年11月9～19日に、東側隣接地（台地斜面～頂部、宅地）について11年9月7・8日にそれぞれ試掘調査を行い、いずれも埋蔵文化財の包蔵を確認した。西ノ原遺跡については、10年2月10～12日、同年10月27・28日、11年9月7・8日に3度にわたって確認調査を行い、やはり埋蔵文化財が分布することを確認した。

これを受けネクスコ西日本・豊前市教育委員会・九州歴史資料館では発掘調査について協議を行い、西ノ原遺跡のうち比較的早期に買収された遺跡東側の台地裾部については豊前市教育委員会が2011・12年度に調査を行うこと（西ノ原遺跡第1・2次調査）、遺跡西側にあたる台地の東斜面～頂部については12・13年度に九州歴史資料館が発掘調査を行うこと（西ノ原遺跡第3・4次調査）で合意に至った。また、大西遺跡についても同様に、早期に買収された西側水田部については2012・13年度に豊前市教育委員会が調査を行うこと（大西遺跡第2・3次調査）、買収が遅れた台地斜面～頂部の宅地については2013年度に九州歴史資料館が調査を行うこと（大西遺跡第4次調査）で合意に至った（第2表）。

2 西ノ原遺跡の調査経過

西ノ原遺跡第3次調査の経過 九州歴史資料館による西ノ原遺跡の発掘調査は、2011・12年度の2ヵ年をかけて行った。従って、事務手続き上、調査次数を年度ごとに分け、11年度分を第3次調査、12年度分を第4次調査とした。ただし、調査区は連続しており、遺構番号も第3・4次調査を通じて連続して設定した。

11年度の調査は、丘陵斜面～頂部の要調査範囲のうち南側1/3ほどを対象として行った。これは事業者側からの早期引き渡し要望（仮設道路建設）に応えたものである。調査面積は約1,500m²であった。調査は12年1月17日より着手した。重機を用いての表土剥ぎは1月中に終了し、並行して作業員を投入して人力による遺構検出作業を進めた。

調査地の旧状は斜面中～下位が畠地、台地頂部付近が宅地であり、特に宅地部分については削平や攪乱が著しく遺構の残りはきわめて悪い一方、斜面部については下位に行くほどに遺構の残りがよくなかった。地山は黄～赤褐色粘質土で火山灰堆積土からなり、削平が少ない部分では赤褐色系

統、地山深くにまで達する部分では黄褐色系統の色調を呈しており、前者では混入物もほとんど見られないが後者には火山弾由来の腐り縛がままみられた。これに対し遺構埋土は暗～黒褐色粘質土（黒ボク土）を主体とし、遺構の識別は比較的容易であった。

この年の冬は比較的雨が多くしばしば作業休止に追い込まれたが、作業員の熱心な取り組みにより調査は比較的順調に進展した。人力による遺構検出作業を経て遺構の掘り下げを行い、2月末には遺構をほぼ完掘して3月2日に空中写真撮影を行い、その後図化・だめ押し等を経て16日には現地での作業を終了し、その後年度末にかけて埋め戻しを行って第3次調査を終了した。

西ノ原遺跡第4次調査の経過 12年度の調査は、第3次調査の北側隣接地（I区）と、さらにその市道を挟んだ北の小区画（II区）を対象とし、計3,400m²を調査した。

調査は12年4月16日より着手した。まず、I区を南北に分割して反転調査することとし、南側より表土剥ぎを行った。地山や遺構埋土の状況は南側に隣接する3次調査区と共通していた。なお、調査着手前の3月後半の協議において、急速II区を優先して調査してほしい旨の要望がネクスコ西日本からあり、前年度末にこの範囲の表土剥ぎを終了していたため、I区南半の表土剥ぎ中に作業員を用いてII区の調査を行っている。II区は丘陵頂部付近であり、削平が著しく遺構の残りはきわめて悪く、数個のピットを調査したのみで4月20日には作業を終了した。

4月27日には重機によるI区南半の表土剥ぎ作業が終了し、一部並行して作業員による遺構検出作業を行い、多くの堅穴住居跡と貯蔵穴状の土坑などを検出した。3次調査区と同じように、丘陵頂部はほとんど遺構が残されていなかったが、丘陵斜面下位には多くの遺構が残り、中には深さが1mを越えるような残りのよい土坑も見られた。好天に恵まれて作業は順調に進み、5月22日には遺構掘削をほぼ終了して空中写真撮影を行い、図化、だめ押し等を経て5月28日には現地作業を終了して重機を用いた反転作業に着手した。

I区南半の埋め戻しと北半の表土剥ぎは6月15日にはおよそ終了した。一部並行して作業員を6月5日より投入して、遺構検出に引き続いて遺構の掘削作業を進めた。土質や遺構の検出状況は隣接するI区南半と同様であった。作業は順調に進捗していたが、6月後半のネクスコ西日本との協議の中で、時未遺跡2次II区の調査を優先してほしい旨の要望があり、急速西ノ原遺跡の調査を中断して7月前半～後半に時未遺跡2次II区の調査を行った。このため西ノ原遺跡の調査は当初予定よりややのびて7月31日まで遺構掘削作業を行うこととなったが、8月7日には空中写真撮影を行い、その後だめ押し・図化作業を経て8月21日まで重機を用いた埋め戻し作業を行い、西ノ原遺跡におけるすべての現地作業を終了した。

3 大西遺跡の調査経過

大西遺跡第4次調査の経過 大西遺跡第4次調査は12年8月27日より開始した。調査着手前にネクスコ西日本より調査区東側を優先して引き渡してほしい旨の要望があり、県道犀川豊前線沿いの幅約5mほどの範囲の調査を行った（東区）。この地区は台地の頂部付近にあたり、削平が著しく重要な遺構等は残されていなかった。つづいて北側の路線境界より15mほどの幅について先行引き渡しの要望があり、9月初旬より調査を行った（北区）。この調査区は東半分ほどが丘陵頂部にあたり削平によりほとんどの遺構が失われている一方、西半分は丘陵斜面部にあたり、西に行くほど遺構が深く残されていた。検出した遺構は堅穴住居跡・土坑・掘立柱建物跡などのほかに略南北方向にのびる大溝がある。西区の調査は9月26日に空中撮影を行い、作業を終了した。

つづいて調査区の中央を南北方向に走る段落ちの下、調査区の最も西側に位置する西区の調査を行った。1次調査と同じく丘陵の裾部にあたり、1次調査でも検出していた黒色の土器包含層のほか竪穴住居跡などが現れた。面積が狭小で調査も渉り、西区は10月4日に全景写真を撮影し、調査を終了した。

さらに、残された遺跡の中央から南側にかけての調査を反転しつつ行った。まず南区の調査を10月初旬より行った。付近は削平が著しい箇所にあたり遺構の残りはきわめて悪かったが、やはり西側の斜面部分を中心に竪穴住居跡・掘立柱建物跡、土坑などを検出した。また北区からのびる1号溝の続きを検出したが、本区の中で南北方向から東西方向に緩やかに向きを変えて西ノ原遺跡で検出した大溝の延長方向へとびており、両者が同一の大溝であり、両遺跡の弥生時代後期集落が同一の環濠集落を形成していたことが明らかになったのは大きな成果であった。

南区の調査は11月初頭にはおおよそのめどが立ち、11月7日に空中写真撮影を行って調査を終了した。つづいて反転して最後の調査区である中央区に着手した。中央区の状況も南区と同じでありやはり斜面西側を中心に多くの遺構を検出した。年も押し迫った12月21日に空中写真撮影を行い、12年の年末に大西遺跡の調査を終了することができた。

以上のように、大西遺跡第4次調査は開発側の要望にしたがって調査区を細分しながらの調査となった。このため、区にまたがって存在する遺構の完掘写真の撮影が満足にできない、あるいは重機を用いた表土剥ぎの際に遺構面の深さが隣接区でやや異なってしまった結果、遺構面の高さに一部食い違いが生じるなどの支障が出ることになった。このため、一部で報告に不十分な点が生じているが諒解されたい。このような事情にもかかわらず、検出遺構は方形竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡12棟、土坑12基、環濠、畠畠状遺構など多量かつ多様で、遺物もパンケースにして約120箱という大量の出土を見、貴重な成果を挙げることができた。

4 調査の組織

2011（平成23）～12年度（発掘調査）、15年度（整理報告）に関わる関係者は次の通りである。なお、県の組織改革により、2011年度以降は埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館へと移管されている。

	平成23年度	平成24年度	平成27年度
西日本高速道路株式会社九州支社			
支 社 長	本間清輔	本間清輔	本間清輔(～6.24) 北田正彦(～6.25)
中津工事事務所長	上羽坪 熊(～6.30)	三瀬博敏	宗方鉄生
副所長 (技術担当)	森田忠敏(～9.30) 小島二郎(10.1～)	小島二郎	
副所長 (事務担当)	中村重俊	中村重俊	中村重俊
総務課長	宇都良典	宇都良典	内田伸博
用地課長			和田 勝
用地第一課長	藤江 正	藤江 正	
工務課長	渡辺浩延	渡辺浩延(～1.31) 本田正和(2.1～)	本田正和

	平成23年度	平成24年度	平成27年度
豊前工事長	川端一弘	川端一弘	
上毛工事長	當房周三 (~6.30) 荒平裕次 (7.1~)	荒平裕次	
豊前上毛工事長			大岡慶巳

九州歴史資料館

総括

館長	西谷 正	西谷 正	杉光 誠
副館長 (副理事)			伊崎俊秋
副館長	南里正美	篠田隆行	
参考事			飛野博文 (編集)
総務室長 (企画主幹)	円城寺紀子	円城寺紀子	塩塚孝憲
文化財調査室長 (企画主幹)	飛野博文	飛野博文	吉村靖徳
文化財調査室長補佐 (企画主幹)		吉村靖徳	
文化財調査班長 (技術主査)	小川泰樹	小川泰樹	秦 憲二
庶務			
総務班長	塩塚孝憲	長野良博	中村満喜子
調査・整理報告			
技術主査	小澤佳憲 (調査)	小澤佳憲 (調査)	小澤佳憲 (報告)
主任技師	城門義廣 (調査)		坂本真一 (報告)
臨時調査員	海出淳平 (調査)	海出淳平 (調査・報告)	岡田 諭 (整理)

なお、発掘調査にあたっては、地元の方々、調査に参加された方々、豊前市教育委員会の関係者の方々など、多くの方より御協力を賜った。また豊前市教育委員会の棚田昭仁氏には、発掘作業員の確保にあたってご協力いただいた。ここに記して感謝いたします。

【参考文献】

- 福岡県教育委員会1976『福岡県遺跡等分布地図 築上郡・豊前市』
- 豊前市教育委員会1988『大西遺跡』豊前市文化財調査報告書第5集
- 豊前市教育委員会2000『豊前市内遺跡分布地図』
- 豊前市教育委員会2014『大西遺跡・下大西遺跡-東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1-』豊前市文化財調査報告書第34集
- 文化財保護委員会1968『全国遺跡地図(福岡県) - 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図-』
- 文化庁1984『全国遺跡地図 福岡県』

II 位置と環境

1 地理的環境

立地の概要 ここで報告する遺跡は九州島北東部に位置し、行政区画としては福岡県豊前市に属する。

地形と地質 北九州市と大分県の間、京（京都郡）築（築上郡）地域は、大分県中津・宇佐地域と一体化して幅のせまい海岸平野を形成している。この海岸平野は、北東は周防灘により造られ、北は蔵持山・戸城山・障子ヶ岳とのびて平尾台へと連なる山群、西・南側は国見山・経説岳・八面山群と国東半島により画されて一つの地域的なまとまりを形成し、さらに中央部を国見山系から派生した丘陵群によって南北に分断されて二つの平野を形成する。北の京都平野は今川・祓川など、南の中津平野は佐井川・山国川・駅館川といった中小河川や海の開析・堆積作用により形成された。地質的に見ると、北側に位置する京都平野北・西側の山地は石灰岩や花崗岩から、南側に位置する中津平野の西・南の山地は阿蘇山のほか大野・豊肥・九重火山岩類などの火山岩によって基盤層が形成されている。これらの基盤層は平野部の地下深くにまで広がるほか、河川により運ばれて平野部の基盤層である堆積層の供給元ともなっている。

遺跡の立地 西ノ原遺跡・大西遺跡はとともに、豊前市の中央部を南北に貫くようにのびる低台地「千束原台地」^{ちづかばる} 上に立地する。この低台地は火山岩からなる基盤層を岩岳川・佐井川などの中小河川が解析する中で取り残され、周囲が堆積作用により埋没して低地帯との比高差を減じた旧尾根状丘陵であり、古くより人々の生活の場となってきた。

一方、南東に隣接する永久笠田遺跡は千束原台地の東に広がる平野部に立地する。ほ場整備の進んだ現在、この平野部に目立った凹凸は失われつつあるが、もとはほぼ完全に低地中に埋没して微高地となってしまった低丘陵と、堆積により谷が埋積して形成された微低地がそれぞれ大略南北方向に数条広がって平野の基盤層を形成しており、このうち微高地上は断続的ながら人々の生活の場として利用してきた。永久笠田遺跡もこうした微高地上に立地する。

2 歴史的環境

概要 本書で報告する各遺跡がある福岡県豊前市は、福岡県の東部に位置し、古代律令制下における旧国では南に隣接する大分県の北部（下毛郡・宇佐郡、現在の中津市・宇佐市・豊前高田市の一部）とともに豊前国を形成していた。豊前国には田河・企救・京都・仲津・榮城・上三毛・下三毛・宇佐の8郡があったことが知られ、今回報告する各遺跡はこのうち上三毛郡に所在する。

この地域における歴史的な環境については、本シリーズに繰り返し述べてきたところであり、概要是そちらを参照していただくこととし、ここでは特に3つの遺跡が立地する尾根状台地である千束原台地とその周辺に対象を絞って見ていくこととしよう。

千束原台地は、岩岳川・佐井川などの流れる扇状地の中をこれらの河川と並行するように南北方向にのびる埋没低丘陵・台地であり、その土地条件から古くより遺跡立地の好適地として選ばれてきた。また、千束原台地の東西にはこれよりも比高差は少ないものの低地帯よりも若干高い尾根状の微高地が数条のびており、こうした微高地上にも多くの遺跡が立地する。



- 1 中村团後遺跡 2 中村ヒバル遺跡 3 灰ノ木古墳 4 黒部古墳群 5 黑峰尾古墳群 6 四郎丸窯跡 7 四郎九畠原遺跡
 8 川内下野添遺跡 9 川内南原遺跡 10 川内楠木遺跡 11 平原城跡 12 平原横穴墓群 13 山田城跡 14 鳥越今井野遺跡
 15 鳥越下屋敷遺跡 16 大村湯福遺跡 17 大村天神林遺跡 18 大村道場遺跡 19 大村石畑遺跡 20 大村シトキ田遺跡
 21 青烟向原遺跡 22 荒堀中ノ原遺跡 23 荒堀車地遺跡 24 荒堀大保遺跡 25 荒堀雨久保遺跡 26 今市向野遺跡
 27 下原遺跡 28 昭和町遺跡 29 吉木穴井遺跡 30 吉木當末遺跡 31 吉木遺跡 32 吉木芦町遺跡 33 市丸遺跡群
 34 三毛門放生田遺跡 35 榆生山古墳 36 六郎遺跡群 37 小石原泉遺跡 38 上毛条里遺跡 39 千束原古墳群 40 旭城跡
 41 上塔田遺跡 42 塔田琵琶田遺跡 43 中大西遺跡 44 西ノ原・大西遺跡群 45 末遺跡 46 永久笠田遺跡 47 永久遺跡
 48 上大西遺跡 49 才尾平原遺跡 50 如法寺跡 51 大河内庄屋敷遺跡 52 挾間宮ノ下遺跡 53 萩師寺塚原遺跡
 54 河原田四ノ坪遺跡 55 河原田善丸遺跡 56 河原田塔田遺跡 57 鬼木四反田遺跡 58 鬼木鉢立遺跡 59 久路土種掛遺跡
 60 久路土鍾錦田遺跡 61 久路土種遺跡 62 久路土六田遺跡 63 久路土高松遺跡 64 久路土芝掛遺跡 65 黒土城跡
 66 黒土七夕遺跡 67 広瀬城跡 68 高田城跡 69 大ノ瀬官衙遺跡 70 池ノ口遺跡 71 原田遺跡 72 安雲城跡
 73 安雲ハタガタ遺跡 74 緒方古墳群 75 ツッ枝遺跡 76 龍毛遺跡 77 ハカノ本遺跡 78 山田窯跡群 79 安雲山田遺跡
 80 山田1号墳 81 尻高後楓遺跡 82 穴井横穴墓群 83 德並横穴墓群 84 友枝瓦窯跡 85 土佐井ミソンド遺跡
 86 土佐井小道遺跡 87 唐原神龍石 88 ガサメキ遺跡 89 野台古墳群 90 桑野題古墳群 91 字野代遺跡 92 上桑野遺跡

第4図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)

千束原古墳群 豊前市教育委員会発行の遺跡地図（豊前市2000）によると、千束原台地には多くの遺跡が立地している。中でも著名なものに千束原古墳群がある。豊前市中部における最も大規模な古墳群で、現在の豊前市役所南側から県道犀川豊前線上千束交差点付近にまで広がり、その名「千束（千塚）」が示すように数多くの古墳があったとされる（築上郡史編纂委1956）。古墳時代後期の群集墳と推測され、丘陵上の各所で須恵器片・土師器片などが採集されている。しかし、近世末期の大事業であった宇島港の築港と旭城の建設（いわゆる小倉戦争：第二次長州征討）により小倉城を自焼したため、城内にいた小倉新田藩が明治2（1869）年に領地の豊前市千塚（千塚に新城を建設した）に伴い、千束原古墳群から多量の石材が抜き取られ、古墳群は壊滅したとされ、現在では千束中学校の東にある貴船神社の境内に古墳合集碑が残るのみである。

西ノ原・大西遺跡群とその周囲 この千束原古墳群の推定地南側にはいくつかの遺跡が知られる。いずれも千束丘陵上にあり、北から上塔田遺跡、中島遺跡、東風ノ原遺跡、大西遺跡、西ノ原遺跡が周知化されている（豊前市教委2000）。東風ノ原遺跡を除きいずれも古墳時代の土師器や須恵器が採集されていて、古墳時代後期の集落域が大きく広がっていたものとみられる。おそらく、千束原古墳群を墓域として共有する集落の一つであったろう。

今回の調査では、丘陵東側の西ノ原遺跡と西側の大西遺跡に、ともに古墳時代後期の集落が広がっていることが判明した。丘陵頂部は著しく削平されて遺構が残っていないことも考え併せると、両者は同一の集落の広がりのなかでとらえることができよう。また、遺跡はさらに北側に広がることが豊前市教育委員会の調査により明らかになっており、付近には広く古墳時代後期の集落が広がっている可能性がある。上塔田交差点から南に数百mにわたって連続する遺跡群は、本来は一体の大規模集落であった可能性を考えてもよいだろう。また、千束原台地の東側50～100mほどの場所にやはり南北にのびる埋没微高地には、同じく古墳時代後期の大規模集落である塔田琵琶田遺跡が広がっている（豊前市教委2011）。西ノ原・大西遺跡群とともに有機的な関係を保つ大規模な村落を構成していたのであろう。以上から、西ノ原・大西遺跡の周辺には、付近でも特筆すべき古墳時代後期の大集落が広がっていた可能性が極めて高い。

古墳時代以前にもこの地には大規模な集落が広がっていた。西ノ原遺跡・大西遺跡（豊前市教委1988）では、今回の調査によって弥生時代後期の環濠集落が発見されており注目される。両遺跡で見つかった後期の大溝は、一体となって東西径が130mほどの規模を測る環濠を形成しており、古墳時代後期と同様、両遺跡が一つの集落を形成していたことがわかる。集落は古墳時代前期末まで継続するが、古墳時代前期には前述の塔田琵琶田遺跡群でもやはり大規模な集落が展開する。両者は小さな谷を挟んで50mの至近距離にあり、古墳時代後期集落と同様に相互に密接な関係を保っていたのであろう。

さらに、西ノ原・大西遺跡群では弥生時代前期末～中期前半の集落も検出された。削平が著しく住居跡はほとんど残されていないが、袋状貯蔵穴が数多く検出された。北に隣接する東風ノ原遺跡では弥生時代前期後半～末とされる大型壺の底部片が採集されており（豊前市2000）、当該期の集落は付近にまで広がっていたと推測される。また南にある永久遺跡でも、やはり弥生時代前期末頃の土器が出土している。西ノ原・大西遺跡群とは地形のまとまりがやや異なることから、集落単位としては異なるものであろうが、千束原丘陵がこの時期より人々の生活の舞台となつたことを示す資料として重要である。

永久笠田遺跡とその周囲 永久笠田遺跡は、塔田琵琶田遺跡群のさらに東側にやはり南北にのびる微高地に立地する。周囲には同じような微高地が点在し、これらの微高地上には縄文時代～中

世の遺跡が立地する。永久笠田遺跡の北にのびる一連の微高地上には久路土高松遺跡があり（豊前市教委2010、九州歴史資料館2012）、弥生時代後期の小規模な集落のほか、縄文時代中期・中世の包含層が見つかっている。また、岩岳川西岸を500mほど上流側にさかのぼると、河原田善丸遺跡・河原田塔田遺跡・河原田四ノ坪遺跡など（豊前市教委2002・2003・2004）がやはり平野内の埋没高地上に立地している。いずれも弥生時代中期を中心とする集落遺跡であり、河原田塔田遺跡からは細型銅戈が出土するなど、注目すべき調査成果が挙げられている。さらに中世の遺跡として（推定）薬師寺城跡も知られ（豊前市教委2000）、その隣接地でも薬師寺塚原遺跡で平安時代後期～中世にかけての集落跡が見つかった。長期にわたる人々の生活の痕跡が認められる。

岩岳川とさらに東の佐井川との間にも、やはり同様の埋没高高地と埋没谷が連続し、微高地上に縄文時代から中世の遺跡が点在する。鬼木四反田遺跡では弥生時代前期末～中期初頭・後期中～後葉の集落が発見され、青銅製の鎌・鉈・仿製鏡・中広型銅戈など貴重な遺物が出土した（豊前市教委2005・2006）。久路土幡遺跡・久路土六田遺跡ではそれぞれ弥生時代後期後葉～末・奈良時代の集落跡、久路土鐘撞田遺跡でも奈良時代の集落が確認された（豊前市教委2008・2012）。鬼木城跡という中世城館跡推定地も知られ、やはり長期にわたって人々が生活していた痕跡がある。

また、付近は圃場整備前には条里制区割がよく残る地域として知られていた（小田1993）。実際、久路土鐘撞田遺跡・鬼木鉢立遺跡などの調査で条里制区割を示す溝が確認されているほか、久路土馬踏遺跡・久路土上柳遺跡・久路土慈光庵遺跡・久路土猿楽田遺跡・久路土門田遺跡・久路土二又遺跡などで古代～中世にかけての条里関連遺構や遺物の出土があり、また条里関連地名が各所に残されるなど、水田開発の歴史もたどることができる地域であった。

【註】

小田富士雄1993「第1節 黒郡里制と条里」

豊前市史編纂委員会『豊前市史 考古資料別冊』豊前市

九州歴史資料館2012「久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡」福岡県埋蔵文化財調査報告書第241集

築上郡史編纂委員会1956『築上郡史』（福岡県郷土史叢刊）（臨川書店による復刻版、1986）

豊前市教育委員会1988『大西遺跡』豊前市文化財調査報告書第5集

豊前市教育委員会2000『豊前市内遺跡分布地図』

豊前市教育委員会2002『河原田四ノ坪遺跡（河原田遺跡群Ⅰ）・川内南原遺跡』

豊前市文化財調査報告書第15集

豊前市教育委員会2003『河原田善丸遺跡（河原田遺跡群Ⅱ）』豊前市文化財調査報告書第16集

豊前市教育委員会2004『河原田塔田遺跡（川原田遺跡群Ⅲ）』豊前市文化財調査報告書第19集

豊前市教育委員会2005『鬼木四反田遺跡（遺構編）（河原田遺跡群Ⅳ）・鳥越今井野遺跡』

豊前市文化財調査報告書第20集

豊前市教育委員会2006『鬼木四反田遺跡（遺物編）（河原田遺跡群Ⅴ）』

豊前市文化財調査報告書第21集

豊前市教育委員会2008『久路土六田遺跡・薬師寺塚原遺跡』豊前市文化財調査報告書第24集

豊前市教育委員会2010『久路土鐘撞田遺跡・久路土芝掛遺跡・久路土高松遺跡』

豊前市文化財調査報告書第27集

豊前市教育委員会2012『久路土幡遺跡』豊前市文化財調査報告書第30集

III 西ノ原遺跡第3・4次調査の報告

1 調査の概要

調査地点の所在 西ノ原遺跡は、福岡県豊前市久路土の西端、塔田・大西・永久と境を接する部分に広がる。このうち第3次調査は豊前市久路土3、5-1、57、58-1と同5-3の南半分を対象地として平成23年度下半期に、また第4次調査は豊前市久路土5-3の北半分と同6-1、7-1、8、9-1、10-1、11-2、12、54-1、55、56を対象地として平成24年度上半期を行った。旧状は宅地と畑である。調査対象面積は全体で約5,500m²、うち実調査面積は第3次調査分が約1,500m²、第4次調査分が約3,400m²、計4,900m²である。なお、豊前市教育委員会がこれに先立つ平成22年度中に、東に接する水田面約3,600m²の調査を（西ノ原遺跡第1次調査）、また平成23年度中にさらに北の丘陵裾部に広がる水田面約3,500m²の調査を行っている（西ノ原遺跡第2次調査）。

調査地点の周辺環境 調査地点は、豊前市の東に広がる広い平野地帯の西寄りに位置する。この平野部には南西にひろがる犬ヶ岳山群から流れ出た中小の河川が北流して周防灘に注いでおり、これらの河川の開析・堆積作用によって微妙な凹凸が作り出されている。調査地点はこの凹凸のうち、低地部との比高差が比較的大きな尾根状の低台地（千束原台地）上へ東側緩斜面にあたり（第3図）、低地部との比高差は約3～7mを測る。この台地は南北に長くのびており、古くより人々の生活の場となってきた。

遺跡の範囲 西ノ原遺跡は福岡県教育委員会により付与された東九州道における文化財包蔵地番号の中津29地点であり、豊前インターチェンジ建設予定地のすぐ西側に隣接する本線部分にある。遺跡は台地の頂部から東側緩斜面にかけて広がっており、その東端は塔田琵琶田遺跡との境界となっている用水路まで広がっている。用水路の付近は浅い谷状地形を呈しており、この谷を境に東側が塔田琵琶田遺跡の乗る微高地、西側が西ノ原遺跡の乗る台地となっている。

調査区の設定 西ノ原遺跡は先述の通り東九州道の建設に先立ち平成22年より発掘調査が開始された。これまでに豊前市教育委員会により3次、九州歴史資料館により2次の調査が行われている。今回報告する第3・4次調査は、台地の中央部を南北に走る県道犀川豊前線の東に接する宅地部分から、その東側に徐々に標高を減じながら広がる畑地部分までを調査対象とした。

まず平成23年度の第3次調査では、調査対象地の南側1/3ほどの範囲を調査した。これは、ネクスコ西日本から、平成24年度当初よりこの範囲に工事用仮設道路を先行して建設したいとの要望が示され、これに応えるべくこの部分を先行して調査したものである。

平成24年度には、残された2/3ほどの範囲を調査した。土置き場を確保するため、調査区を南北に2分割し、反転しつつ調査を行った。また、北側の調査区外を東西に走る細い市道をさらに北側に振るのに先立ち、市道の北側をⅡ区として調査した。

2 調査の成果

(1) 概 要

調査区の位置 I区は調査範囲の大半を占める約4,650m²の範囲である。調査区は低台地の頂部

から東側の緩斜面にかけての範囲であり、調査前の旧地形は全体的になだらかに東に下りつつ数段の造成がなされていた。なお、I区の東端には高さ1~3mほどの造成崖面があり、その下段（旧水田面）は豊前市教育委員会による第1次調査地点である。また西側には県道犀川豊前線を挟んで大西遺跡4次調査のI区が広がっている。

I区の北側に細い市道を挟んで隣接する位置に、II区を設定して調査を行った。II区の旧状は宅地であり、旧地形においては西側半分ほどはI区と同じ高さにある一方、東側半分ほどは調査着手前にすでに宅地開発に伴い地下げを受けて低く造成されていた。このため、調査においては主に西側の状況を注目した。しかし、表土をはいでみると浄化槽や建物の基礎などで西側も大きく改変されていて、結局遺構面はI区北端部よりも0.7m以上低く削平された位置にあった。さらに、建物の基礎が縦横に走っていて遺構面自体も著しく攪乱された状態にあった。このため、II区における遺構の残存状況はきわめて悪く、ピットを2基検出したのみで、出土遺物もなかつた。従って、以下の報告においてはI区の状況を記述していくこととする。

土質 I区の旧状は、県道沿いが宅地、東半は畑地であった。県道沿いに近い台地頂部はおそらく旧生活面から1m以上の地下げが行われたものとみられ、表土はほとんど存在せず、地山は火山噴出物由来土で明黄白褐色の粘砂質土から構成されていてかなり固く締まっており、未だ十分に風化していない堅固な基盤の様相を呈していた。一方、東側の畑地は暗赤褐色粘質土により盛土されており、東に行くほどに盛土の高さを増していく。調査区東端部の最も盛土が厚い箇所では1m近くの厚さの盛土が見られた。にもかかわらず遺構面の残存状況はさほどよくなく、特に谷側が大きく削平されていて、東側が失われて全体像が判明しない遺構がきわめて多い状況であった。地山は東に行くほどに赤色味と粘性を増し、風化度合いが進む様相を呈していた。

遺構埋土 遺構の埋土は暗褐色粘質土からなる。地山である赤～明（白）黄褐色粘質土との区別は比較的容易に判断できる。また、古墳時代後期の堅穴住居跡にはカマドが付属しているが、それらに用いられる土は黒灰～暗灰色粘質土であり、これも比較的容易に識別できる。

検出遺構 3・4次調査I区で検出した主な遺構は、方形堅穴住居跡（推定含む）34軒、円形堅穴住居跡5軒（柱穴のみ検出）、掘立柱建物跡1棟、土坑19基、溝4条、通路状遺構3である。このほか、性格不明の落ち込み遺構1基、多数の柱穴などを調査した。これらの遺構の所属時期は弥生時代前期～中期初頭・後期～古墳時代前期・後期を主とする。以下、個別の遺構について詳細を述べていこう。

(2) 堅穴住居跡

調査区の東側緩斜面を中心に、計39軒の堅穴住居跡を検出・調査した。住居跡の平面形態は（長）方形プランのものと円形プランのものがあり、円形プランのものは調査区の北寄りに、方形プランのものは東寄りに偏って配置される。円形プランの住居跡は弥生時代前期～中期初頭に属し、堅穴部は完全に削平されていて、円周に廻る柱穴（や一部では中央炉跡）などの配置から住居跡の存在を推定し、復元したものである。一方、方形プランのもののうち柱配置が判明するものを見ると、2本主柱のものと4本主柱のものがあり、前者は中央炉を持つものが多く弥生時代後期～古墳時代初頭、後者はカマドを持つものが大半を占め古墳時代後期に属する。

なお、調査区の南東部で当初1・2・5号住居跡として検出した遺構については、その後周囲を精査する中で、連続した段から構成される通路状の遺構であるとの認識にいたり、1号通路状遺構と



第5図 西の原遺跡3・4次調査区遺構配置図(1/300)

して報告することとした。従って、1・2・5号住居跡は欠番となっているので注意されたい。

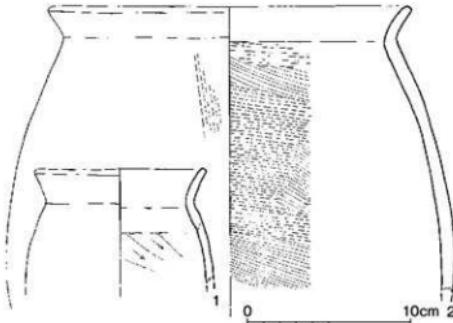
3号堅穴住居跡（図版3、第7図）

調査区の南東隅部にある一段低いテラスで検出した。東側で4・13号住居跡を切り、中央から北東側の大半を1号通路状遺構に破壊され、あるいは斜面の傾斜により削平されて失われていて、東・北壁は残されていないほか主柱穴も発見できなかった。

部分的に残されていた東側のコーナー部付近の周壁溝と北西側の壁から形状と規模を判断すると、平面プランはおそらく方形で、南西壁が3.6m、北西壁が5.6m以上の規模を測る。ただし、南西壁の残存部分とした周壁溝については、底面レベルが東に行くほどに低くなっている。コーナー部と東端部では0.17mもの差がある。付近には、大略同じ方向に数条の細長い溝のがびており、これらの溝のうちの一つと切り合っていたものを周壁溝の一部として掘り下げてしまった可能性もある。出土土器と切り合い関係から、古墳時代後期に属するものであろう。

出土遺物

土器（図版21、第6図）　土師器壘
2点を図示した。1は小片で体部内面に粘土紐接合痕を残すが、箆削りが丁寧に施されている。外面は器表が荒れているが、胎土・作りは丁寧なものである。これがこの住居跡に伴うものであろう。2は1/4ほどの残片。口縁部は短く、外反が弱い。体部内面は丁寧に刷毛目で仕上げ、外面は荒れているがやはり刷毛目が部分的に残る。ほかに、明らかに弥生土器とわかる底部片や高杯口縁部片が混入するが、これらは4号住居跡に伴うものであろう。



第6図 3号堅穴住居跡出土土器実測図（1/3）

4号堅穴住居跡（図版4、第7図）

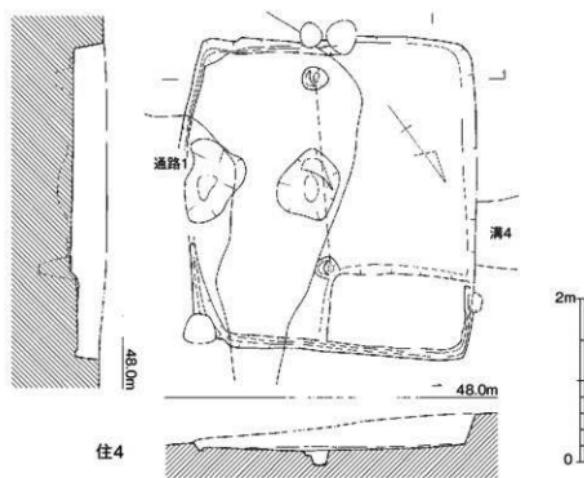
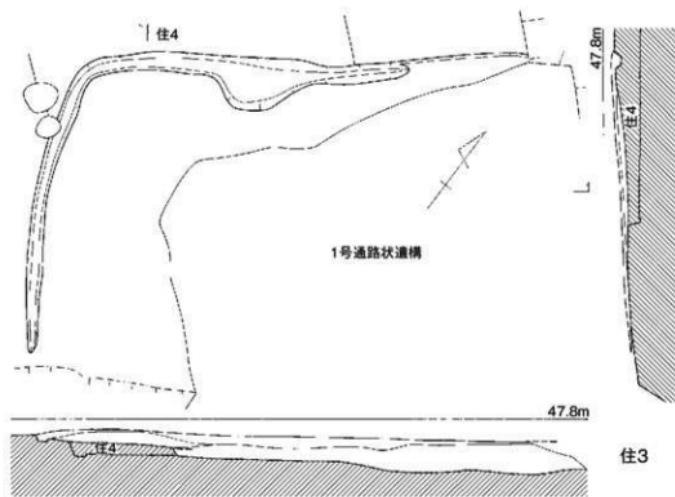
調査区の南東端部にある一段低いテラスで検出した。13号住居跡・2号溝を破壊し、3号住居跡・1号通路状遺構に破壊される。

3号住居跡・1号通路状遺構により破壊された東壁の中央部が完全に失われているほかは、比較的残存状況がよい住居跡で、平面プランはほぼ正方形で規模は3.72×3.34m、残存深さは最もよく残る西壁で約0.4mを測る。住居の中央に炉跡と思われる浅い皿状のピットを持ち、これを挟んで南北に径0.2~0.25mの主柱穴を2本有するが、南側のものは北側のものに比べて深さが0.2mほど浅く、住居跡の壁に寄りすぎている感もあり断定できない。また、東壁の中央部には壁際土坑と思われる深さ0.2mほどの土坑を持つ。

住居跡からは多量の土器が出土しているが、これらの大半は床面直上に堆積した1次埋没土の上から出土しており、住居跡の廃棄後にゴミ捨て場として使用されたものと見られる。

出土遺物

出土石製品・土器の注記は全て「4号堅穴住居跡」である。



第7図 3・4号竖穴住居跡実測図 (1/60)

石製品 (図版31、第73図20～23・26～28・第74図・第75図39) 第73図20～23はいずれも表面が滑らかとなる安山岩。20は図下端が、22は図上下両端が潰れたようになっていて、叩き石として使用されたようである。21は顕著な使用痕は見えない。23も顕著な使用痕は見えないが、図表面がわずかに凹んでいる。26は全体に表面が滑らかとなり、図上端が欠損する。27は図表面が明らかに使用によって凹んでいる。28では下に図示した凹みは使用によるものであろうが、上に示した凹みには確信が持てない。背面も平滑化していて、これも使用によるものであるかも知れない。図左および下側面は欠損している。これらも安山岩である。

第74図には全体に滑らかとなるものの顕著な使用痕が認められない安山岩を図示した。31は図右を欠損。32は図左右及び背面を欠損する。33・34は図示した面がわずかに凹む。35は図上端が大きく欠損し、右から下にかけて弾けたように剥離する。図背面から表面の外周が赤変していて、被熱により弾けたようである。上端に大きな凹みが見え、他にも小さな凹みが处处にあるが、小さなもののは使用によるものか判断できない。36も背面から側面が赤変し、背面ではほとんどが剥離している。被熱の痕跡は右側面の破面には及んでいない。鋭利な金属を擦ったように見える図表面に明瞭な段差がある。37は図裏の面が砥石に近く特に平滑となる。

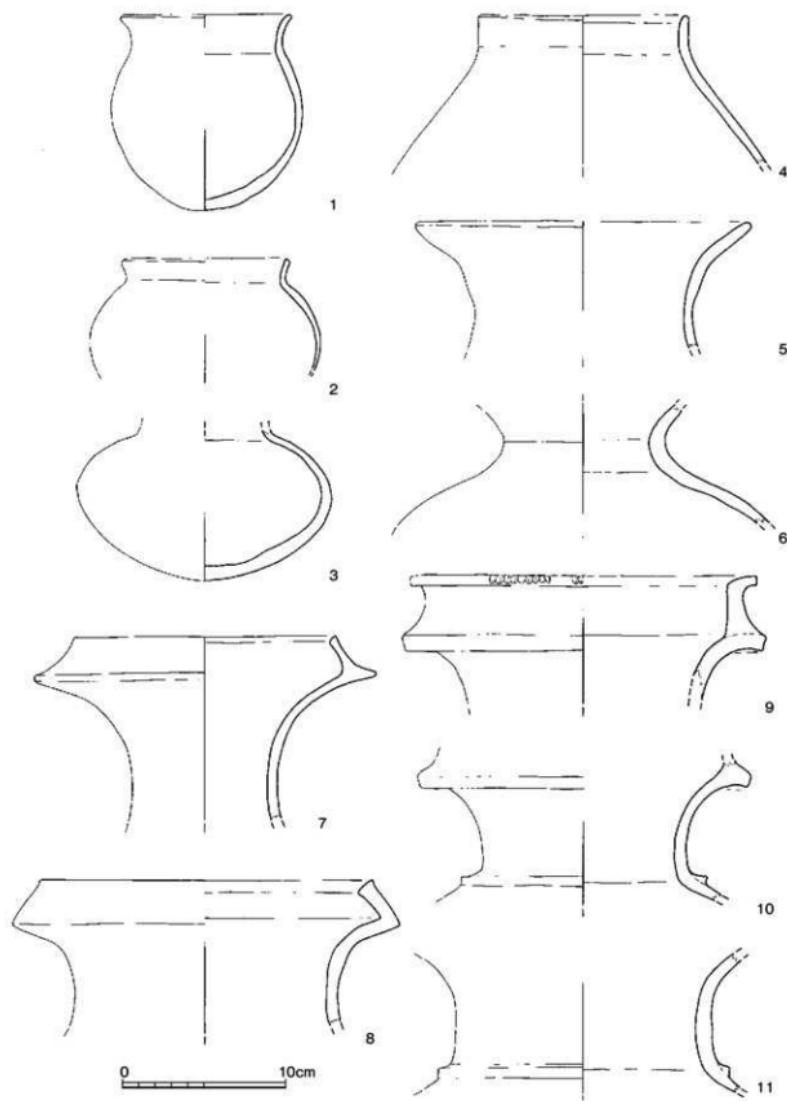
第75図39は図示した面がわずかであるが凹んでいて、背面が平滑となる安山岩。

土器 (図版21～24、第8～16図) 1～3は小型壺である。1は口縁部の1/2が残存、頸部以下はほぼ完存する。体部の張りおよび頸部の締まりが弱く、口縁部の反転も小さい。図ではほぼ丸底に見えるが、底部はなお小さな平底を保つ。器表が荒れていて、調整痕は見えない。2は口縁部の1/4が残存。これも口縁部の外反が弱いが、端部に面をもつ。胎土は良好であるが、器表が荒れていて調整痕は見えない。3は口縁部を欠くが、図示部はほぼ完存。体部の張りが強い壺で、これも器表が荒れている。

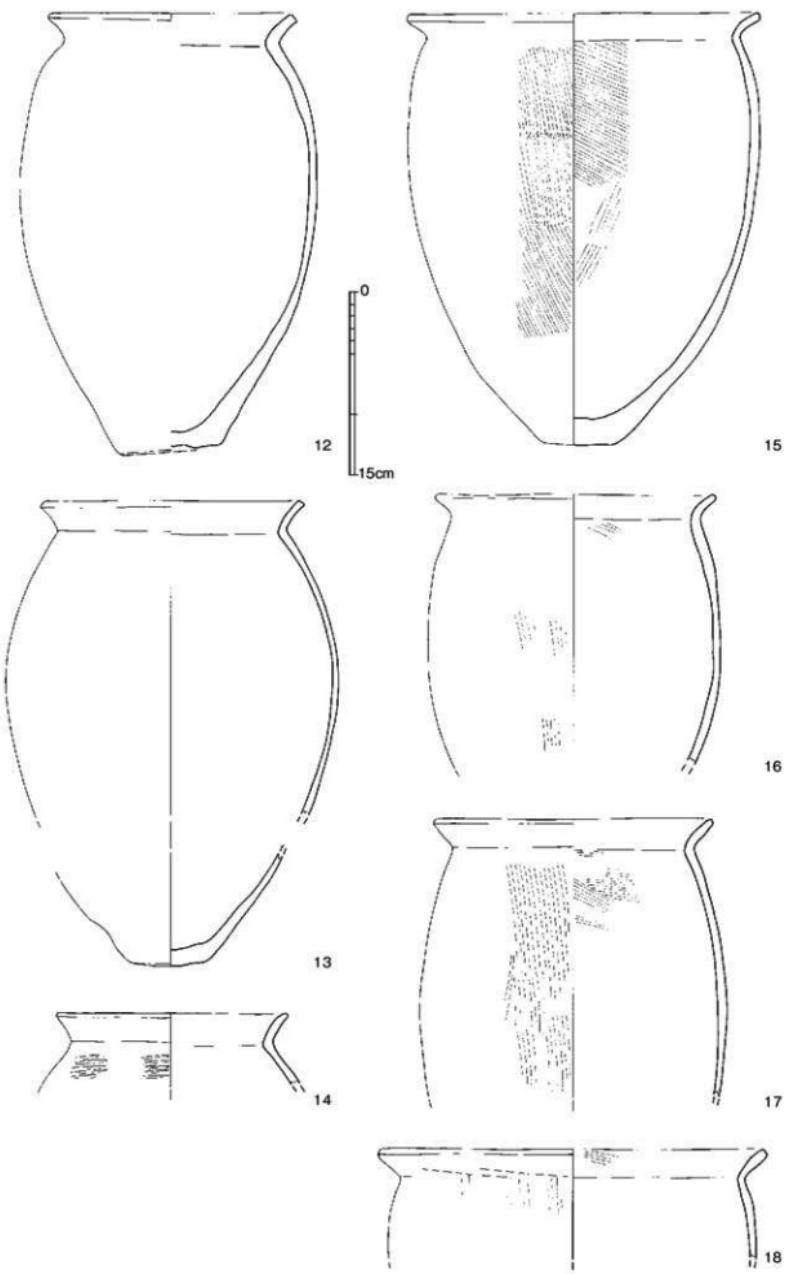
4は撫で肩の変わった形状となるが、図で口端部とした部分が本来的なものか定かでない。口縁部の1/3が残存するが器表に弾けが多く、また全体に荒れている。5は口頸部が大きく開くもので、これも器表が荒れる。口縁部とした部位の1/3が残存する。6は張りの強い肩部からC字形に外反するが、口縁部を欠く。頸部の1/3が残存、これも器表が荒れる。

7～11は二重口縁壺。7は頸部が高く伸びて屈曲部が籠状に突出するもので、口端部に面をもつ。籠状突出部はほぼ完存するが、器表が荒れて調整痕は見えない。8は屈曲部がく字形となり、やはり口端部にしっかりした面をもつ。屈曲部の1/4が残存するが、器表が荒れている。9は口縁部が垂直に近く立ち上がり、端部もまた直角近くに折り曲げていて端面に浅い刻みを付す。口縁部の1/3が残存、赤く焼き上がるようであるが器表は荒れている。10は肩部突帯付近で2/3が残存、これは焼けて赤変する。11は同突帯付近で1/4が残存、この2点も器表が荒れている。

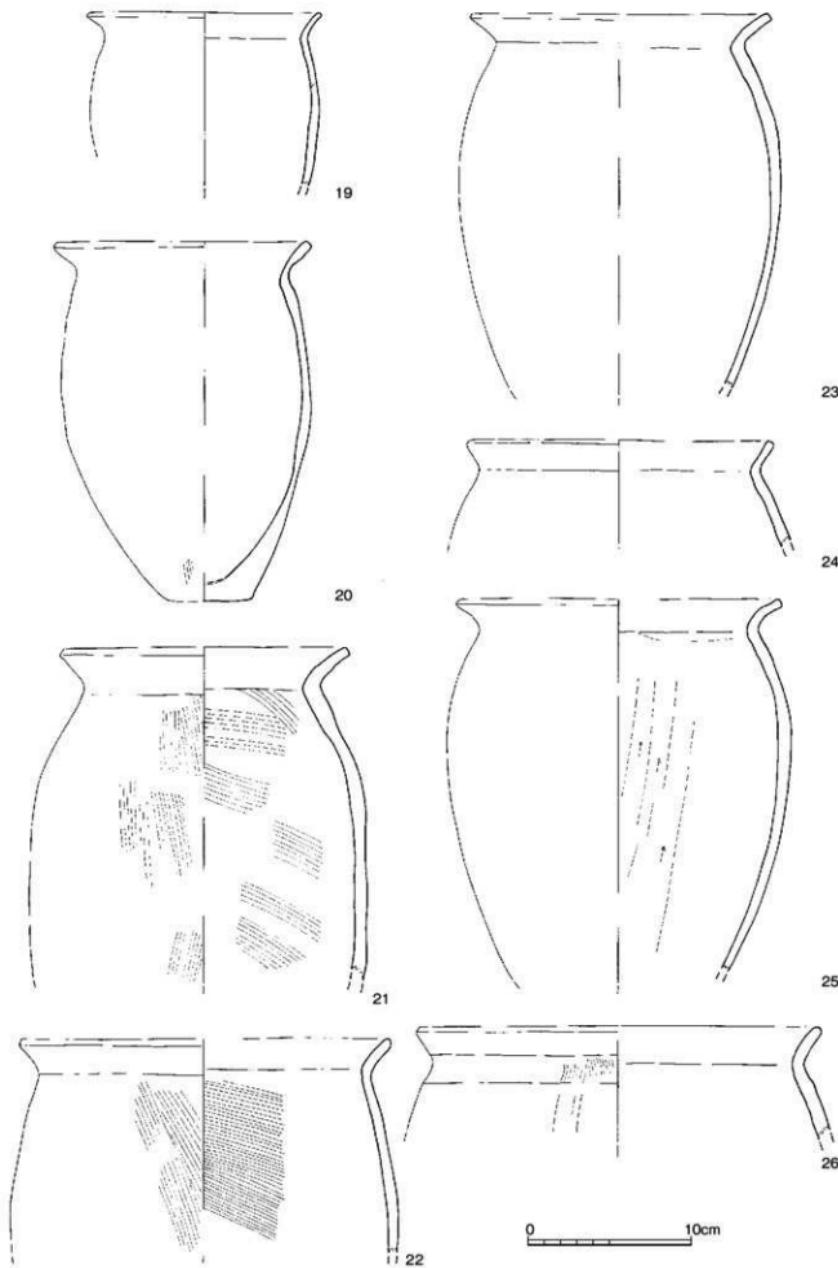
12～43は概ねく字形となる口縁部をもつ壺であるが、細部は変化する。底部は平底が優勢であるが、34のように丸底のものも存在する。12は口縁部の3/4が残存し、体部を完形に復元できたものであるが、器表が非常に荒れている。底部はしっかりとした平底で、体部下端は被熱赤変する。13は口縁部が小片となるが体部は3/4が残存、接合しないが同一個体と思われるやや形状不整な底部は完周する。内面は底部から口縁部まで大部分が黒色化し、対応する体部外面も黒色化あるいは赤色化するが、口縁部外面は変色していない。体部下端付近では1/3ほどが赤変する。14は口縁部の1/4が残存する。頸部内面にはしっかりした稜が見え、体部領外面には幅広く浅い叩きが残る。15は口縁部の1/4が、平底となる底部付近は完周する。外面では体部上端付近が本来の灰黄褐色、中位付近が黒色化、下端付近が赤変する。16は



第8図 4号竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第9図 4号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/4)



第10図 4号竪穴住居跡出土土器実測図3 (1/3)

口縁部の1/2が残存する。外面は頸部付近の一部が黒色化、肩部付近には変色が見られないが器表が最も荒れていて、最大径部付近から下位は煤けるようである。胎土は比較的良好といえる。17も胎土は比較的良好で、体部外面は若干煤けていて、同内面は器表が荒れている。頸部付近で1/4が残存。18も頸部の1/4が残存、比較的胎土良好な土器である。

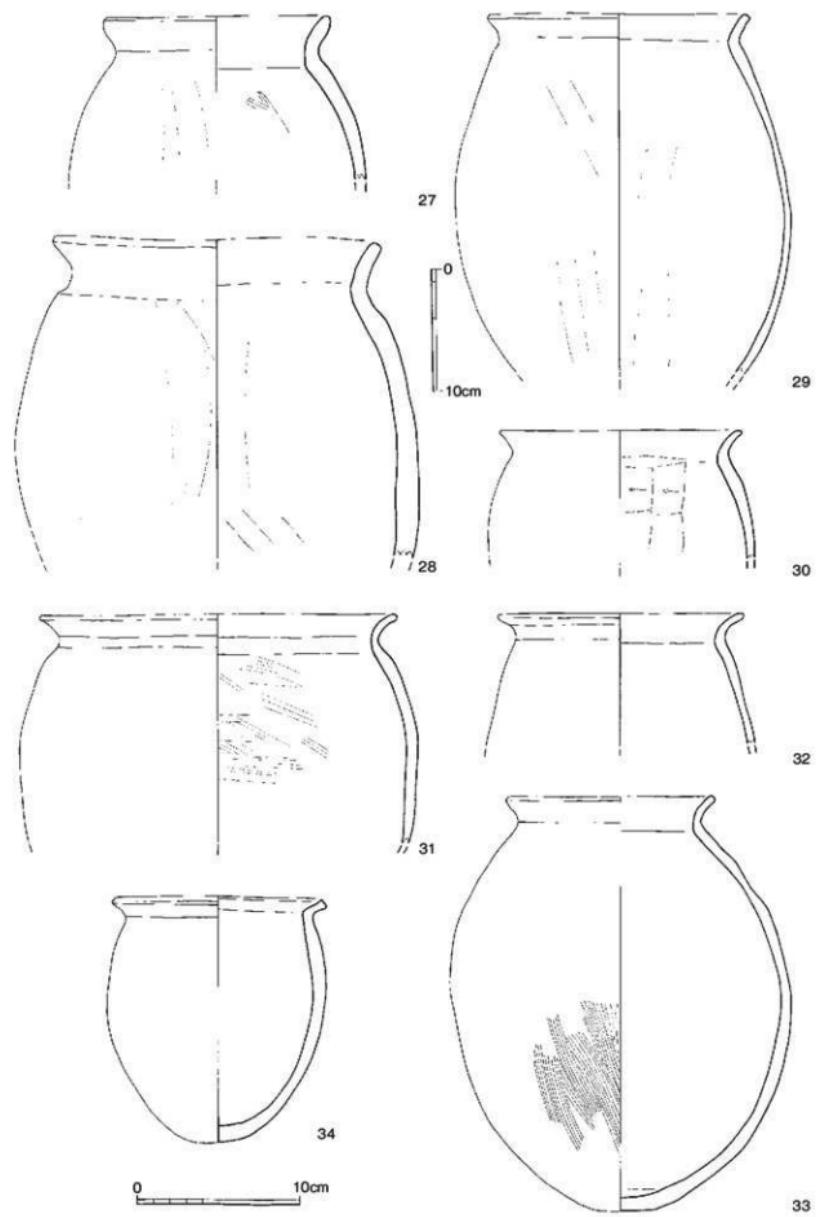
19は頸部が緩く丸みをもって外反する薄手の壺で、頸部の1/2が残存する。胎土は比較的良好で、体部内面に粘土紐接合痕が見えるが調整痕は残らない。20は体部下半が完存、頸部付近は1/2が残存する。外面は全体に赤変するが、底部のそれが最も甚だしい。一部では器表が剥げている。また、底部は平底となるが、平面的には不整円形で平坦化は刷毛目技法でなされているようである。21は肩部付近以上が完存する厚手の壺で、体部の張りが弱い。22は小片であり、復元口径に不安がある。23は体部の1/2強が残存する。体部下半外面は赤変、対応する内面は黒色化する。また、胎土に角閃石・クサリ礫が非常に目立つ特徴的な土器であるが調整痕は見えない。24は1/4の残片で、口端部付近の内外面が黒色化する。25は頸部の1/3が残存する。体部下半外面が赤変、同内面が黒変し、胎土に角閃石・クサリ礫が非常に目立つなどは23に共通する。これは体部内面を箒削りで調整する珍しい例である。26は小片からの復元で不安がある。器表が荒れているが、頸部外面に刷毛目が見える。

27・28は口縁部の外反が弱く肉厚となる壺で、27は小片のため復元口径に不安がある。28は不整となる口縁部の1/2が残存する。ともに胎土は比較的良好で、体部外面には条線が見えるが砂粒の移動は認められず弱い刷毛目のようなである。28では体部内面も砂粒の移動は見られず、撫でのようである。29は口縁部が短く外反するもので、頸部の1/2が残存する。これも体部内外面に28と同様な条線が見えるが、積極的に箒削りを認めるることはできない。30~32は口縁部が短く外彎する壺。30は口縁部の1/2が残存。胎土は良好といってよく、体部内面は箒削りで調整するように示したが確信はない。31は頸部の1/4ほどが残存、これも器表が荒れているが、体部内面に刷毛目が見える。32は小片であり、復元口径に不安がある。33も口縁部は先の3点に似るが、これはほぼ完存する。底部は平底を保つが、体部へと丸みをもって移行するために一見丸底のように見える。器表が赤変、荒れている。34もほぼ完存する壺で、これは丸底化する。口縁部が強く外反し、端部に面を作っている。器表は荒れていて、調整痕は見えない。

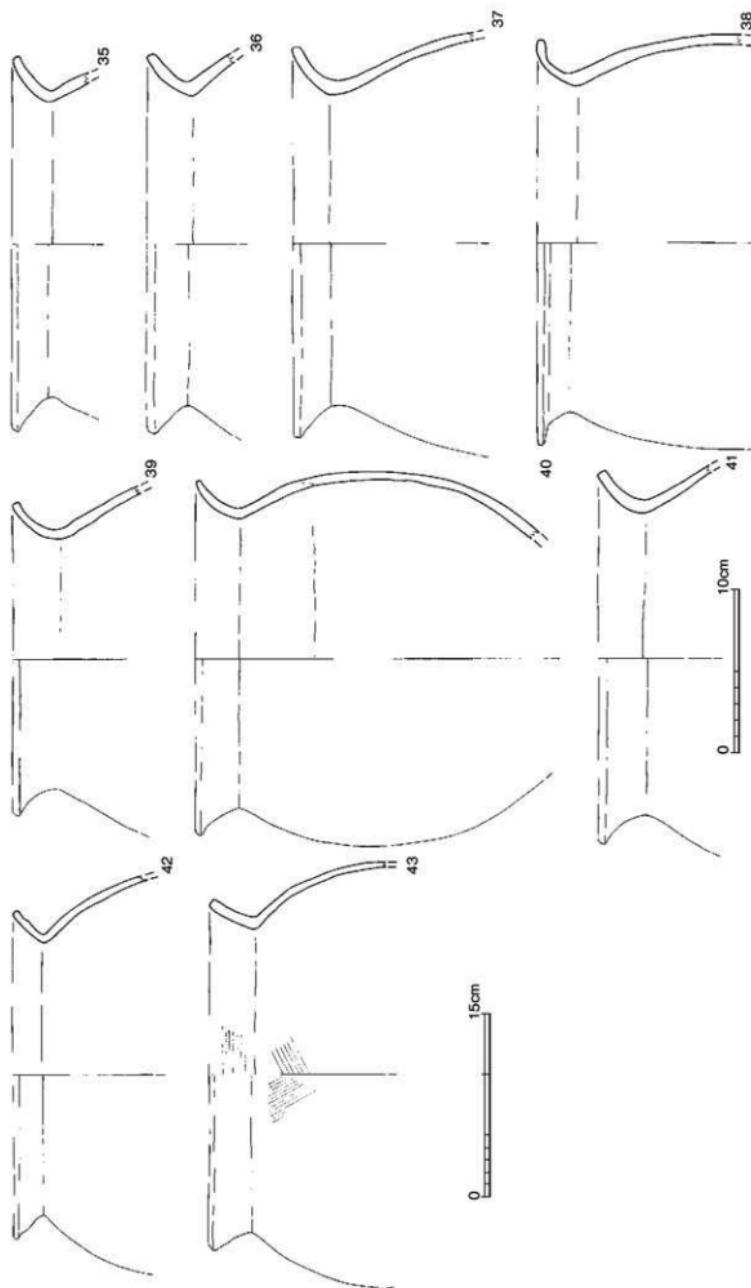
35~41は口縁部が比較的大きく外反する壺である。35~37はいずれも小片。35は胎土良好で、灰白色~黄白色となるが器表は荒れている。36・37は頸部外面が赤変する。38は口縁部が強く外彎する1/4の残片。胎土は比較的良好である。39は口縁部付近が1/3残存するもので、全体に赤変して器表が荒れる。40は頸部の1/4が残存。器表が荒れているが、角閃石や茶褐色クサリ礫が顕著である。内面に粘土紐接合痕が残る。41は39に似る小片。42は口縁部に微妙な変化を加える壺で、口縁部の1/4が残存。器表は荒れる。43は口縁部が肉厚となるが、やはりわずかに変化を加えている。

44は張りの強い体部に急角度で浅く強く外反する口縁部を付すもので、壺とすべきか。底部付近は2/3が残存するが、口縁部は小片である。内面では底部付近に強い撫での痕跡が見え、その他の部位も刷毛目・箒削りは認められず、弱い条線をほぼ全面で観察できることから全体が撫でて仕上げられているようである。外面も同様である。なお、外面は赤味をもって焼き上がり、内面下半は暗褐色~黒褐色となる。胎土は普通ないしは粗いといってよい。45は低平かつ形状不整となる突帯を付す壺の体部片で、器表が荒れている。46~52は底部。

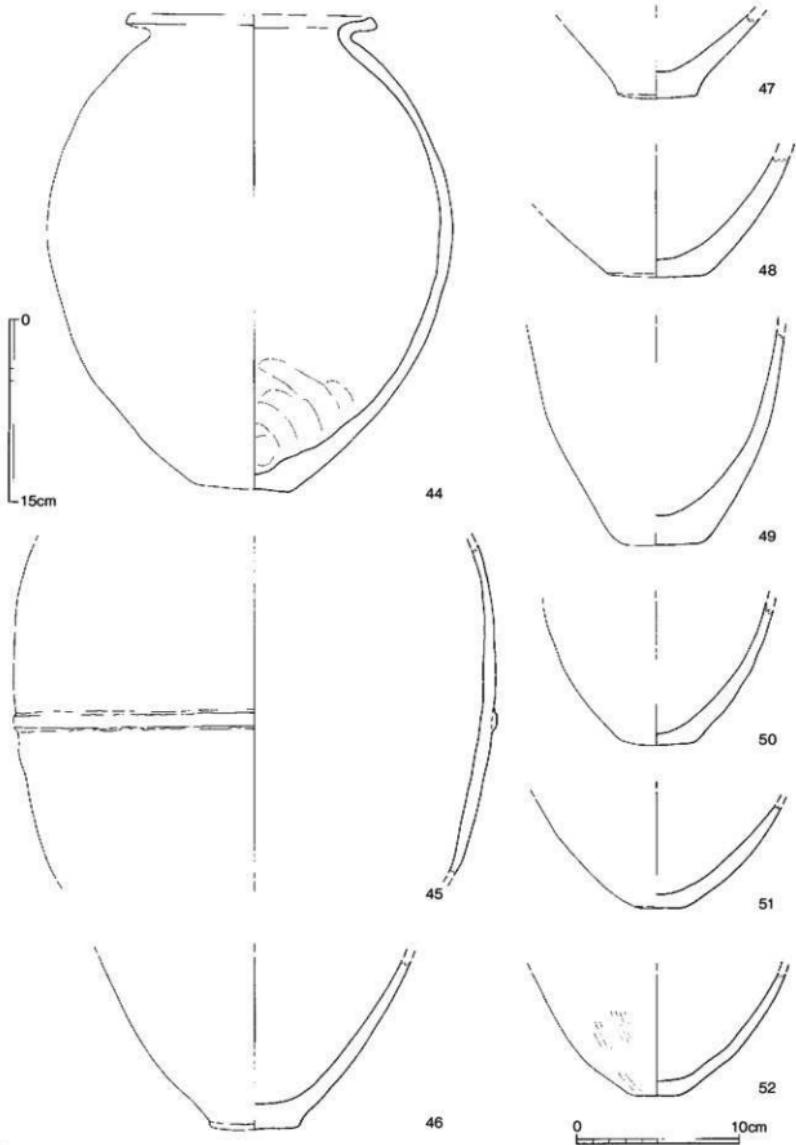
53~56は鉢、59も鉢であろう。53は口縁部付近で1/3が残り、中位以下は完存する。小さな平



第11図 4号竪穴住居跡出土土器実測図4 (29は1/4、他は1/3)



第12圖 4号竪穴住居跡出土土器実測図 5 (42・43は1/4、他は1/3)



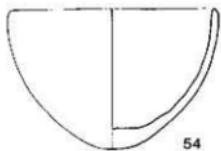
第13図 4号竖穴住居跡出土土器実測図 6 (44・45は1/4、他は1/3)



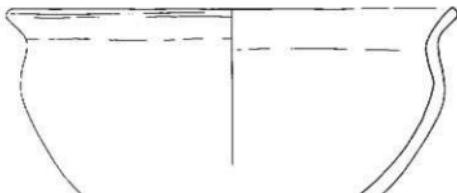
53



55



54



56



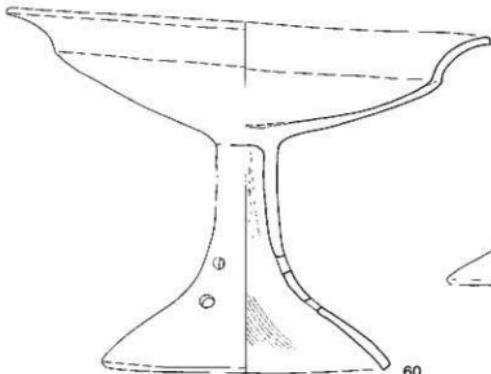
57



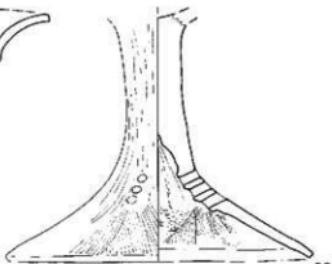
58



59



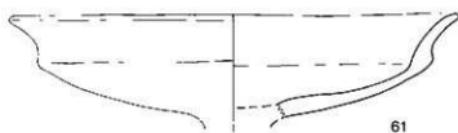
60



62



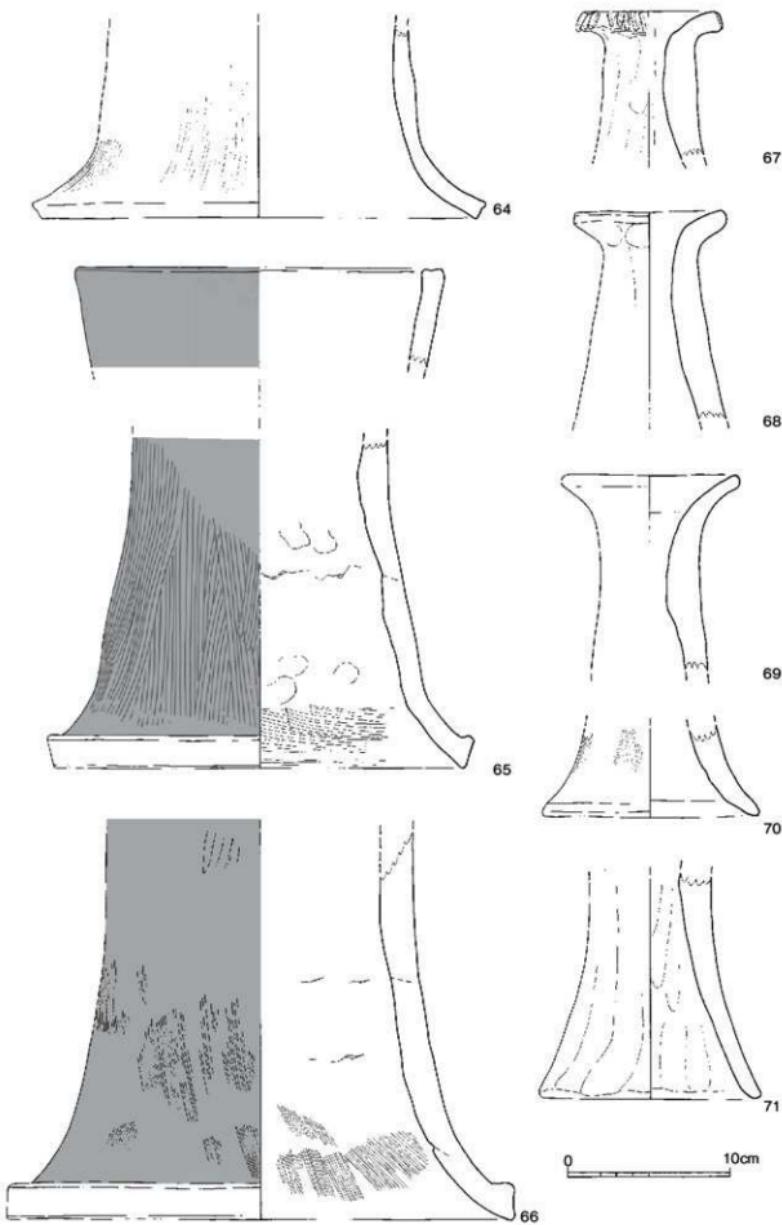
63



61

0 10cm

第14図 4号堅穴住居跡出土土器実測図7 (1/3)



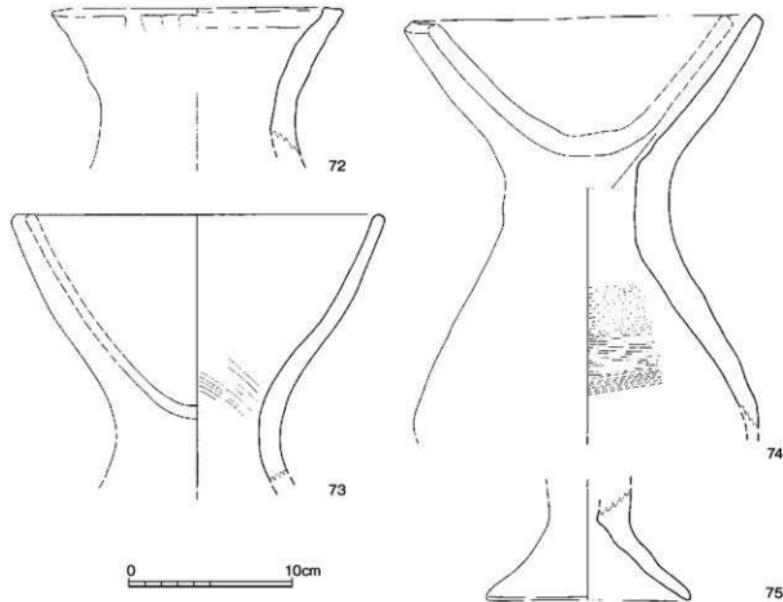
第15図 4号竪穴住居跡出土土器実測図8 (1/3)

底から丸みをもって立ち上がり、口縁部がわずかに内傾する。胎土・作りともに良好で、内面にはほぼ全体に白色の付着物が見られる。54は砲弾形に近い形となり、口縁部付近で1/4が残存する。これも胎土は良好、内外全面が赤変する。55は口縁部を折り返す形の小片で、器表が荒れる。56は底部を欠くが、頸部付近で1/4が残存する。体部最大径付近からやや下位の内面が赤変し、その周辺は黒変している。底部外面付近には煤も見られる。59も口縁部付近で1/4ほど残存、これも器表が荒れている。

57・58は手捏ねの小型土器で、57は胎土良好で内面が平滑化するなど丁寧に作られた感がある。58は形状不整なもの。

60～62は高杯。60は胎土・作りともに良好ではほぼ完存する。口縁部は短く強く外彎し、杯部は浅い。脚部は裾部が膨らみ気味に広がり、縦2段の円形透孔が3方に穿たれている。器表が荒れていて、調整痕はほとんど残らない。61は杯部の1/3の残片で、全体の形状は60に似るが、肉厚となっている。これも器表が荒れていて、外面はほぼ赤変する。62は縦3段方に透孔を配する脚部で、この裾部は直線的に開く。また、これのみは調整痕がよく残る。63は異形の器台あるいは高杯であろうか。胎土良好で器表が荒れている。

64～66は当地では珍しい形の器台である。64は脚端部の1/3が残存、底径28.0cmを測る器台で、脚端面および脚端部付近の内面が黒色化し、外面は全体が赤変している。器表が荒れているためもあるが、径5mmほどの石英粒が隨所に見える。65は接合しないが、同一個体と思われる口縁部・脚部である。一見、口縁部・脚部の取り扱いが逆のようではあるが、口縁部とした残片では内外面を施磨きで仕上げていること、口縁部では端面まで赤色顔料を塗布するが、脚部では端部に作りだした面に顔料を塗布していないなどからこのように判断した。直線的に角度をもって開く口



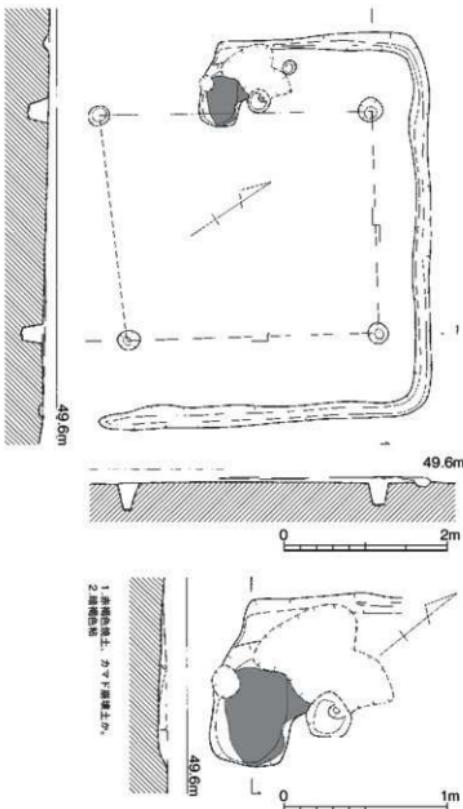
第16図 4号竪穴住居跡出土土器実測図9 (1/3)

縁部は1/4の残片である。脚部も1/4ほどが残存、胎土良好で、脚端部を除く外面に赤色顔料を施す。なお、内面は灰黄色となっている。外面を縦位の、脚端部内面を横位の刷毛目で仕上げるが、刷毛目の及ばない内面は指頭痕及び粘土紐接合痕が見える。外面の赤色顔料はよく残る。66も1/4ほどの残片で、65によく似るがこれは器壁がより厚くなっている。脚端部の面はほぼ垂直となり、その垂直となる面のみ赤色顔料が塗布されず、その上面以上は剥落が進んでいるとはい、赤色顔料の痕跡が残る。これも胎土は良好といってよく、内外面ともに細かい継刷毛で調整されるが、内面では粘土紐接合痕が残る。

67・68は口縁部（受け部）直下で屈曲して小さく開く器台。67は1/2が残存、口縁部に幅・配置が崩れない押圧痕を刻む。胎土は非常に良好といってよく、微砂粒を交えるのみである。内外面で縦方向に焼けている。68も胎土の状況や形が似る。これはあまり使用されていないのか、体部付近では熱を受けたように見えないが、口縁部及び残存部下端付近は赤変する。69は先の2点のように屈曲はしないがやはりくびれが上位に位置する器台で、胎土・作りも比較的良好といってよい。外面の一部が焼ける。70も胎土良好な器台で、脚端部の内外面がよく赤変し、以上は灰黒色～暗灰色となる。71も胎土良好な器台脚部片。これも脚端部付近の内外面が焼けて真っ赤となる。外面は調整によって生じた幅広い面が見えることから、撫でているのである。

72は上端が1/2強残存する器台片。端部を内側に小さくつまむ点や、外面上端付近がよく赤変していて、脚部とした方が妥当であるかも知れない。これは角閃石・クサリ礫が頗著。73・74は抉り入りの器台。胎土は比較的良好で、赤変する部位は見えない。部分的に焼けるようだが、使用法を窺わせるものではない。74は角閃石・クサリ礫が目立って粗い胎土であるが、これも変色が乏しく、あまり使用されていないようである。脚端部についてはほぼ全周で欠損していて、図示した形状が本来的なものか不安がある。75は脚端部が歪んでいて、残存部上端部は剥離面となる。中央の孔は穿孔というより成形時から塞いでなかったようで、この部分が火熱赤変している。

6号竪穴住居跡（図版4、第17図）



第17図 6号竪穴住居跡・同カマド実測図（1/60、1/30）

調査区南端の東寄りで検出した。平面形状がおそらくほぼ正方形を呈すると思われる住居跡で、単独で存在しておりほかの遺構との切り合い関係はない。

主軸は略東西方向でわずかに北に振れ、東壁の中央部に作り付けのカマドを有する。著しく削平されていて遺構の残存状況が悪く、壁溝とカマド跡、主柱穴が検出できたのみである。南東側に少しづつ下がる、ごく緩やかな傾斜の中にあり、南側の周壁溝の東半分と西側の周壁溝の南半分弱が失われている。なお南壁の西半は調査区外にのびている。周壁溝で囲まれた内部は周囲の傾斜に沿ってわずかに南東側に下っており、おそらく本来の住居床面は失われているものとみられる。ただし、カマドなどの遺存状況から、床面の削平はごくわずかとみられる。主柱穴は4つすべてを確認し、いずれも直徑約0.3m内外、深さは検出面から0.25~0.3mで共通する。住居跡の規模は東西長が4.44m、南北幅は南壁溝が出土していないため不明だが主柱穴の位置を参考にする3.96mほどと推測される。

カマド

住居跡西壁のほぼ中央部に作り付けのカマドの痕跡を検出した。住居跡の削平が著しく、袖は完全に失われているが、燃焼部が一段掘り込まれており、その底部に被熱による赤変硬化面が形成されていてカマドの存在が判明した。カマドの詳細な構造は不明だが、おそらく壁から垂直に2本の袖がのびる内接型のタイプとみられ、袖の長さは少なくとも0.8m以上、袖間の幅は0.5m程度と推測される。赤変硬化面の位置からおそらく北側の袖の先端部にあたると思われる位置に径0.25m、深さ0.1m弱の小ピットを検出した。袖先端部に立石を設置していた痕跡の可能性があろう。

土師器小片が若干あるのみで、時期比定に堪えるような土器片はない。

7号竪穴住居跡（図版4・5、第18図）

調査区南側の東寄りで検出した。6号住居跡の北東側に隣接する。単独で存在しておりほかの遺構との切り合い関係はない。

主軸は略東西方向で35°ほど北に振れ、東壁の中央部に作り付けのカマドを有する。わずかに西下がりの斜面にあり住居跡の西側が削平を受けているが遺構の残りはよく、全形を残す遺構である。遺構の平面形状は横にやや長い方形でわずかに台形状を呈し、規模は中央部で東西長4.02m、南北幅4.62mを測る。残存する深さは深いところで0.2m前後である。床面からはカマドのほか4本の主柱穴を含むいくつかのピット群、周壁溝を検出した。主柱穴は住居跡の平面形状に合わせてやや台形状に配置され、いずれも深さが0.5m前後あってしっかりした掘り込みである。またカマドの対面にあたる東壁中央部から0.2mほどの位置に直徑0.4m、深さ0.2mほどのピットがあり、出入り口に関連する施設（梯子固定用の穴など）の可能性がある。周壁溝はカマド部分を除く四周に巡らされ、北西を除く各コーナー部分に段が認められる。住居跡の内部からは細長い石材がいくつか出土しており、後述するようにカマドの開口部の補強に用いられたものがあろう。

カマド

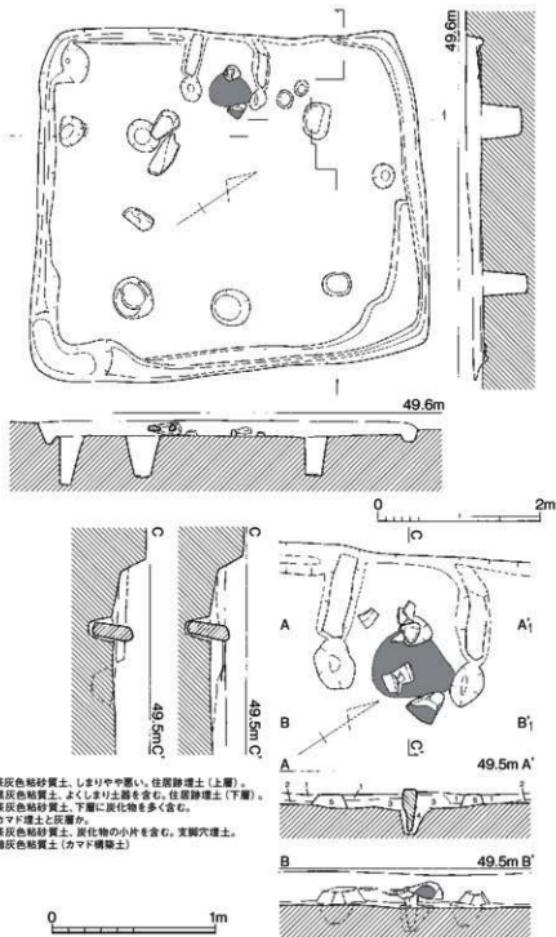
住居跡の西壁中央部に突出型のカマドが作り付けられている。袖は壁からほぼ垂直にのび、袖間の距離は0.6m程度を測る。袖は粘土で作られていて長さは約0.6mを測り、その先端部に石を立てるための穴が開いていた。住居跡の内部からは細長い形状をした石材が4つほど出土したが、いずれも被熱により赤変した面を有しており、うち2つは接合したことから、計3つの石材がカマドに用いられていたことがわかる。うち二つは袖の先端部に立てられ、その上にもう一つが乗せられてカマドの開口部を補強していたものがあろう。

カマドの中央部・奥壁から約0.4mの位置に床面からの高さが0.12mほど突出して立てられた支脚用の立石があり、その付近に大型の甕片が散乱していた。カマド内部の堆積最下層には灰層と思われる炭の集中部が認められた。

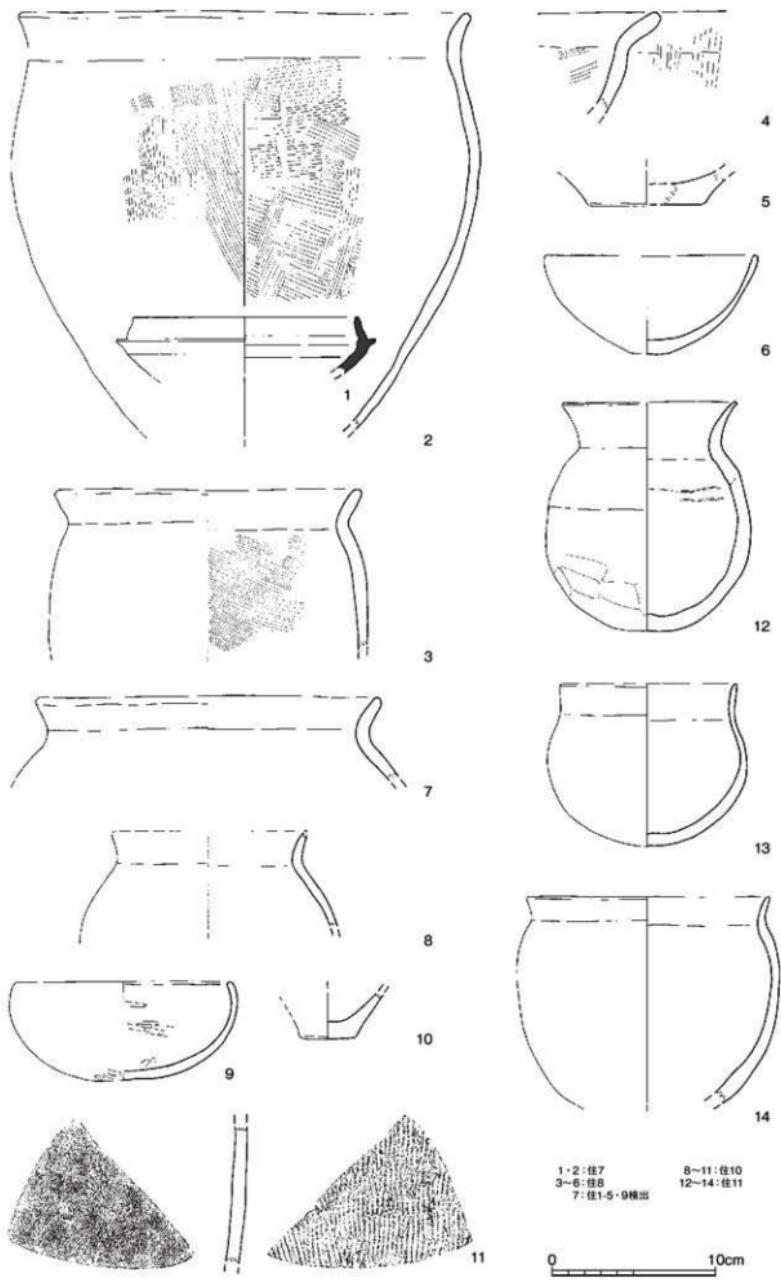
以上の状況から、本カマドは住居跡の廃棄時に開口部の補強石材が抜き取られ意図的に潰されているものの、灰の掻き出しや支脚の抜き取り、甕の取り出しなどの行為を伴っていないことがわかる。

出土遺物

土器（図版24、第19図1・2） 1は南西隅付近の床面に近いところから出土した須恵器杯身



第18図 7号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60, 1/30)



第19図 7~11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

で、1/4ほどの残片。焼成不良で灰白色に近く、器表が非常に荒れている。2はカマド内から出土した土器器で、口縁部付近で1/4が残存。口縁部が緩く外反し、体部がわずかに張る。内外面に刷毛目が見えるが内外の器表が荒れていて、特に体部下位の荒れがひどい。

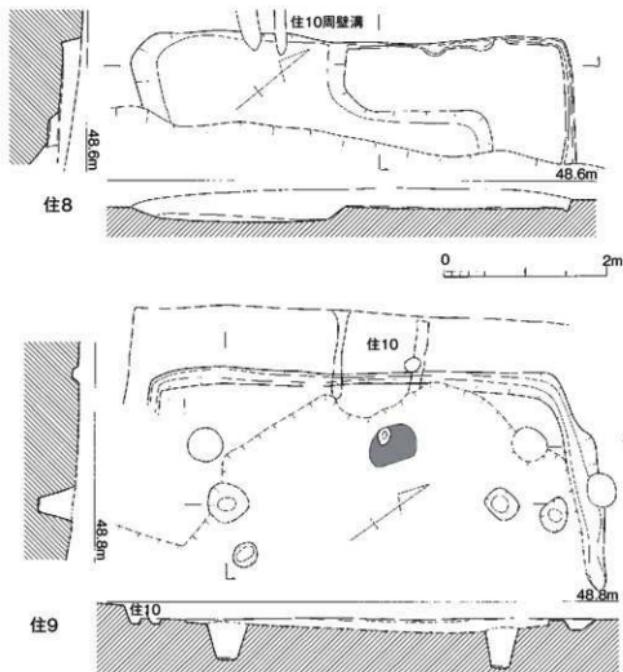
8号竪穴住居跡（図版3、第20図）

調査区南寄りの東端部で検出した。南側で9・10号住居跡の周壁溝に切られ、東側は段落ちで大半が失われていて、西壁と南北壁のごく一部のみが残存する。

規模は南北長のみ判明し4.96mを測り、東西幅は最大1.46mが残る。主柱穴も見つかっておらず平面形態は不明だが長方形プランを呈するものか。北西コーナー部付近に床面より0.15mほど高いベッド状遺構が敷設されるほか、北壁と東壁の北半分には周壁溝も残る。

出土遺物

土器（第19図3～6） 須恵器壺片が1点あるが、図示した土器の時期としてよからう。3は小片からの復元で口径に不安がある。胎土は比較的良好で、内面には刷毛目がよく残るが、外面は被熱赤変していて器表が荒れる。2も小片で、肉厚の土器であるが胎土は比較的良好といってよい。器表が荒れているが、内外面に刷毛目が見える。ただ、内面は鏡磨きで仕上げているように見える。5はしっかりした平底の底部片で、1/4が残存。胎土良好で、外面はほぼ全面が焼けて赤変す



第20図 8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

る。6は小さいながらしっかりととした平底をもつ鉢で、底部付近の1/2、口縁部付近で1/4が残存する。器表はほぼ全面が剥落し、調整痕が見えないが丁寧に作られた感がある。

9号竪穴住居跡（図版5、第20図）

調査区南寄りの東端部で検出した。8・10号住居跡と切り合い関係を持ち、8号住居跡を一部破壊する。また、10号住居跡によって全体を大きく削平されていて壁周溝と主柱穴のみが残る状態であるほか、東側の斜面に位置しているため、東側の半分以上が段落ちにより大きく破壊されて完全に失われている。

住居跡の規模は南北長がほぼ完全に残された西壁の長さで約4.90m、東西幅は約半分ほどが残されたとみられる北壁で2.4mほどを測る。主柱穴は西寄りの2本が残され、直径0.3m、深さ0.4~0.5mほどの柱穴が3.4mほどの間隔で並ぶ。主柱のちょうど中間にあたる西壁沿いで小ピットと焼土面を確認しており、カマドと支脚穴と見られる。以上より、本住居跡は平面プランが1辺5m弱の規模を持つ正方形の4本主柱の住居跡で、西壁中央に内接型のカマドを持つものと復元することができる。カマドの焼土面がかろうじて残されていることから、西壁寄りでは住居跡の床面レベルがかろうじて残存しているものと考えられよう。削平により理土の大半が失われており出土遺物は皆無であるが、住居跡の構造から古墳時代後期のものとみられる。

出土遺物

土器（第19図7） 固有の出土土器はないようである。ここに図示した土器には「1~5、9号住居跡検出」との注記があるが、当初「1~5号住居跡」としたものと9号住居跡は離れていて、意味が不明であるが、関連する可能性のある土器として紹介しておく。

土師器壺の小片で、器表が荒れている。

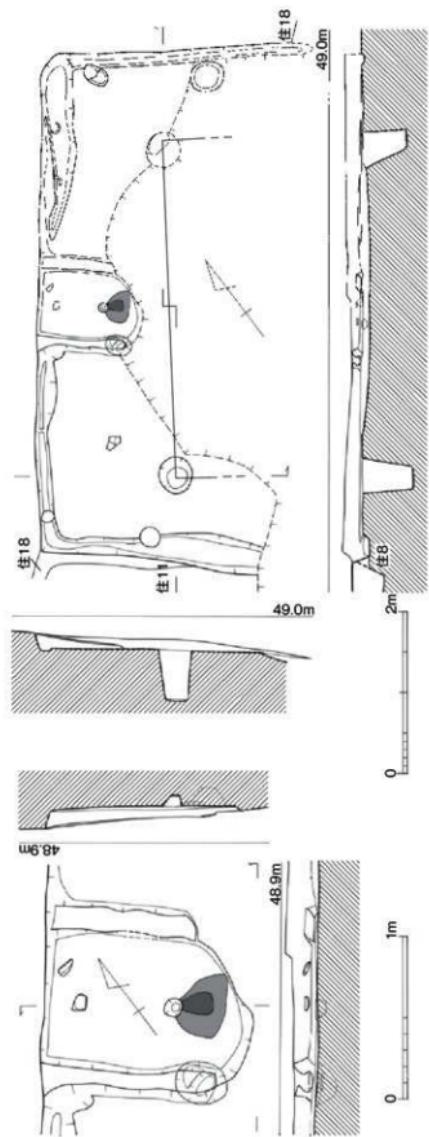
10号竪穴住居跡（図版5、第21図）

調査区南寄りの東端部で検出した。9号住居跡と重複しつつこれを大きく破壊するほか、北西端部で8号住居跡を一部破壊しており、これらよりも新しい住居跡である。さらに、南側で11・18号住居跡と切り合い関係を持っており、これらを破壊する。

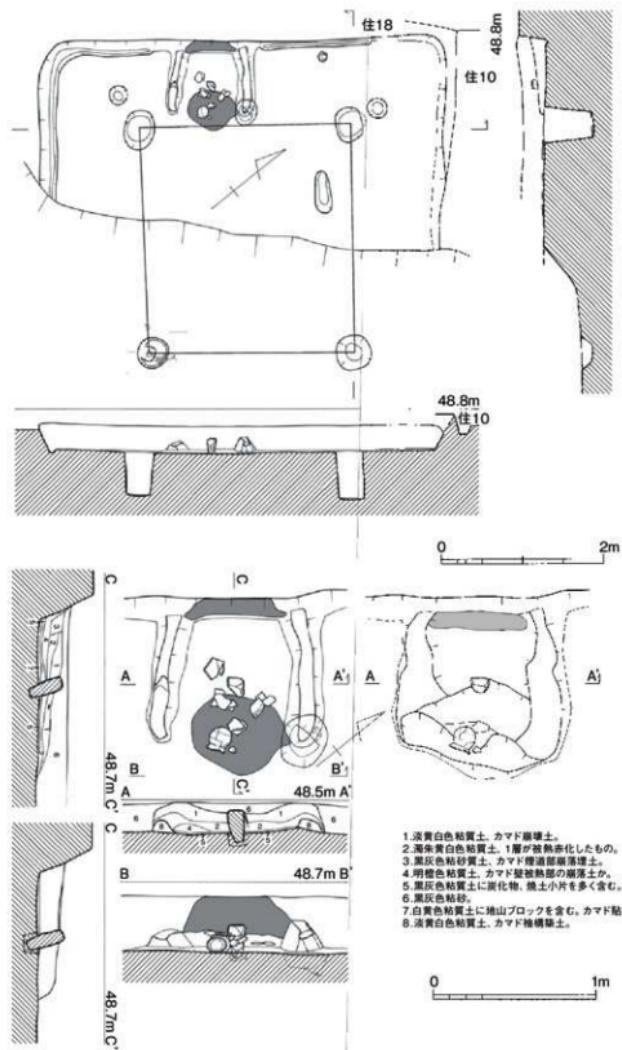
東側の斜面部に位置しており、8・9号住居跡と同様東側の半分ほどが完全に失われる一方、西壁側は比較的よく残存状況がよく、最も残る部分で0.2mほどの高さで壁が残る。西側の主柱穴2本のほか、西壁中央部に内接型のカマドが付設されている。またカマド部以外の周壁部には壁周溝が付設されている。主柱穴の直径は0.35~0.4m、深さは0.6m以上とかなりしっかりしたもので、柱間距離は4.40mほどを測る。住居跡の規模は西壁で南北長が判明し、5.78mを測ることから、住居跡の形状はおそらく一辺5.8mほどの正方形で4本主柱とみられる。

カマド

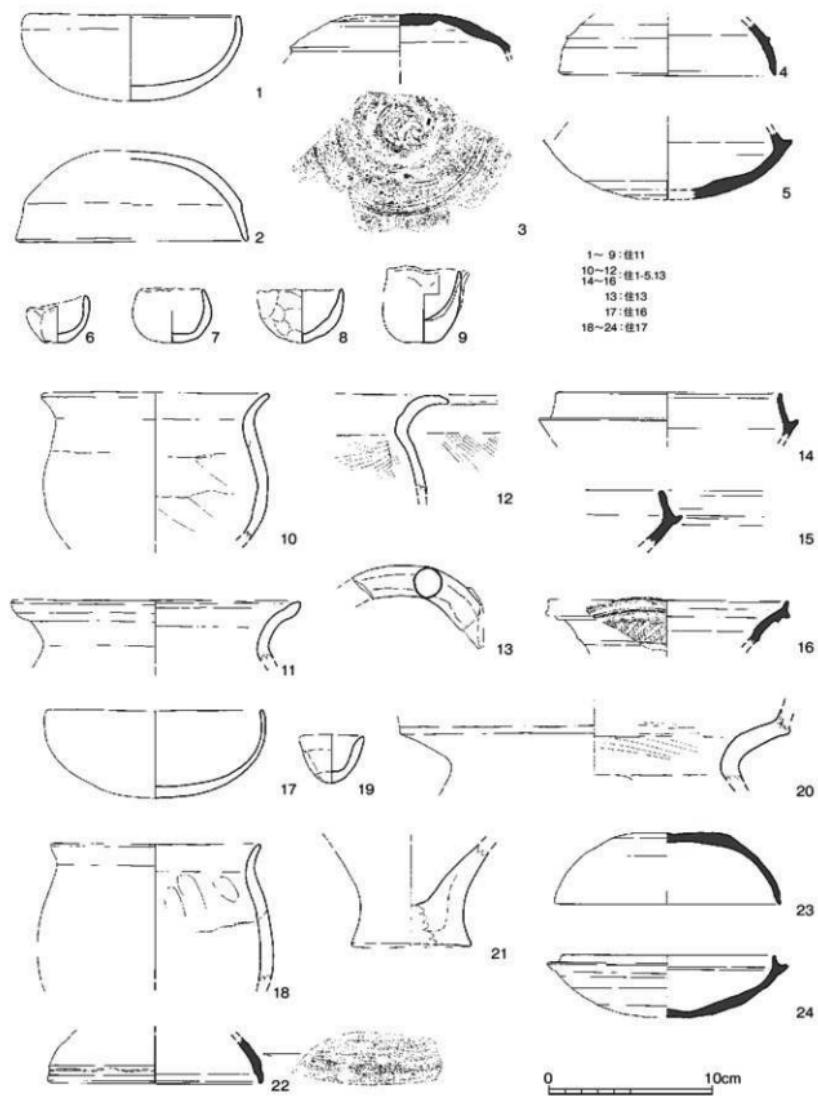
西壁の中央部に内接型のカマドが付設されていた。袖の長さはよく残る左側で1.15mほどを測る。規模は内法で幅0.8m、長さ1.1mほどを測り、かなり大型のカマドである。奥壁から0.7mほどのカマド中央部に径0.1m、深さ0.07mほどの小ピットがあり、支脚の抜き取り穴とみられる。カマド内部にはよく焼けたカマド内壁が崩落していた。袖の構築土は黒褐色粘質土である。先端部の約0.3mほどには補強石材が用いられていたものとみられ、抜き取り穴が残されていた。なお、左袖の先端部にあたる袖下層には、深さ0.15mほどの小ピットが残されていた。袖先端部に補強石材を使用した痕跡の可能性があるが、調査者はこの部分の上に袖粘土が残されていたとしている



第21図 10号竖穴住居跡・同カマド実測図 (1/60, 1/30)



第22図 11号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)



第23図 11・13・16・17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

ことから、カマドの作り替えが行われ、下層のカマドに補強石材が用いられた可能性があろう。

出土遺物

土器（第19図8～11） これも図示できる土器は少ない。8は頸部付近で1/2が残存する土師器甕であるが、口端部を欠くとともに器表が荒れている。9は底部がほぼ完存、口縁部付近の1/4が残存する土師器椀で、これも器表が荒れているが、一部で箒磨きが見えることや色調から推して本来は黒化したものであろう。10は小型平底の完存する底部であるが明らかに混入である。胎土に茶褐色クサリ礫が目立つ。11は須恵器甕小片である。胎土は比較的良好であるが、焼成がやや甘い。外面は通有の平行叩きだが、内面の同心円當て具痕は非常に細やかで浅い。

他に土師器瓶把手などがある。

11号竪穴住居跡（図版5、第22図）

調査区南寄りの東端部で検出した。北側を10号住居跡に破壊され、南側で12号住居跡を破壊し、また18号住居跡とは完全に重複していてこれを破壊している。東側はやはり半分ほどが斜面の傾斜で削平されて失われており、西半分が残る住居跡である。

残された西側の状況は比較的良好で、西壁の中央やや南寄りに内接型のカマドを付設し、西・南壁には周壁溝、また床面には2本の主柱穴が残る。さらに、東側の斜面の中に残る2本の主柱穴の一部がかろうじて残されていた。上述のように本住居跡は18号住居と完全に重複していたため、掘り下げ時には存在に気づいておらず、18号住居跡を掘り下げている途中に存在に気づいたため、本来残されていたはずの壁の高さの半分ほどが誤って失われてしまった。最もよく残る西壁では深さ0.4m以上が残されていたものとみられる。主柱穴は4本がほぼ正方形に配され、柱間距離が南北で2.6m、東西で2.8mほどを測る。住居跡の規模は南北が4.68mを測り、東西は2.58mが残されているが主柱穴の配置から復元すれば本来は4.8mほどとなるものであろう。従って本住居跡は一辺46～48mを測るほぼ正方形の4本主柱の竪穴住居跡で西壁にカマドを持つものと復元される。

カマド

西壁の中央やや南寄りで内接型のカマドを検出した。袖の長さは約0.8mほど、幅は内法で0.65mほどを測り、袖がわずかにひろがりハ字形を呈する。奥壁から0.4ほどの中段部に0.2mほどの石を立てて床より0.13mほど突出させた支脚が残り、その周囲には甕と瓶が残されていた。またその周りにはカマドの構築粘土が多く残されている。また、カマド内部の最下層には灰層が掻き出されないまま残されており、本カマドは土器がかけられたまま上から潰されるような形で廃棄された状況をよく残す。調査担当者によれば、検出時に壁面側に径7cm程度の小ビット状の痕跡を確認しており、内部の土層が断面「玉ねぎ状」の構造になっていたことから、これを煙道の痕跡と認定したという。復原すると壁面に沿って約0.6m程度斜めにのびていたことになるというが、写真や図面が残されておらず位置や構造を示すことができないのは残念である。また、支脚前面のほかに奥壁が広く被熱して赤変している点も本カマドの大きな特徴であろう。

なお、住居跡の覆土中から長さ0.55mほどの細長い石材が出土しており、担当者はこれがカマド焚き口上面にかけられた補強石材である可能性を想定しているが、焚き口の幅から考えて石材の長さが足りない。右袖の下層から直径0.3m、深さ0.1mほどの小ビットを検出しており、補強石材が用いられた可能性はあろうが、このビットの上を粘土が覆っていることから、本カマドには作り直しがあり、作り直し前のカマドの右袖に補強石材が用いられていたものと想定した方がいいだろ

う。なおその場合、住居跡覆土中出土の石材との関連性は想定しがたい。

また、調査担当者は土層の堆積状況（赤変粘土と黄白色粘土のセットが二重に確認できる）からカマドの補修が行われたと想定したが、灰層が最下層に残されていることからすればむしろカマド廃棄後の崩落が二度にわたって起きたと想定しておきたい。

出土遺物

石製品（図版31、第72図4） 安山岩製の石鎌である。正三角形状で、基部の抉りは角張る。細部調整は非常に浅く、重量は0.74gを測る。

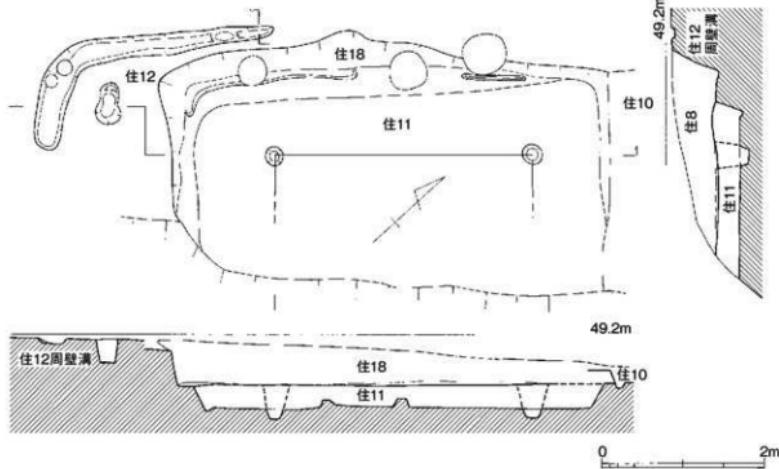
土器（図版24、第19図12～14・第23図1～10） 第23図3～5が須恵器、そのほかは土師器である。

第19図12はカマド内から出土した小型壺で、全体に焼けて赤変、器表が荒れている。体部内面に粘土紐接合痕が残り、同外面下位には箆削りの痕跡が見える。頸部以下は完存、口縁部も3/4ほどが残存する。13は球形の体部から不明瞭な頸部を経て、ほぼ直立する口縁部へと続く鉢形の土器。これも外面はほぼ全面が赤変し、内面もほぼ全面が黒色化する。頸部以下が完存、口縁部の3/4が残存する。14は小さく外傾する短い口縁部と綺麗の弱い頸部、張りの弱い体部をもつ甕形の土器で、これも外面が赤変して器表が荒れている。口縁部付近で1/4が残存。

第23図1はカマド付近から出土したほぼ完存する椀で、器表が荒れている。2は須恵器を模倣した土師器の杯蓋であろう。これもほぼ完存するが、器表が荒れていて天井部に大きな弾けが見られる。3は天井部の1/3が残存するが、口縁部の全てを失う。胎土は暗褐色となる緻密なもので、器表の暗灰色と好対照をなす。天井部外面は回転箆削り、内面は凹凸が大きく、中央に同心円文が残る。これも天井部・口縁部間の稜はしっかりとしている。4は1/3ほどの杯蓋残片。口縁部・天井部界の稜はしっかりとしていて、口端部内面には弱い沈線を刻んで古い形態を踏襲する。

5も口縁部を全て失うが、受け部付近で1/3が残存する。作りが粗い。

6～9は手捏ねミニチュア土器。全体に胎土は良好で、8は特に選別されている。9は一部が片口状となる。



第24図 12・18号穴住居跡実測図 (1/60)

12号竪穴住居跡（第24図）

11号住居跡の南側にあり、11・18号住居跡に大きく破壊される住居跡である。かつ、これらの住居跡のうち最も浅いため残りはきわめて悪く、南西コーナー部付近で周壁溝の一部を検出したにとどまる。残存規模は東西が2.6m、南北は1.2mほどである。周壁溝の南西コーナー付近の内側に小ピットを検出しており、主柱穴の可能性もあるが、やや周壁溝に近すぎる感もあり本住居跡に伴わない遺構かもしれない。住居跡の形状と埋土から6世紀代のものであると思われる。

時期を判断できるような土器の出土はない。

13号竪穴住居跡（第25図）

調査区南東部に張り出した一段低い部分に位置する。3号住居跡に切られ、4号住居跡を切る。また残存部分に直接の切り合い関係はないが1号通路状遺構とも重複しており本遺構が先行する。

遺構の残存状況はきわめて悪く、西・南辺の周壁溝がそれぞれ一部ずつ検出されたのみである。周壁溝の幅は0.15~0.2m、深さは最大で0.15mほどを測る。周壁溝の位置と規模から判明する住居跡の残存する大きさは、南北3.2m、東西3.2mほどを測る。ただし、3号住居跡と同じく、南辺の周壁溝は底面の高さが遺構面の高さに合わせて東側に下っており、周壁溝ではなく付近に散見される細い溝状遺構である可能性も残される。

出土遺物

出土遺物は乏しく、調査時に4号住居跡の遺物と区別しがたい部分があった。

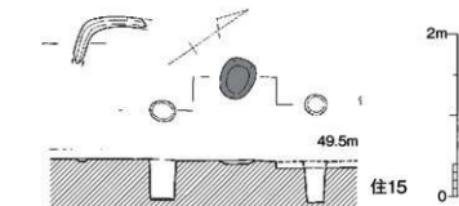
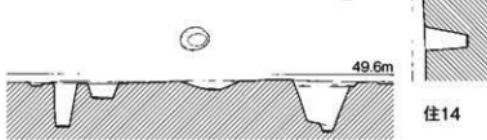
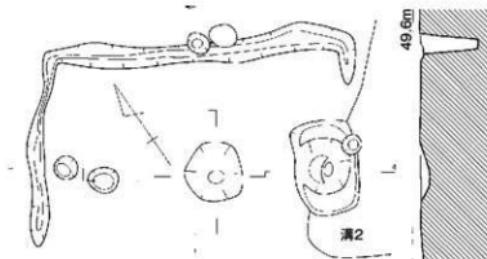
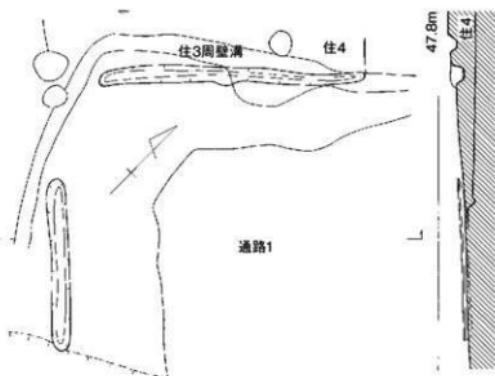
土器（第23図10~16） 図示した土器は13の把手状土師器が周壁溝から出土した他はいずれも検出時の遺物で、「1~5・13号住居跡」の注記がある。第68図に示した通路状遺構とする遺構から出土した遺物を考慮すれば、この住居跡に伴う可能性のある土器として14・16などが候補となろう。

10は体部の1/3が残存、口縁部付近は小片である。胎土は比較的良好で、体部最大径部付近以下は赤変する。同内面には粘土紐接合痕が残る。11も小片である。口縁部の造作は須恵器を模したものであろうか。12は口縁部が大きく外反する甕小片。13は土師質の把手状土製品で、断面は直径2cmほどの円形となる。胎土は普通。14は胎土・作りともに良好な須恵器杯身片で、薄手となる。小片からの復元であり、口径に不安がある。15も同上小片。これも胎土は良好であるが、焼成が甘い。16は須恵器壺小片。口端部を上方へ引き出し、外面では下位に突帯を付す。波状文はしっかりと原体で刻まれ、文字通り「櫛捲」という表現が相応しい。

14号竪穴住居跡（図版6、第25図）

調査区南側の中央やや東寄りで検出した住居跡である。2号溝と切り合い関係にあり、本住居跡の主柱穴が2号溝を破壊している。

残存状況は悪く、西側と北側、それに南側のごく一部に周壁溝状の細い溝が確認できるが、このうち北東辺については主柱穴の位置から周壁溝と考えるのは難しく、おそらくベッド状遺構の区画溝であろう。今回の調査で検出した該期の住居跡を参考にすれば、北西辺・南東辺は周壁溝としてよい。住居内からは主柱穴と考えられる深さ0.5~0.6mのピットを二つと丸跡と考えられる皿状の浅いピット等を検出した。このうち南東側の落込みは検出面で0.8×1.2mの規模を測る大型のもので、いわゆる屋内土坑である。



第25図 13~15号竪穴住跡実測図 (1/60)

周壁溝の規模は長軸で3.9m、短軸で2.4mほどを測り、中央炉は直径0.7mほどで不整円形を呈する。おそらく長方形で2本主柱の竪穴住居になると考えられ、弥生時代後期の所産と考えられる。

出土遺物

帰属時期を示すような土器の出土はない。

石製品（図版31、第72図15） 炉跡から出土した片岩製の石庖丁で、全体に丁寧に研磨がなされる。穿孔は両面から比較的鋭利な工具でなされるようである。使用痕はほとんど見えない。

15号竪穴住居跡（第25図）

調査区中央部の南側、14号住居跡の東側で検出した竪穴住居跡である。位置的には1号溝・16号住居跡と切り合う関係にあるが、本住居跡が著しく削平されていて周壁溝の一部と主柱穴2本、炉跡あるいはカマド床面と考えられる被熱部しか残っておらず、隣り合う遺構群との切り合い関係は不明である。

周壁溝は南西コーナー部付近のみの検出で、南北0.8m、東西0.6mほどが残されていた。主柱穴は直径0.3m、深さ0.5mほどで柱間距離は1.9mほどを測り、そのほぼ中央の西側にやや軸をずらした位置に浅い皿状の遺構があり、底面が被熱赤変していた。調査担当者はこの被熱遺構を炉跡と見て、本住居跡を弥生時代後期の長方形2本主柱住居跡と復元するが、被熱遺構が主柱穴の軸線からやや西にずれることから、これをカマドの被熱部と見立て、4本主柱の正方形住居跡と復元することも可能であろう。前者の場合、中央部が3.8m×2.0mほどの中央部を持ち周囲にベッド状遺構を配する可能性の高い弥生時代後期の住居跡として、後者の場合は一辺3.8m四方の規模を持つ古墳時代後期の小型の正方形住居跡と復元することができよう。遺構埋土の色調が記録されておらず、この点から本住居跡の所属時期を決めるることは難しい。

これも帰属時期を示すような出土遺物はない。

16号竪穴住居跡（図版6、第26図）

調査区南東部で検出した。1号溝と切り合い関係にありこれを大きく破壊する。15号住居跡の東側に隣接し、本来は切り合い関係にあったものと考えられるが、上述のように15号住居跡は大きく削平されて大半が失われており直接的な遺構の切り合い関係はない。

本住居跡は比較的の残りがよく、略方形の竪穴部と4本の主柱穴をもち、西壁の中央部に内接型のカマドを配し、カマド部以外の四周に周壁溝が巡らされる。緩やかに東に向かって下る地山上にあり、西側の壁は0.3mほどが残されるが東側はほぼ完全に削平されて周壁溝の底部付近が残るのみである。竪穴部は床面で南北4.42m、東西4.2mの規模となって大略正方形形状を呈し、主柱間の距離は2.3～2.4mを測る。主柱穴は直径0.4～0.5m、深さ0.5m強を測るしっかりとしたもので、中心部に径0.1mほどの柱痕が認められた。またカマドの対面にあたる東壁のほぼ中央約0.1mほどの位置に直径0.3m、深さ0.1m弱の小ピットがあり、出入り口に関連する施設の可能性がある。

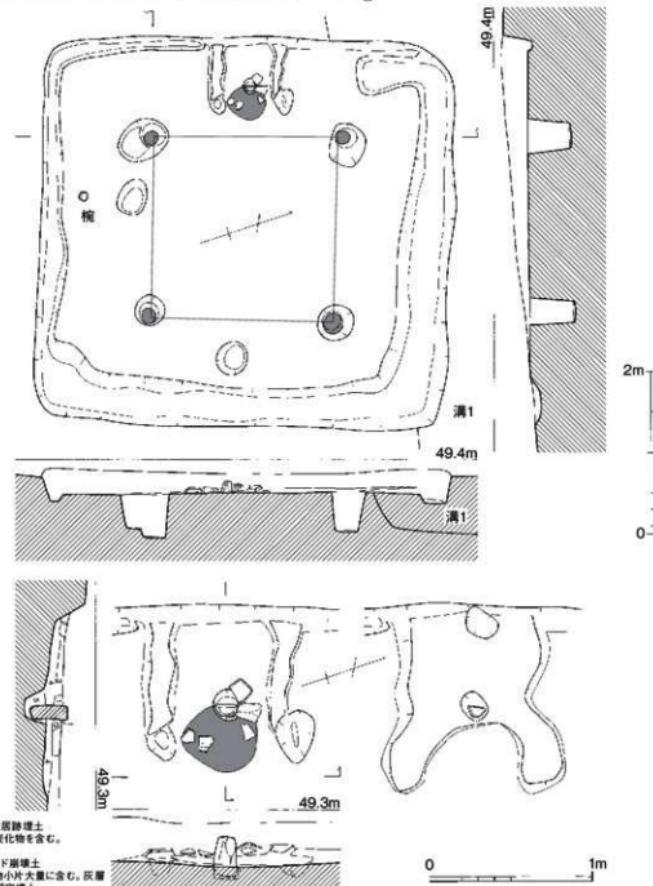
カマド

カマドは上部が燃焼部に崩落する形で崩れており、その状況から全体形状を復元することが比較的容易な状況であった。住居跡の覆土を除去してカマドの崩落土を露出させたところ、中央部には直径0.25mほどの小ピット状に、また住居の壁面付近にも直径0.3m弱の不整形に住居跡の上層覆土が入り込んでいる状況が確認され、それぞれカマドの上面開口部と煙道が、カマドが崩落した段

階で未だその形状を保っており、その中に住居跡の覆土が入り込んだものであることが判明した（第26図下段右）。その下層にはカマド構築土が崩落した灰褐色粘質土が堆積し、最下層には灰層が分厚く堆積していた。カマド内からは瓶片が多く出土した。なお、両袖の先端部には直径0.2～0.3m、深さ0.1m弱の不整形なビットが検出された。カマド袖を補強するための立石が存在したものとみられる。またカマドの中央部には長さ0.2mほどの石材が立ち支脚としての用を果たしていた。以上から本カマドの廃棄にあたっては、両袖先端部の補強立石（そしておそらく底石）を抜き取ったあと、コシキをかけたまま上から押しつぶすような形で破壊したことが読み取れよう。カマドの規模は内法で長さ0.75m、幅0.55mほどを測る。

出土遺物

石製品（図版31、第72図5） 緑辺の薄い部分が透明となる西北九州産黒曜石製の剥片鎌である。片側の側縁と基部の両面を細かく細部調整を施す。0.21 g。



第26図 16号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60, 1/30)

土製品（図版31、第72図1） カマドの北側袖前端のピットから出土した長さ4cmの土製模造鏡。縦長の円形状で、鉢部分は指で窪ませて引き延ばして作り、径2~3mmの穿孔を施す。胎土に小砂粒を含み、図右半分ほどが熱を受けて赤味を帯びている。

土器（図版24、第23図17） 出土位置を示している。器表が荒れて剥落した土師器碗で、外面は全体に黒色、内面は赤色系となる。口縁部付近で3/4が残存する。

全体に遺物は少なく、須恵器（壺・蓋杯）片やカマド出土の土師器瓶片、弥生後期と思われる土器片などが見られるが、細かい時期を示すようなものはない。

17号竪穴住居跡（図版7、第27図）

調査区南寄りの東隅で検出した。1号溝、20・21号住居跡と切り合い関係にあり、これらを大きく破壊する。東に下る斜面上に位置しており、東壁の残りはきわめて悪かったが、さらに1号溝と切り合い関係にある部分について当初切り合い関係を誤認して一段落としてしまい、壁が失われてしまった。

西壁の中央やや北寄りにカマドが付設されていたようで、東壁から0.3mほどの位置に支脚用の小ピットと被熱赤変部分が確認できる。また主柱穴が4つ出土しており、いずれも直径0.3m、深さ0.3~0.4mほどを測る。主柱穴はやや長方形気味に配置され、柱間距離は南北が2.8m、東西は2.2~2.5mを測る。住居の平面プランも主柱配置と同様やや長方形ぎみで、幅5.00m、長さ4.26mを測る。南壁と西壁の半分ほどに周壁溝が掘られている。住居床面のうち1号溝と重複する部分が0.05mほど低くなっているが、これは一部で埋土の色調が判断できず掘り下げすぎた部分もあるが、実際の床面も1号溝と重複する部分がやや下がっていた。生活するうちに柔らかい埋土部分が踏みしめられて低くなったものか。

出土遺物

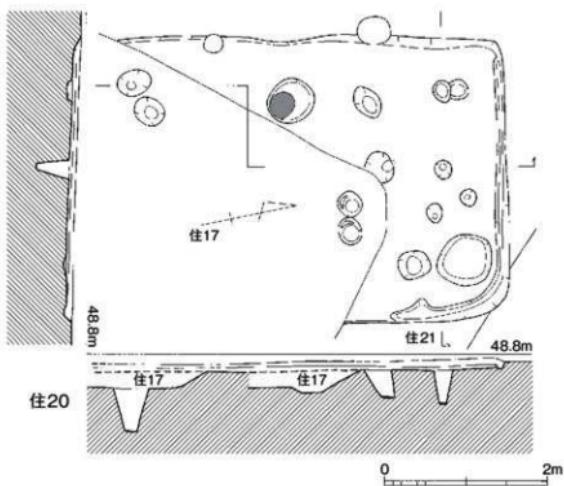
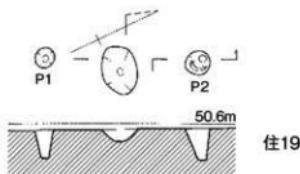
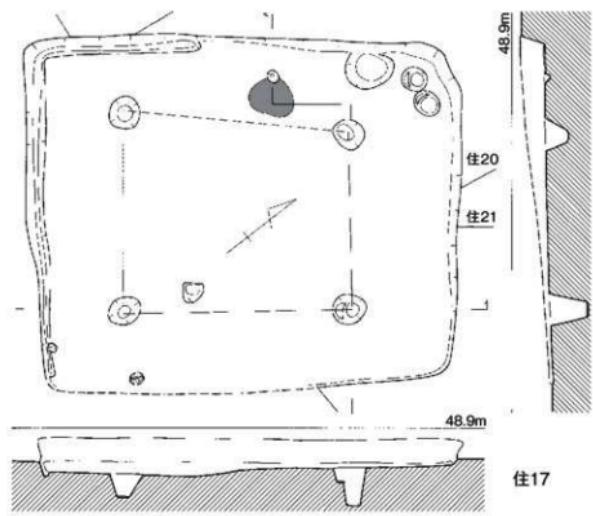
土器（図版24、第23図18~24） 23・24は出土位置を示している。20・21は「硬化面中」ということから下層構造に伴うものであるとしてよい。

18は口縁部の外反が弱い壺で、内外の器表及び器肉まで赤く被熱して器表が荒れているが、内面の粘土紐接合痕は残る。口縁部付近の1/3が残存。19は手捏ねミニチュア土器で、胎土は比較的良好である。20は弥生後期の二重口縁壺片で、口縁部が見事に剥離して擬口縁となる小片。焼けて赤変、器表が荒れる。21は弥生中期初めの壺底部片。これも外面は真っ赤に変色する。

22~24は須恵器蓋杯。22は天井部から口縁部にかけて丸く移行する杯蓋小片。上端に籠記号と思われる纏細な直線の一端がある。また、口縁部外面に粘土紐接合痕状の細線が見られるが、内面に見られる接合痕らしき痕跡とは合致しないのでこれは偶然の結果のようである。23は天井部付近が完存、口縁部の1/4が残存する杯蓋で、胎土は精良といってよい。天井部は扁平となるが、そこから口端部まで連続的な曲線を描き、端部は薄く丸く終わる。丁寧に作られた土器である。24はほぼ完存する杯身で、これは作りが雑である。法量を見ると23とセットでもよく見えるが、色相、造作など随分異なっている。

18号竪穴住居跡（図版5・7、第24図）

調査区南寄りの東隅で検出した。11号住居跡と大きく重複していて住居跡の大半を破壊されており、南側では12号住居跡と切り合い関係を持っていてこれを破壊している。また北側で10号住居とも切り合い関係を持っており、これに破壊されている。11号住居跡に大きく破壊されている



第27図 17・19・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ため残されているのは西壁と南壁のごく一部のみである。

主柱穴は2本を11号住居跡の床面で検出した。残存する深さは0.1mほど、想定深さは0.4mほどであろう。柱間距離は3.16mで、これと南壁を手がかりとして南北の規模を復元すると5.5mほどの規模になろう。東西幅は南壁の残存部分が最大2.04mを測るが復元規模は不明である。ただし残された主柱穴の位置から4本主柱の住居跡となる可能性が高く、出土遺物からも古墳時代後期のものである可能性が考えられることから、一辺5.5m四方の略正方形の堅穴住居跡に復元しておきたい。この想定と、周辺の同時期の堅穴住居を参考にすれば、西壁の中央部にカマドが付設されていた可能性が高い。調査担当者も付近を精査したが発見できなかったといい、11号住居跡に破壊されたか、ほかの辺に付設されていたものが後世の段造成により失われたものとみたい。

帰属時期を示すような出土遺物はない。

19号堅穴住居跡（第27図）

調査区の南西端部で検出した堅穴住居跡の一部と思われるビット群である。付近は丘陵の頂部付近にあたり、すぐ北を通る1号溝の状況から見て少なくとも0.5m以上は削平を受けている場所である。従って本住居跡も堅穴部が完全に削平されて失われており、二本の主柱穴と想定されるビットと、その中軸線上の中間に位置すると想定されるやや浅いビットしか残されていない。

主柱穴は径0.2~0.3m、深さ0.4~0.45mの規模を測るが本来はさらに深かった可能性がある。炉跡と想定されるビットは断面台形で深さ0.15mである。主柱間の距離は1.9mで15号住居跡と類似しており、住居跡の規模も類似しているかも知れない。炉跡の存在から、弥生時代後期~古墳時代初頭の長方形プラン・2本主柱の堅穴住居跡と考えられる。

これも帰属時期を示すような出土遺物はない。

20号堅穴住居跡（図版8、第27図）

調査区の南寄り東隅に位置し、17号住居跡に大きく破壊され、21号住居跡を大きく破壊する堅穴住居跡である。

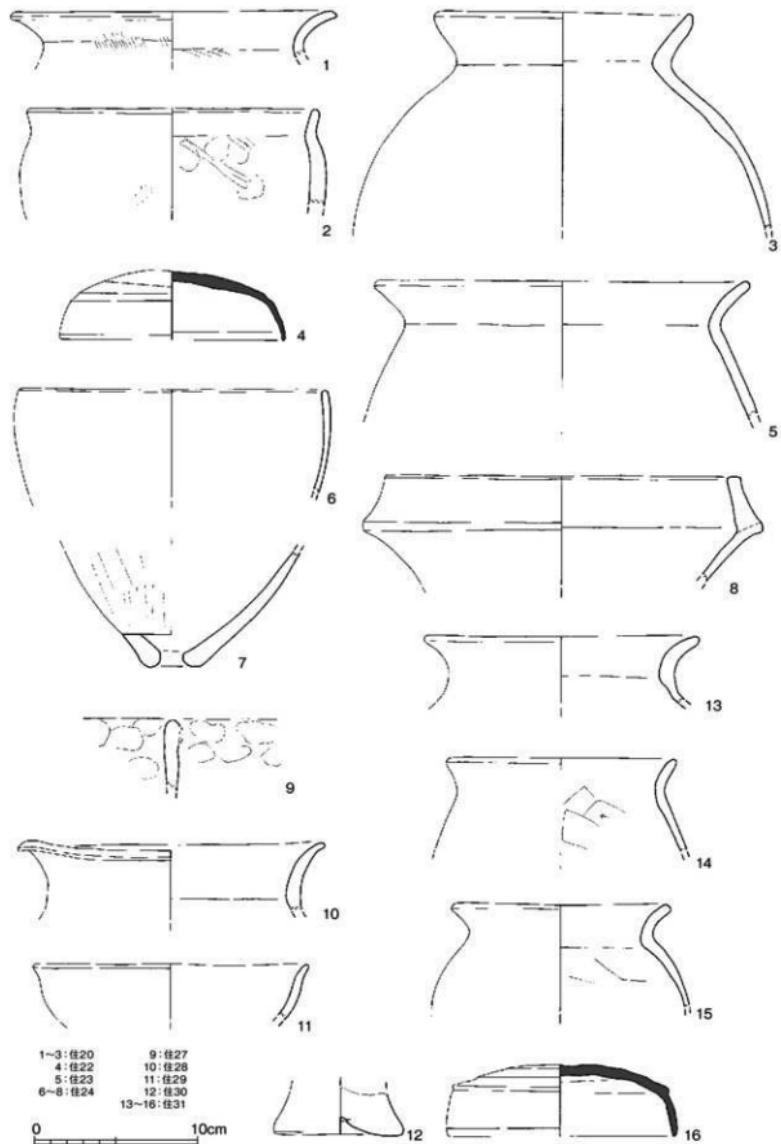
北壁が完存しており長さは3.36mを測る。東西幅は西壁が一部を除き残っていて残存する長さは4.98mを測る。西壁から約0.4mほどの位置に深さ数cmのごく浅いビットがあつて床面が被熱しており、これを西壁の中央に付設されたカマドと想定して西壁の長さを復元すると5.0mほどとなる。深さはきわめて浅く0.05m弱しか残されておらず、主柱穴も不明瞭である。カマドを付設する住居であることと長方形プランであることがやや整合せず、また床面から明確な主柱穴が検出されないことなども併せ、本構造が堅穴住居跡であるかどうかやや不安が残る。

出土遺物

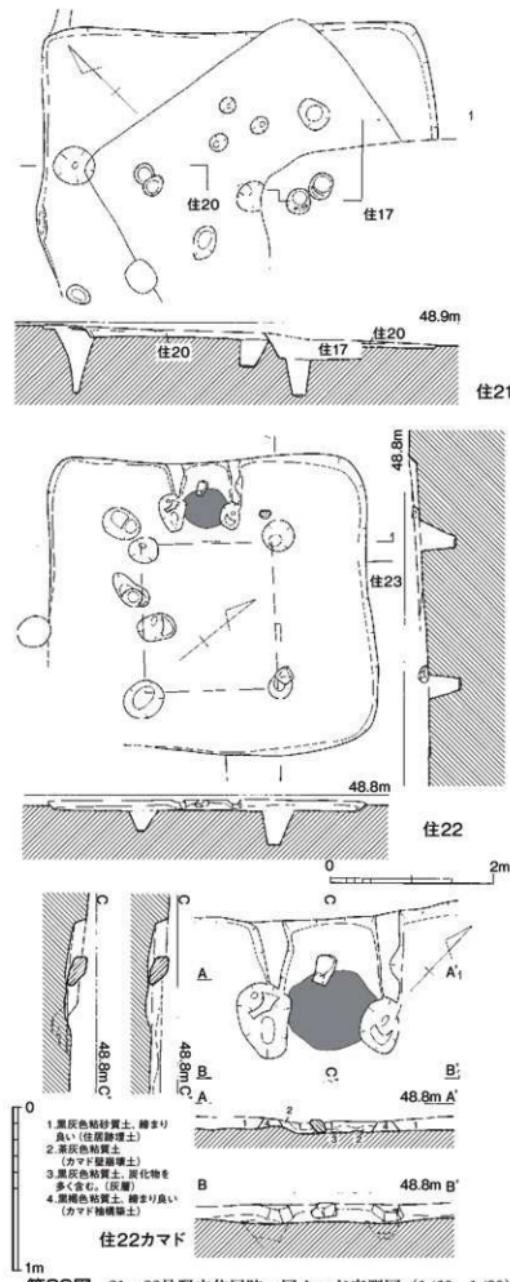
土器（第28図1~3） いずれも土師器。1は小片からの復元である。口縁部を強く外反させる小型の甕で、体部内外面に刷毛目が見える。胎土は良好といってよい。2も小片で、これは口縁部に歪みがあることから傾きにも不安がある。これも胎土は比較的良好で、器表が荒れているが内外面に刷毛目が見える。3は口縁部付近で1/4が残存する。器表が荒れて調整痕は見えないが、被熱による変色は認められない。遺物量が少ないものの、須恵器片は出土していない。

21号堅穴住居跡（図版8、第29図）

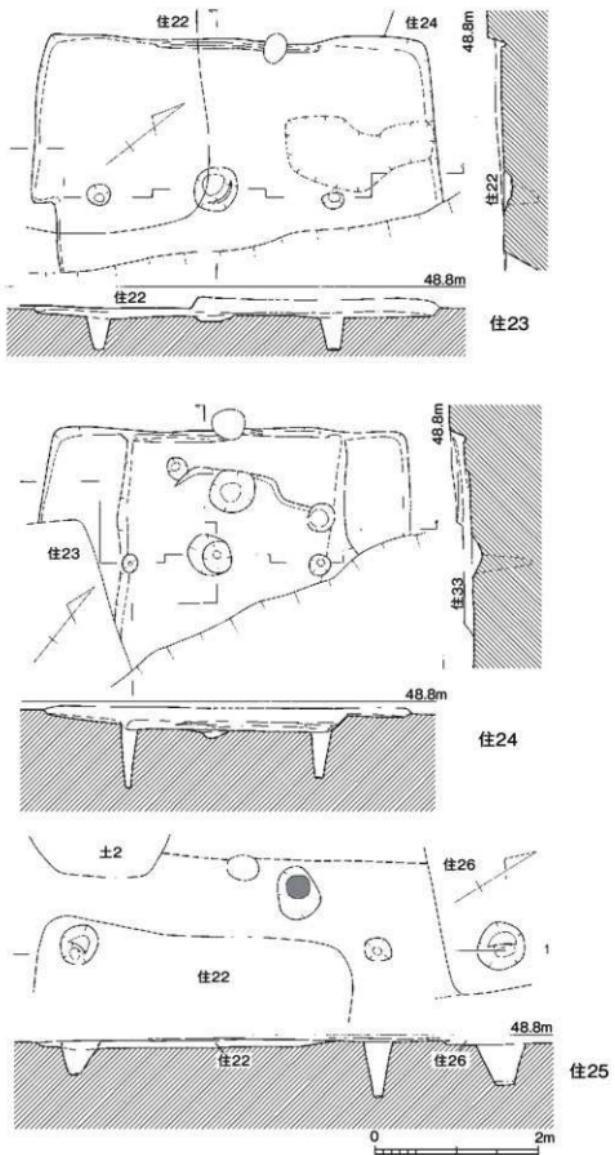
調査区の南寄り東隅に位置する。17・20号住居跡に大きく破壊されており、また著しく削平さ



第28図 20・22・24・27~31号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第29図 21・22号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60, 1/30)



第30図 23~25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

れていて残存状況はきわめて悪い。

規模は東西方向が完存し4.72mをはかり、南北方向は3.04m以上を測る。床面を精査して主柱穴を探したが、該当するものを確認することはできなかった。また、カマドや炉跡、屋内土坑などの施設も検出できず、竪穴住居跡としてよいのか不安が残る遺構である。

出土遺物はない。

22号竪穴住居跡（図版8、第29図）

調査区中央部の東端で検出した竪穴住居跡である。23号住居跡と切り合い、これを破壊する。また25号住居跡とも切り合い関係にありこれも破壊する。

北西から南東に向かって傾斜する斜面で検出したが、遺構の残りは比較的悪く、斜面下方に当たる南東コーナー部付近が失われている。西壁の中央部に内接型のカマドを検出したほか、床面から4本の主柱穴を含むいくつかの小ピットが出土した。主柱穴はいずれも径が0.3~0.5m、深さは0.25~0.4mほどを測る。竪穴部の規模は南北長さ3.52m、東西幅3.78mを測り、主柱穴の柱間距離は1.62×1.82mほどの長さを持つ。

カマド

西壁のほぼ中央部で内接型のカマドを検出した。左右両袖の先端部に袖を補強する立石を建てるための小ピットがあり、小ピットを含む袖の長さは約0.8m、袖間の幅は内法で0.6mほどを測る。カマド内の中央部に支脚に用いられたと推測される被熱した石材が出土したが、これを固定するための小ピットは検出できなかった。カマドの床面が非常によく焼けており、ピットの判別ができなかつたのかもしれない。層位は上層に住居跡埋土、その下にカマド構築粘土の崩落があり、最下層には灰層が堆積していた。灰層を搔き出すなどの廃棄に伴う行為は認められない。

出土遺物

土器（図版24、第28図4） 口縁部付近で1/2が残存する須恵器杯蓋で、天井部・口縁部界をわずかに凹ませる。口縁部付近は薄手となっている。17号住居跡出土杯蓋によく似て胎土は精良であるが、色調が異なる。

23号竪穴住居跡（図版8・9、第30図）

調査区中央部の東端で検出した。南側を22号住居跡により破壊され、また東側の半分以上が造成により失われている。北側では24・30号住居跡を破壊している。さらに、25号住居跡とも切り合い関係にあると思われるが、25号住居跡の大半が削平により失われていて残された遺構同士の直接的な関係はない。

床面からは2本の主柱穴のほか中央付近で炉跡が検出されている。主柱穴は直径0.3m、深さ0.4mほどで柱間距離は2.88mほどを測る。炉跡は直径0.6mほど、深さ0.05mほどの皿状を呈する。

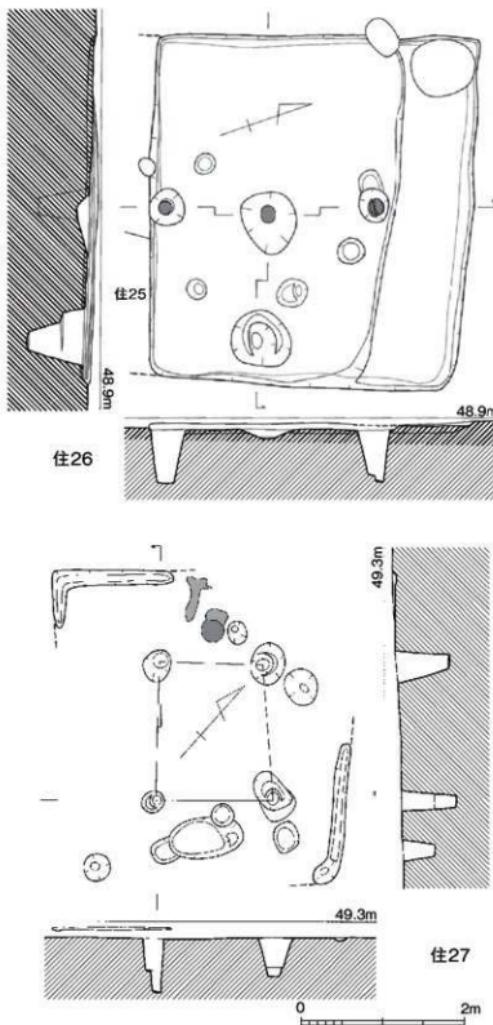
住居の規模は西壁が完存し、長さは4.74mを測る。東西方向は2.8mほどが残されるが、中央炉から折り返した本来の想定長さは3.4mほどを測り、長方形で2本主柱の住居跡となろう。なお、南壁が一部歪んでいるが、付近は22号住居跡により深く削平されて本住居跡の深さが数cmしか残されていない部分であり、また主柱穴の位置から考えても南壁に一段高いベッド状遺構が存在した可能性が高い。本来の規模はベッド状遺構も想定すれば5.4mほどの長さになるのではなかろうか。出土土器や切り合い関係などから弥生時代後期の所産と考えられる。

出土遺物

土器（第28図5） 口縁部をく字形に外反させる撫で肩の甕で、器表が荒れて調整痕は見えない。口縁部付近で1/4が残存。他に弥生前期末の甕口縁部小片や二重口縁壺に復元できる土器片などが少量あるが、須恵器片は出土していない。

24号竪穴住居跡（図版8・9、第30図）

調査区中央部の東端で検出した。23号住居跡に南側を破壊され、30号住居跡と重複しておりこれを大きく破壊する。



第31図 26・27号竪穴住居跡実測図 (1/60)

床面の中央に炉跡を持ち、それを挟んで2本の主柱が対峙する長方形プランの住居跡で、南北両側に幅0.7~0.9m程度、高さ0.1m弱のベッド状遺構を持つ。西壁が完存しており住居の南北長さは4.42mを測る。住居跡の東側半分弱が造成により削平され失われているため、中央炉で折り返して想定規模を復元すると、2.8mほどの規模になろう。中央炉は直径0.5mほど、深さ0.2mほどの皿状を呈し、主柱穴は直径0.2~0.25mほどと小型だが深さが0.6~0.7mあってしっかりとした堀方である。

出土遺物

土器（図版24、第28図6~8） 6は非常に器表が荒れた鉢で、口縁部付近で1/4が残存する。胎土は良好で、体部内外面の一部が赤変、口端部付近では一部で内外面が黒色となる。7は底部を焼成前に穿孔した瓶で、これも赤変して器表が荒れる。外面には微かに粗い刷毛目が見える。8はく字形の二重口縁となる壺で、口縁部の1/4が残存する。これも器表が荒れている。図示していないが、平底となる底部片、断面台形となる大型の突帯を巡らせる体部片などもある。

25号竪穴住居跡（図版8、第30図）

調査区中央部の東端で検出した。住居跡の大半が削平されていて全容が不明確であるが、西壁がごくわずかに検出され、カマドの被熱部分と考えられる赤変硬化面が確認できたほか、22・26号住居跡の床面から2つの主柱穴が出土した。以上の成果により、おそらく4本主柱で西壁中央部にカマドを付設する古墳時代後期の竪穴住居跡と推測される。ただしカマドと考えられる赤変部が想定される住居壁ラインと近すぎる感もあり、本来の住居壁ラインは図示した点線よりもさらに西側に0.5mほど行った場所にある可能性もある。

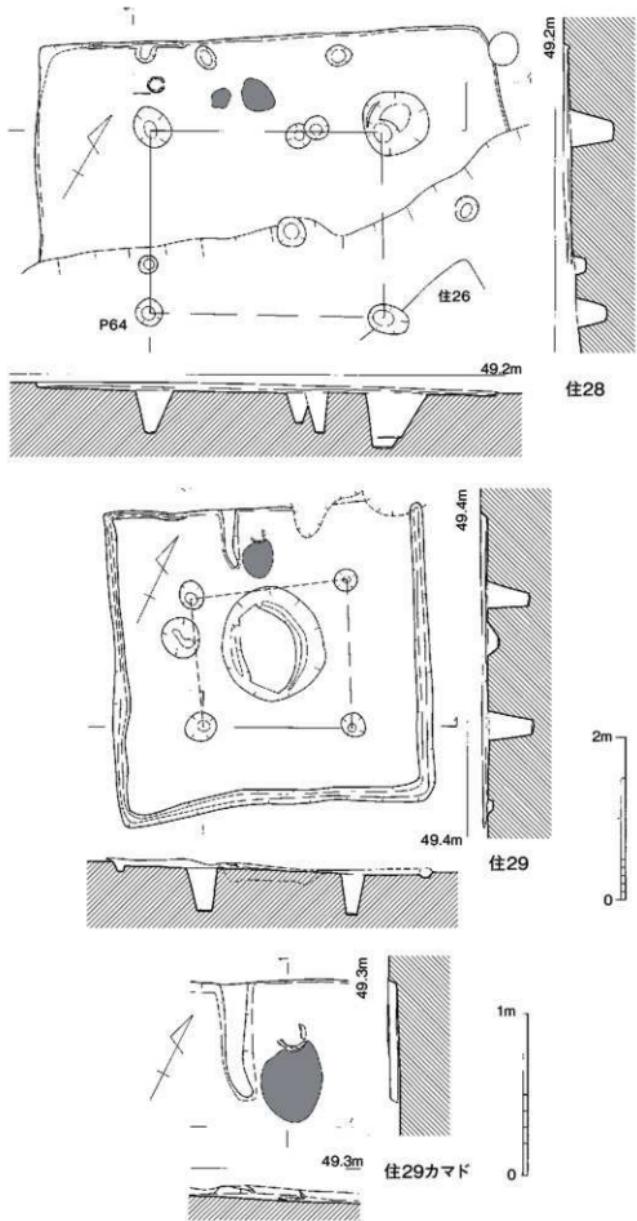
検出された2本の主柱穴間距離は5.26mあり、これに上述の想定される西壁ラインを手がかりとして加えると、本住居の規模は一辺7m弱の大型の住居となる可能性が高い。本住居跡と他遺構との切り合い関係について整理しておく。まず22号住居跡は本住居跡のピットを床面にて検出しておらず、本住居跡に後出することが明らかである。次に26号住居跡であるが、26号住居跡の床面から本住居跡の主柱穴を検出した形になってはいるが、26号住居跡の残存状況がきわめて悪く数cmほどしか覆土がなかったため、検出時に誤認した可能性が高い。実際には住居跡の形式からみて26号住居跡の方が古く、本住居が後出するとみられる。2号土坑であるが、調査担当者は本遺構が後出することを切り合いで確認したとするが図面からそれを窺うことはできない。ただし2号土坑は構造からも出土土器からも弥生時代のものであることは明らかで、本遺構が後出することは疑いなかろう。ほかに、23・24・30号住居跡が本遺構と切り合う位置にあるが、本遺構が削平されて残っていないため遺構同士の切り合い関係は不明である。ただしこれらはいずれも弥生時代後期の遺構と考えられ、本住居跡が後出するものと考えてよからう。

出土遺物はない。

26号竪穴住居跡（図版8、第31図）

調査区中央部の東端で検出した。25号住居跡と切り合い関係にあり、図面上は本住居跡が後出するようになっているが、住居跡の形式からみて本住居跡が古く25号住居跡に破壊されていると考えられる。

検出された竪穴部の形状は正方形状を呈し、北辺にベッド状遺構がみられる。床面には2本の主柱穴と中央炉跡があるが、南側の主柱穴が住居跡の南壁に近接していることから、おそらく南



第32図 28・29号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)

壁に沿ってもベッド状遺構があり、本来の南壁は図示したものからさらに0.9mほど南に位置したものとみられる。住居跡の規模は、東西幅が4.12m、南北長は残存部分で3.86mだが、失われたベッド状遺構を考慮すると4.8m弱ほどの規模になろう。主柱穴は直径0.4mほど、深さ0.65mを測るしっかりしたもので、柱痕が認められる。炉跡は深さ0.1m弱の浅い皿状を呈する。東壁が想定される付近の中央部に二段に掘り込まれた大きな土坑があり、壁際土坑の可能性があろう。

出土遺物

良好な出土遺物がなく図示していないが、小さな平底となる底部片や弥生中期初めの口縁部片や厚底となる底部片などが見られる。

石製品（図版31、第72図8）　頁岩製の石剣片。大きなしっかりとした繰り込みをもち、その上下とも側縁は刃をもたずに面取りするが、下側が肉厚となることから柄に相当するのであろう。ごく弱い鎬をもつ。

27号竪穴住居跡（図版9、第31図）

調査区中央部の東寄りで検出した住居跡である。28号住居跡の西、4号土坑の北東に位置する。ほかの主要遺構との切り合い関係はない。

本住居跡も大きく削平されていて残存状況は不良であり、周壁溝の一部と主柱穴、カマドの一部が残るのみであるが、幸い北西コーナー部と南東コーナー部が残っていたために住居跡の規模が復元でき、長軸3.5m、幅3.2m前後の規模を持つと推測される。カマドは北壁の中央部に設置していたようで、左袖の基部が長さ0.5m、幅0.1mほど残存していたほか、カマド内に崩落した粘土や被熱硬化面も検出した。ただし、住居跡の床面が遺存していたのはこの付近のみで、ほかの箇所では基本的に床面まで削平されているとみられる。主柱穴は径0.25~0.4m、深さ0.6~0.7mのしっかりしたもののが4本検出できた。柱間距離は長軸方向が1.68m、短軸方向が1.44m前後を測る。

出土遺物

土器（第28図9）　胎土に砂粒をほとんど交えず、黄白色陶器質といってよい土器小片。内面は横撫でを施すようで平滑化しているが、外面は特に剥離痕の下位には連続して深い指頭痕が残る。剥離痕の下位のラインは明瞭であるが、上方はどこで剥離しているのか定かではない。カマドからの出土である。

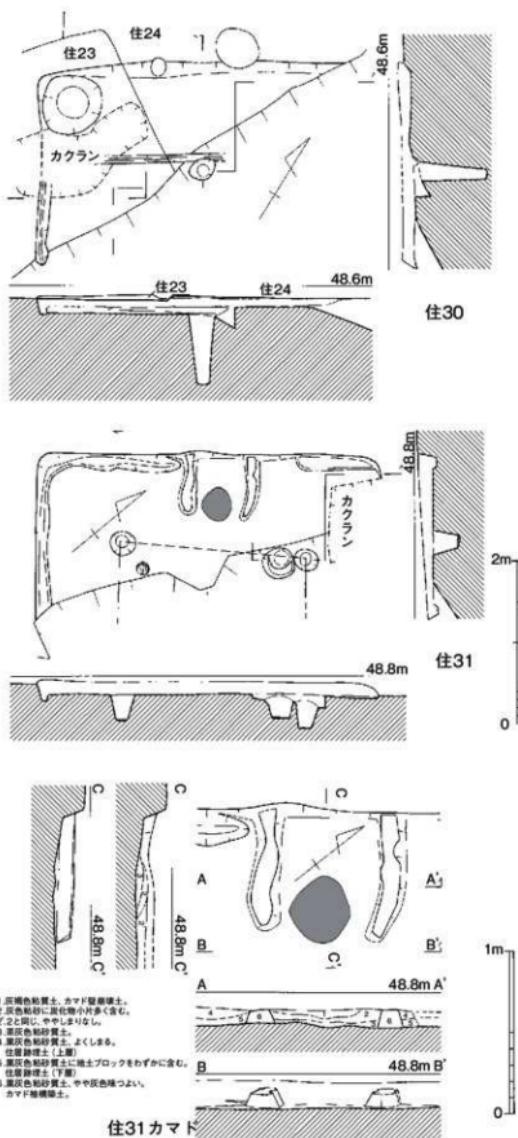
28号竪穴住居跡（第32図）

調査区中央部の東寄りで検出した。北に29号住居跡がほぼ軸をそろえて隣接する。東に緩やかに傾斜する地形にあり、残存状況は深いところで数cmに過ぎず、特に南半分ほどは擾乱や削平により失われている。

床面で4本の主柱穴を検出したほか、北壁の中央部にカマドを付設していたものとみられ、焼土を多く含む粘土塊が床面に張り付いて検出された。4本検出された主柱穴は、検出レベルの規模は直径0.3~0.8mとやや幅があるが、深さは0.5~0.7mとしっかりしたものである。住居跡の規模は北壁が完存していて東西方向が判明し、5.72mを測る。一方南北方向は最大で2.6mほどしか残されていないが、主柱穴の配置と北壁の位置から復元すると4.8mほどを測ることになる。従って、やや長軸の短い横長長方形の平面プランを持つ住居跡ということになろう。

出土遺物

土製品（図版31、第72図2）　主柱穴P64から出土した土玉である。ごく微少な砂粒が見える



第33図 30・31号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)

が、胎土は選別されるようである。黒色系を呈し、全体的に歪んでいる。中央に径2mm前後の穿孔を施す。2.4gを量る。

土器（第28図10） 図示部が完周する土師器甕片。口頸部は緩く字形に外彎、口端部を小さく突出させている。器表が荒れているが、体部内面は箝削りで仕上げるようである。変色は見られない。

29号竪穴住居跡（図版10、第32図）

調査区の中央やや北寄りの東側で検出した。28号住居跡の北西、27号住居跡の北に位置する。

全体に深い削平を受けているものの床面はほぼ完存しており、全容が判明する数少ない竪穴住居跡の一つである。北壁の中央部にカマドを付設し、カマド部以外の壁際には周壁溝が巡らされる。床面では4つの主柱穴が検出されている。略正方形に配され、柱間距離は1.84~1.9mほどを測る。また、床面からはこのほかに直径1.2mほど、深さ0.15mほどの略円形の土坑が検出された。4本の主柱のちょうど中央に位置するが、住居床面に形成された硬化面下より検出されたとのことで、住居の機能時には埋没していたものとみられる。住居跡の規模は南北軸が3.44m、東西幅が3.56mを測り、ほぼ正方形を呈する。

カマド

住居跡北壁のほぼ中央部に付設された内接型のカマドである。右袖は攢乱等により失われ、左袖のみが残っていた。袖は住居壁面とは直角に付設され、0.7mほどのびる。カマド中央部には高杯の杯部が逆位に置かれており、おそらく支脚として配されたものであろう。これをカマドの中央として右袖の位置を復元すると、カマドの幅は内法で0.55mほどとなる。またこの高杯から南側に直径0.8mほどの範囲が不整円形に被熱赤変して硬化面を形成していた。

出土遺物

土器（第28図11） カマド出土の土師器高杯で、破片全体では口縁部の1/2近くが残存するが接合しえない。口縁部が小さく緩く外反する。大粒の砂粒があるとはいえ、胎土は概ね精良といつてよい。器表は荒れているが、丁寧に作られた感がある。

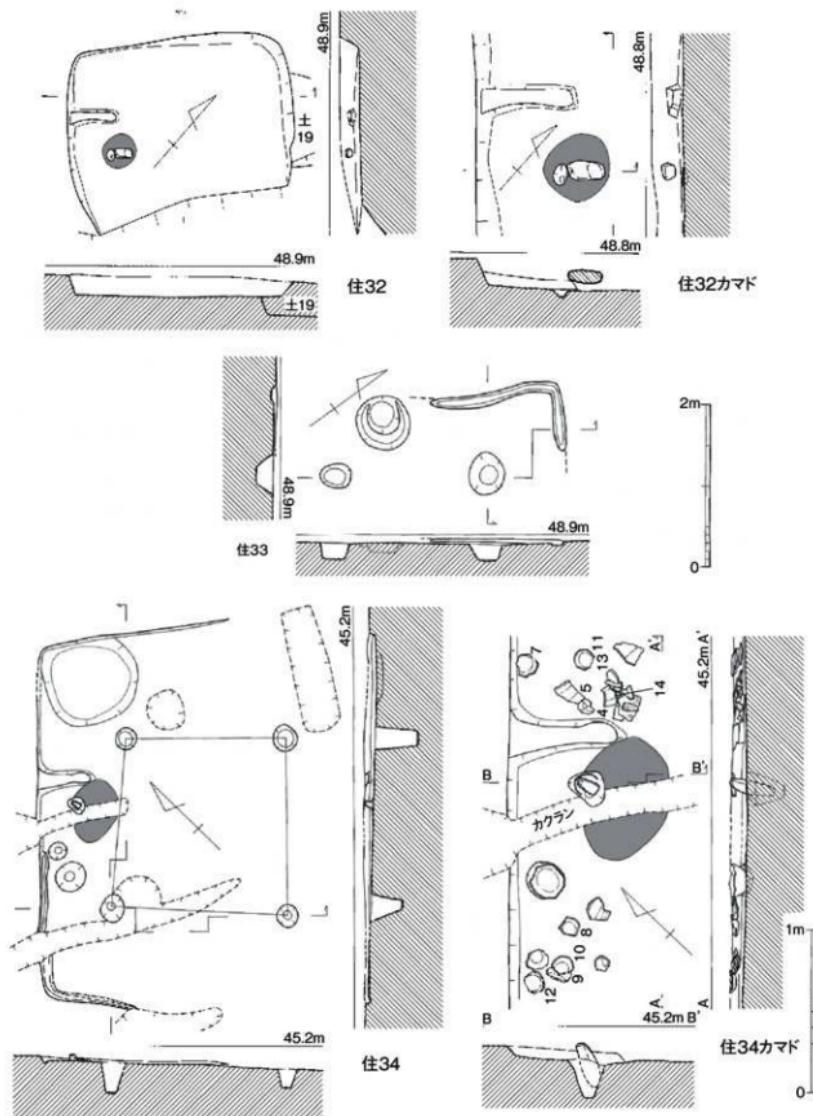
30号竪穴住居跡（図版8・10、第33図）

調査区中央部の東端で検出した。23・24号住居跡に大きく破壊されているほか、東側の大半が造成による削平で失われている。従って残存部分はごく一部しかなく、全体形状も不明瞭であるが、部分的に残された手がかりから復元を試みよう。

住居の中央部に直径0.25m、深さ0.8mほどのピットがあり、おそらく主柱穴の一つとみられる。これに一部つくようにして細い溝が東西方向にのびており、これより北側が0.05mほど高くベッド状遺構であろう。切り合い関係からも本住居跡は弥生時代後期の所産と考えられるので、2本主柱の住居跡と想定すると、東西幅は3.68mほどの規模と推測される。南北方向の長軸は、中央炉がないために不明であるが、おそらく4m以上の規模を持つものであろう。上述のように切り合い関係から弥生時代後期の所産と推定される。

出土遺物

土器（第28図12） 図上側を全て欠くが弥生中期初頭の厚底となる甕底部片であろう。底部外面中央付近が上げ底状となり、外面全体が赤変する。1/4ほどの残片。



第34図 32~34号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)

31号堅穴住居跡（図版11、第33図）

調査区北寄りの東端で検出した。33号住居跡と切り合う位置にあるが、33号住居跡のうち本住居跡と切り合い関係を持つべき部分が削平されて失われているため、実際の切り合いによる先後関係は不明である。

本住居跡は東側が造成により大きく削平されており、西側約1/3ほどが残されている。唯一完全に残っていた西壁の中央部には内接型のカマドが付設されており、カマド付設部を除く壁部には周壁溝が廻る。床面からは3つの小ピットが検出されたが、このうち床面から0.4m前後と深さがあり、カマドとの位置関係が比較的よい二つを主柱穴として示した。ただし、やや位置がずれしており不安も残る。

カマド

西壁の中央部に内接型のカマドを検出した。袖は壁とほぼ垂直方向に平行して0.7mほどのがのび、袖間の距離は内法で0.6mほどを測る。床面の中央やや左寄りに直径0.35～0.4mほどの不整円形に被熱赤変硬面が形成されている。支脚用ピットは検出されておらず、そのほか支脚をおいたとみられる痕跡はない。埋土はカマド構築土がそのまま崩壊し、堆積した状況を示すが、灰層は検出されなかった。

出土遺物

石製品（図版31、第72図6） 安山岩製の石鎚。わずかに欠損するが、身が厚く正三角形状である。1.16gを測る。

土器（図版24・25、第28図13～16） 13は口縁部が強く外反してその部分が肉厚となる甕で、1/2が残存。内面及び外面の一部が黒変する。体部内面は箆削りのようである。14は口縁部の外反が弱いもので、これも体部内面は箆削りで仕上げる。15は口縁部の外反が強く、これも体部内面の箆削りで口縁部と厚さが異なっている。口縁部付近で1/2が残存する。

16は完存する須恵器杯蓋である。天井部が低く、口縁部との境を突出させるが、シャープさはない。天井部外面の回転箆削りは稚である。

32号堅穴住居跡（図版11・12、第34図）

調査区北寄りの東隅で検出した住居跡である。19号土坑と切り合い関係を持ち、これを半分ほど破壊する。また位置的には33号住居跡の東側と一部で重複する関係にあるが、33号住居跡の東側が削平により失われていて、相互の切り合い関係は不明である。

本住居跡も東側1/3ほどが削平により失われている。平面プランは小型の隅丸方形で、珍しく南側の壁の中央部にカマドを付設する。大きさは、完存する西壁部分で、南北の規模が2.56mを測る。東西の規模は東壁が完全に失われていて不明だが、カマドが南壁の中央に位置すると仮定してカマドの中心より折り返せば2.56mとなり、ほぼ正方形を呈することになる。住居跡の床面から主柱穴は見つかっていない。堅穴部が小型であることから、住居跡の外側に柱穴が存在した可能性が高いが、周囲からは適当な柱穴を拾い上げることはできなかった。堅穴部の外に存在したと考えられる周堤の上からの掘り込みであれば削平により失われた可能性が高い。

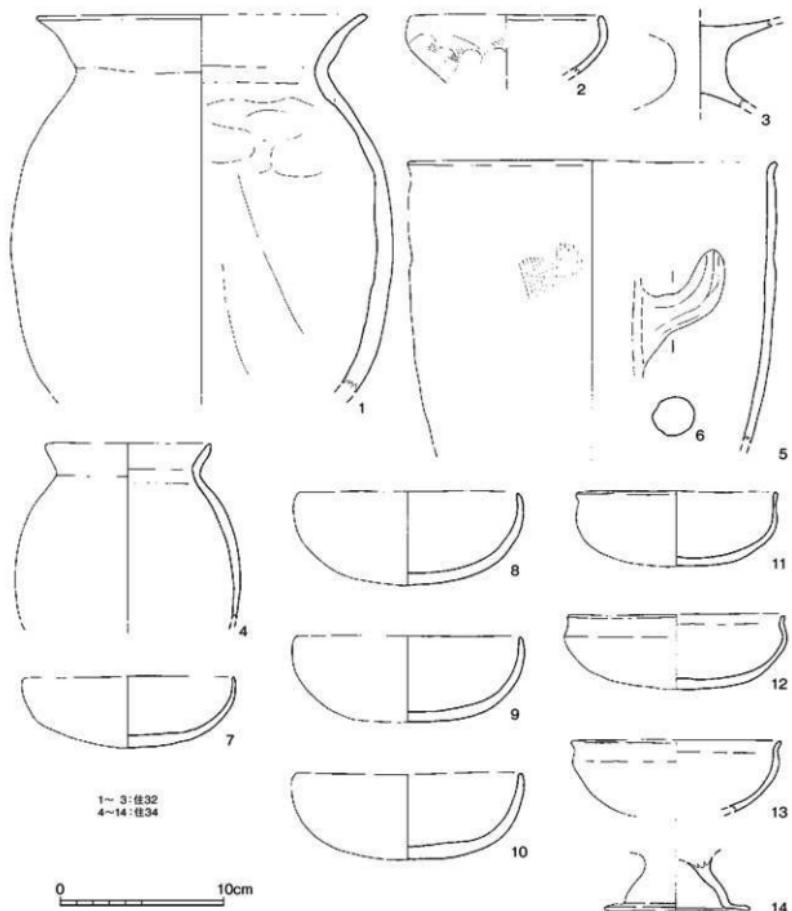
カマド

調査当初、カマドはほかの住居跡と同様西壁側に想定しており、ほかの箇所については掘り下げを作業員に任せて進めていた。ところが、掘り下げ中に南壁側の中央部で支脚様の石材が出土し、こちらにカマドがあることが判明した。掘り下げの過程で、造成崖面に近く残存状況の悪かった左

袖を掘り下げてしまったため、図示できるのはカマドの右側の遺構のみである。右袖は住居跡の南壁と垂直に付き、直線的に0.6mほどのびる。左袖を飛ばしてしまったため燃焼部の幅は不明だが、カマドの中央部から支脚用の小ピットが検出され、これから折り返せば内法で0.8mとなる。支脚として用いられたと考えられる石材が燃焼部の床から浮いた状態で横倒しになっており、表土剥ぎ時に重機で引っかけて原位置を動かしてしまった可能性が高い。支脚用の小ピットは径8cm、深さ5cmほどのごく小規模なもので、周囲から北側にかけて径0.4mほどの不整円形に被熱硬化面が広がっていた。

出土遺物

土器（図版25、第35図1～3） 1は外面を強く横撫でして変化を加えるの口縁部をもつ甕で、体部の張りは弱い。体部外面は熱を受けて褐色となり、口縁部外面は黒変、同内面は一部が赤



第35図 32・34号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

変する。器表が荒れているが、内面の箝削り、粘土紐接合痕は確認できる。口縁部付近の1/4が残存。2は口縁部を強く内彎させる椀の小片で、これも器表が荒れているが外面に刷毛目がわずかに見える。口縁部付近の外面が赤変、対応する内面も赤変する。3は短脚の高杯形となるもので、これも器表が剥落する。

33号竪穴住居跡（図版12、第34図）

調査区北寄りの東隅で検出した。北東側に32号住居跡、南東側に31号住居跡が隣接しており、位置的には両者と重複するはずであるが、本住居跡の大半が削平により失われているために、相互の切り合い関係は不明となっている。

遺構として検出できたのは北西側コーナー部付近の周壁溝と3つの小ピットである。3つのピットのうち2つは、径0.3~0.4m、深さ0.2mほどで並んでおり、主柱穴と考えられる。一方、西壁が想定される付近で検出されたやや大きめの浅いピットは、埋土に炭化物の小片を多く含んでいた。この点と、周壁溝との位置関係から、カマド関連遺構を想定しておきたい。以上により、本住居跡は方形プラン・4本主柱の構造を持つ古墳時代後期の竪穴住居で西壁の中央部にカマドを持つと復元しておく。想定サイズは一辺4.5m程度であろう。

数点の土器片が出土しているが、小片で特徴は見えない。

34号竪穴住居跡（図版12、第34図）

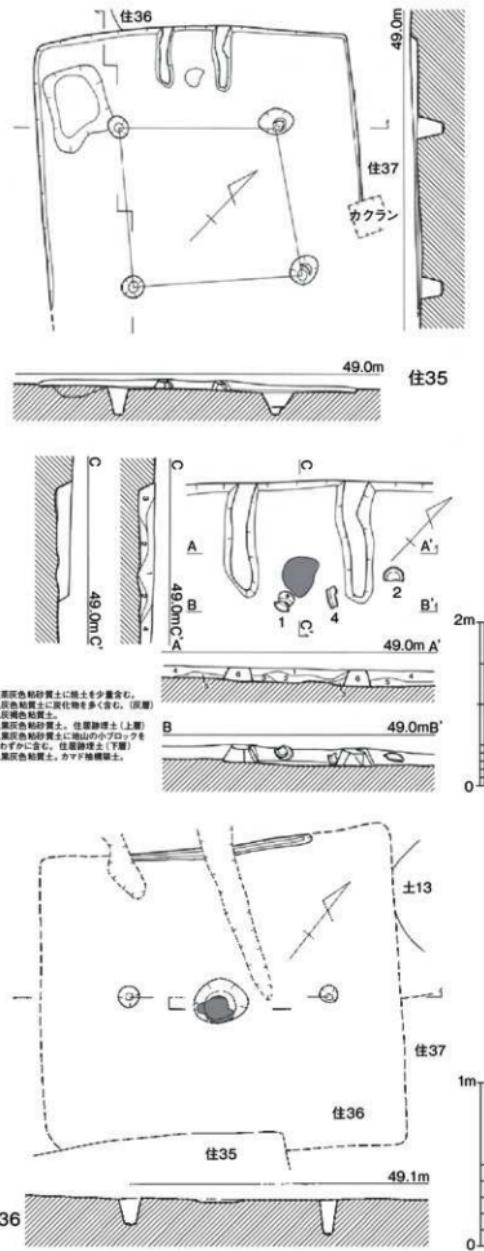
調査区北寄りの東側で検出した。東に33号住居跡が隣接するが切り合い関係にはない。東に向かって緩やかに下る傾斜面上に立地しており、また深い削平を受けているため本住居跡も残存状況は不良で、東側1/2が失われている。

西壁の中央部にカマドを付設し、床面からは4本の主柱穴が検出されている。主柱穴は径0.3m、深さ0.4~0.6m程度を測るしっかりとしたものである。住居跡の規模は、南北方向が完存する西壁付近で4.28m、中央部に向けて膨らみを持ち最大4.7mほどを測る。東西方向については東壁が残っておらず主柱穴配置からの復元となるが、4.0~4.1m程度に復元でき、東西方向にやや幅の広い平面プランを想定できよう。

出土遺物

土器（図版25、第35図4~14） いずれもカマド周辺から出土した土師器。4はく字形に外反する口縁部をもつ小型の甕で、器表が荒れる。カマド右側で瓶や13・14に接して出土。5もカマド右側に細片化して散乱していた瓶で、口縁部付近で1/2ほどが残存する。口縁部を小さく外反させているが、ほとんど円筒形といってよい形状となる。器表が荒れているが、胎土にクサリ礫が目立つ。色調から見て6の把手が5に伴うとの確信はない。

7~12は椀。7~10は丸みをもつ底部から内彎しつつ立ち上がってそのまま口縁部に至る形のものであるが、7は他の3点に比べて浅く終わる。胎土・作りが良好で、内面が淡い、外面が濃い褐色系となるが、本来は黒色化していたとしても知れない。8~10は口径約14cm、器高約5.5cmでよく似ている。器表が荒れて細部不明であるが、胎土・作りは良好である。11・12は口縁部を小さく外反せるもので、ともに器高は4.5cmである。口径で1cmほどの差が出ているが、両者とも底部がほぼ完存するとはいえ、11の口縁部は小片、12は1/4ほどが残存していて、その差によるものであろう。13は一見11・12に似るが、深くなっていて、底部が薄い。これと14は非常に胎土良好で、色調も共通していることから、両者は同一個体であると思われる。



第36図 35・36号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30)

なお、カマド左袖に接するような位置で出土した丸底の壺の体部は図を略した。

35号竪穴住居跡（図版12、第36図）

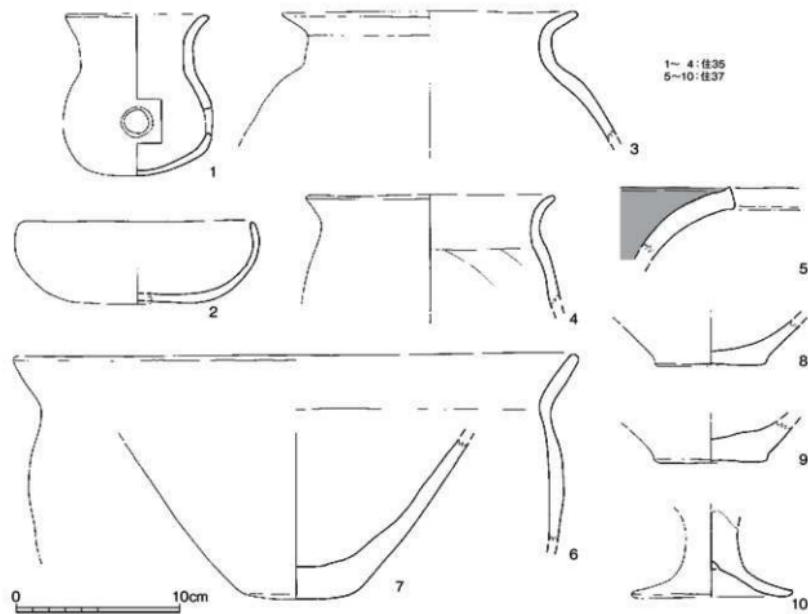
調査区の北東隅部で検出した。36・37号住居跡と切り合い関係を持ち、両者を破壊する。北壁の中央部に内接型のカマドを付設し、床面からは4基の主柱穴を検出している。住居跡の南東側が削平により失われており規模は不明瞭ではあるが、残りのよい北壁付近での東西幅は3.82mを測り、また主柱穴の配置と北壁の位置から南北長さを復元すると4.0~4.2m程度の大きさとなる。従って、平面が大略方形のプランを持つ4本主柱の竪穴住居に復元できる。深さは最大でも0.1m弱で残りは悪い。

カマド

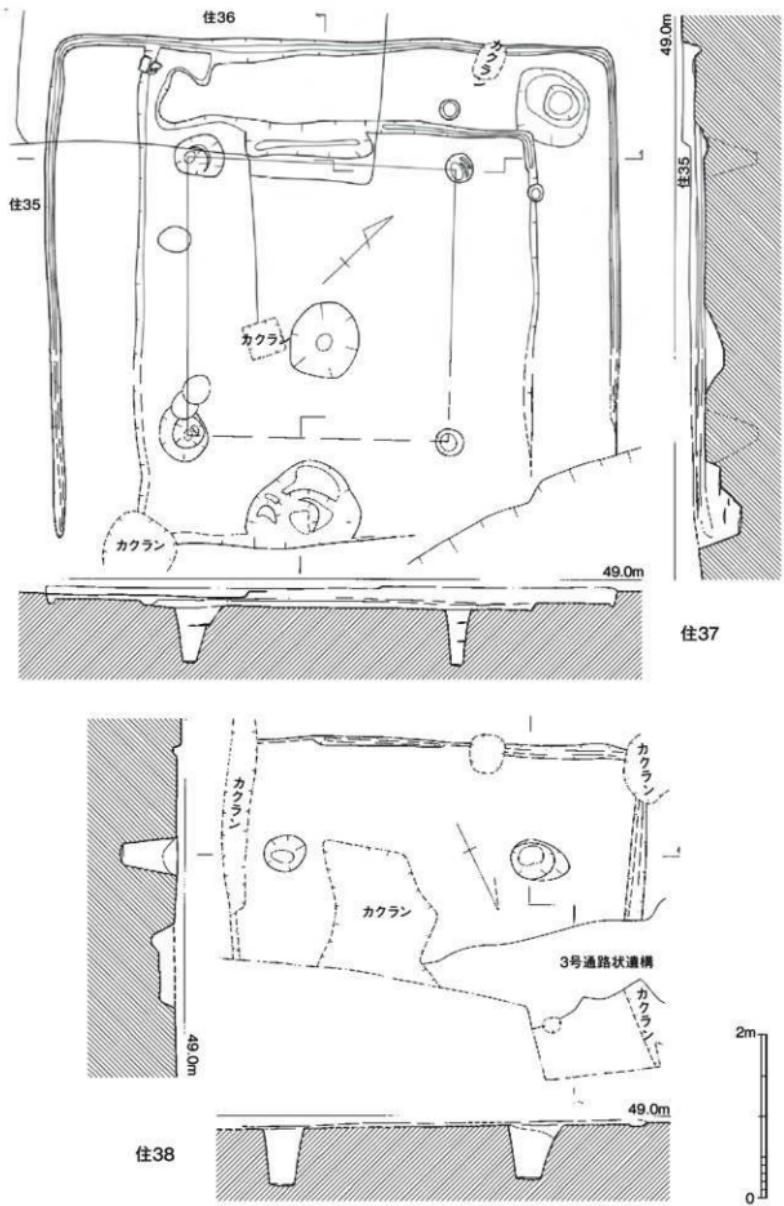
北壁の中央部に内接型のカマドを付設する。袖は住居の壁と直角に付き、二本がほぼ並行しながら0.6mほどのびる。燃焼部の幅は内法で0.5mほどである。袖の先端部に挟まれた燃焼部の床面に不整形に被熱硬化面が形成される。埋土は上層にカマド崩壊土が堆積し、その下に厚く灰層が形成される。灰層の下にはカマド壁の崩落土が両袖側に薄く堆積しており、おそらく使用中に部分的にカマド壁が崩落したものをそのままにしていたものであろう。カマド構築土はほかのカマドと同じく黒灰色粘質土からなる。

出土遺物

土器（図版25、第37図1~4） いずれも土師器で、1・2・4はカマド実測図に示しているが、3の注記も「カマド」とある。1は腹形の壺で、頸部以下は完存、口縁部は1/2が残存する。体部中位に焼成前にあけた円孔がある。メリハリのない形状となるが、胎土は精良といってよい。全体に



第37図 35・37号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第38図 37・38号竪穴住居跡実測図 (1/60)

赤変して器表が荒れるが、口縁部外面が特に赤くなる。2は平底の底部から強く内彎して立ち上がる体部がそのまま口縁部へと連続する椀で、器表のほとんどが剥落する。3は口縁部が強く外反、これも器表が荒れている。4は口縁部付近で1/2が残存する壺片。全体に赤くあるいは黒く変色し、器表が剥落する。

36号竪穴住居跡（第36図）

調査区の北東隅部で検出した。37号住居跡・13号土坑を破壊し、35号住居跡に破壊される。深く削平を受けており、壁はほぼ完全に失われていたが、幸い硬化面が形成されており、その範囲をおおよそ取り込んで推定される住居跡の広がりを点線で示している。それによれば南北3.6m、東西4.5mほどの規模を持つ長方形プランの竪穴住居跡に復元できる。床面からは2本の主柱穴と焼土を伴う浅い炉跡を検出した。主柱穴は直径0.2~0.25m、深さ0.4m前後を測る小さなもので、上面はわずかに削平されている可能性もある。北壁の中央部に周壁溝が掘られているが、東西の壁からそれぞれ約0.9mほど周壁溝がみられない箇所があり、調査担当者は東西両壁面に幅0.9mほどのベッド状造構を設置していた可能性を指摘しているが、硬化面との関係が不明であり懐疑的とならざるを得ない。出土遺物はない。

37号竪穴住居跡（図版13、第38図）

調査区北東隅部で検出された住居跡である。35・36号住居跡により南西コーナー部付近を大きく破壊されているが、本住居跡の方が深く付近での残りは比較的よい。一方北東コーナー部付近は東に下る緩斜面となっていて削平により一部失われている。

平面プランは略方形で、南北6.22m、東西6.84mの規模を持つ比較的大型の住居跡である。長軸側にあたる東西両方と短軸のうち北側に幅0.9~1.0mほど、高さ0.1m弱のベッド状造構を付設する。南壁の中央部やや西寄りに壁際土坑を付設していてこの辺にはベッド状造構がつかないことが明らかである。主柱穴は住居の中央に正方形に4つ配置され、柱間距離は3.24~3.4mほどを測る。また住居跡のほぼ中心に長軸0.95mほどの大型の不整円形を呈する炉跡を設置する。

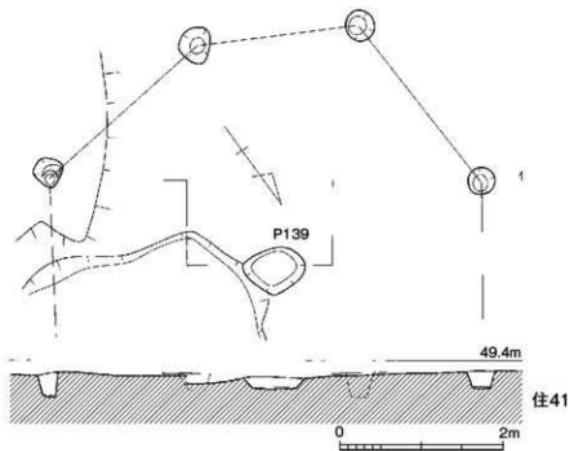
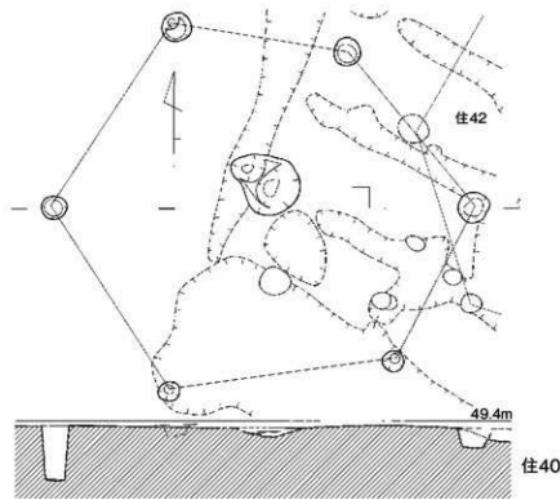
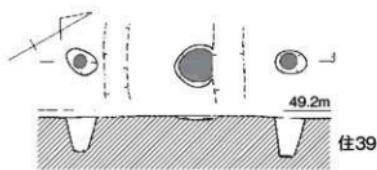
出土遺物

石製品（図版31、第72図16・第75図40） 第72図16は非常に緻密な砂岩製の砥石である。図表裏が使用されて中央付近がわずかに凹む。破面を除く側面も使用されて滑らかとなる。仕上げ砥であろう。第75図40は顯著な使用痕は認められないが、全体に滑らかとなる安山岩。図の表面には不連続の浅い凹みがあるが、これも使用痕との確信はない。

土器（第37図5~10） 5は端部にしっかりとした面を付す壺口縁部の小片。器表が荒れているが、内面のみに赤色顔料かと思われる変色が部分的に見られる。6は張りの弱い体部からく字形に弱く開く口縁部をもつ。鉢であろうか。黄白色に発色するが、器表が荒れる。口縁部付近で1/4が残存。7は平底であるが、外縁が丸みをもつ底部で、全体に焼けて赤変する。8・9はしっかりとした平底で、薄手となる。10は小型の脚台。胎土は良好といってよいが、器表が荒れて調整痕は見えない。

38号竪穴住居跡（第38図）

調査区北東隅部で検出された。3号通路状造構と切り合い関係を持ち、これに破壊される。半分ほどが北側の調査区外に広がるほか、東側も攪乱により破壊されており全形は不明である。



第39図 39~41号竪穴住跡実測図 (1/60)

床面からは主柱穴と考えられる深さが0.7mほどあるしっかりとしたピットを2つ検出しており、これと住居の壁との位置関係から規模を復元すると、一辺5.5mほどの住居跡に復元できよう。出土遺物から古墳時代後期のものと考えられ、平面プランは略方形を想定しておきたい。この想定が正しければ北あるいは西壁にカマドが付設されるはずであるが、西壁の該当箇所は3号通路状遺構により破壊され、北壁は調査区外にあたるため詳細は不明である。

出土遺物は乏しく、かつ細分化したものである。中に須恵器片が1点見られる。

39号竪穴住居跡（第39図）

調査区の北東よりで検出した。西約1.5mの位置に42号住居跡がある。付近は著しい削平を受けたほか、畠の畠跡が縦横に走っていて帶状の擾乱によりひどく荒らされた状況であった。

検出した遺構は3つの小ピットが一直線上に並んだもので、両側の小ピット（直径0.4m、深さ0.4～0.5m）を主柱穴とし、中央のやや大きめの浅いピットを炉跡とすると、二本主柱の竪穴住居跡が想定できる。柱間距離は約2.2mを測るがこれは36号住居跡の主柱間距離とおおよそ共通する。出土遺物はない。

40号竪穴住居跡（第39図）

調査区中央からやや北東寄りの部分で検出した。東側に42号住居跡が隣接する。付近は著しく削平を受けた後で、本住居跡も削平により竪穴部が完全に削られていて、柱の配置から住居跡の存在を推定して復元したものである。

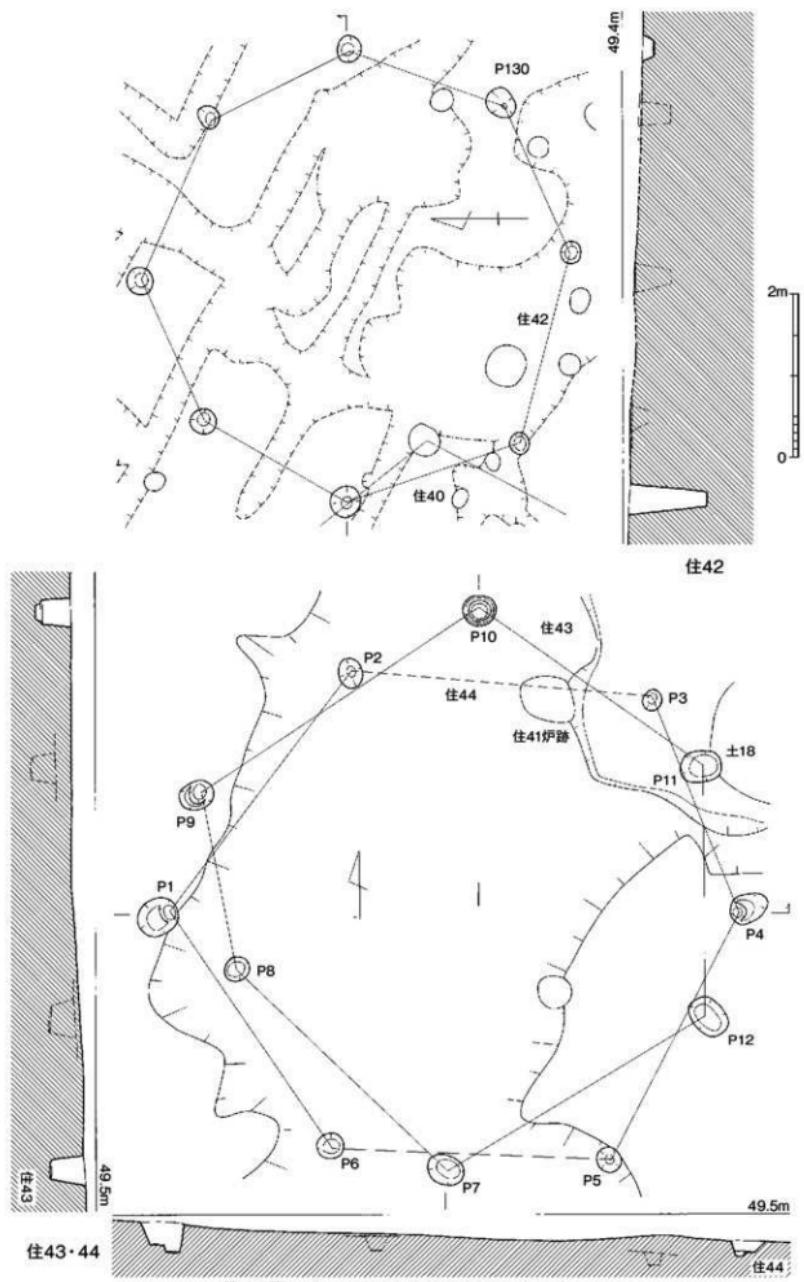
遺構は6つの小ピットが大略円形に配置されたものであり、また併せてその中心部に不整形の皿状遺構（炉跡の可能性がある）を伴うものである。主柱穴の配置にはやや乱れがあり、またピットの深さにも深浅がみられることから、そもそもこれらから竪穴住居を復元していいものかどうか確信が持てないし、擾乱により失われた部分に本来の柱穴が存在した可能性もある。炉跡にしても、削平を受けているにしては残りがよく深さ0.1m以上が残されていること、埋土中に炭化物が含まれているとか被熱の痕跡がみられるなどといった知見が記されていないことなどから、その真偽にはやや不安が残るところはあるが、ここでは調査担当者の見解に従い、円形プランの竪穴住居跡として提示しておく。主柱穴の直径は最大5.2mほどを測り、円形住居跡の規模としては7.8m程度のものを想定すべきであろう。

出土遺物に土器小片が若干あるが、時期等は不明である。

41号竪穴住居跡（第39図）

調査区中央北側で検出した。北側の調査区外に向かって南から北へとのびる浅い谷状落ち込みと重複している。調査担当者によると、当初柱穴の存在に気づかず谷とともに掘削してしまったが、切り合い関係においては谷が古く本住居跡が新しいとの認識である。43・44号住居跡と重複する位置にあるが、残された遺構相互の直接的な切り合い関係はない。

遺構は半円状に並ぶ4本の柱穴と中心の浅いピットで、8本主柱で中心に炉を持つ円形住居跡として復元した。竪穴部や本来の床面は削平により完全に失われている。北側に想定される4本の主柱穴は調査時に谷の埋土とともに掘削してしまったようで、やはり失われている。柱穴の深さは深いものでも0.25m程度であり、谷は北に向けて深くなることから、解釈としての整合性はある。



第40図 42~44号竖穴住居跡実測図 (1/60)

ただし、中央炉が0.15mほどの深さを持っているが、本来の床面は現遺構面よりかなり高かったと想定され、ここまで炉跡の残りがよいものかどうかや疑問は残る。柱穴から炉跡までの距離がおおよそ3mを測るため、柱穴列の直径は約6m程度、竪穴住居の規模は約9mと推測される。

図示していないが、P139とした炉跡から焼けた厚底の底部片が出土していて、弥生中期初めに位置付けられる。

42号竪穴住居跡（第40図）

調査区の北東寄りで検出した。西側に40号住居跡が隣接し、竪穴部が重複する位置にあるが、両者ともに削平により竪穴部が完全に失われていて残された遺構同士の切り合い関係はない。

建物の基礎や烟の歎跡などの攪乱が縦横に走る中、8つのピットが円形に配されており、円形住居跡の竪穴部が削平され柱穴のみが残された遺構と判断した。本住居跡の主柱穴配置はほかの円形住居よりも整然と配置され整った感がある。ただし柱穴の深さはまちまちで、最も深いもので1.0m、浅いものでは0.2m程度のものもみられ、やや不安が残る。柱穴列の直径は5.4～5.6mほど、これに基づく竪穴部の復元直径は8.2～8.4mほどとなる。

図示していないが、P130とした柱穴から真っ赤に焼けた薄手平底の底部片が出土していて、弥生前中期に位置付けてよかろう。

43号竪穴住居跡（第40図）

調査区中央北寄りで検出した。41号竪穴住居跡の南側にあり、同じく谷状落ち込みと重複していくこれに後出する。41号住居跡と想定される竪穴部が半分ほど重複し、また本住居跡とほぼ同じ位置に44号住居跡を想定していてこれとはほぼ完全に竪穴部が重複するが、ともに残された遺構との切り合い関係はなく先後関係は不明である。

主柱穴としてはP7からP12までの円形に配される6本を想定したが、P9はやや位置が悪く不安が残る。主柱穴の直径は0.3～0.5m程度、深さは0.3m程度でおおよそ共通する。柱穴列の直径は6.5～7m程度、これより復元される竪穴部の想定直径は9.7～10.5m程度であろう。

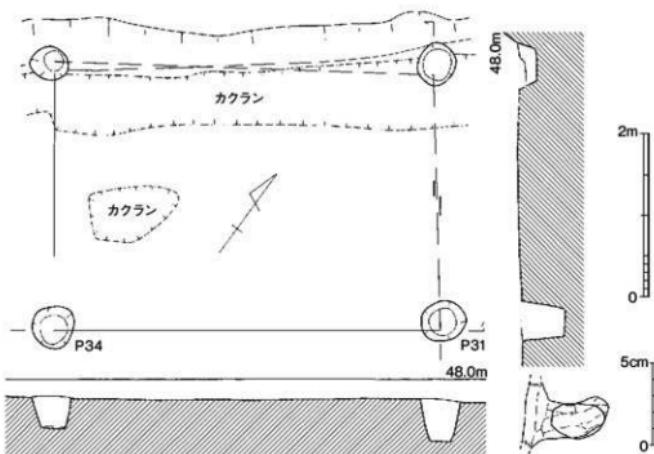
出土遺物はないが、遺跡の在り方から見て弥生時代前中期から中期初めに属するとしてよい。

44号竪穴住居跡（第40図）

調査担当者は把握していなかったが、報告者が図面の整理時に柱穴が円形に並ぶことを確認し、住居跡の可能性があるものとして報告する遺構である。従って、調査時の柱穴埋土の色調などの情報は参考にしていない。

第40図ではP1～6が本住居跡の柱穴として想定した柱穴列である。43号住居跡とほぼ同じ場所にあり、柱穴は位置をずらしてやはり円形に廻る。従って想定される竪穴部は43号住居跡のほか41号住居跡とも重複するが、残された遺構同士の切り合い関係はなく先後関係は不明である。このほかP11が8号土坑と切り合い関係を有しこれに後出する。主柱穴の直径は0.2～0.45mとやや幅があり、柱穴の残存深さもまちまちだが、柱穴の底面レベルにはそれほど大きな差はない。柱穴列の直径は6.8～7.0mほど、これから復元される竪穴部の想定直径は10.2～10.5mほどとなる。

出土遺物はないが、43号住居跡と同様の時期であろう。



第41図 1号掘立柱建物跡・出土土器実測図 (1/60・1/3)

(3) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第41図）

10号住居跡の南にあり、造成崖面下で検出した。軸を北東-南西へとる1×1間の掘立柱建物跡である。9~11・18号住居跡と重複する場所にあるが、前者がいざれも削平により大きく損なわれていて本遺構が存在する範囲まで広がっておらず、残された遺構同士の直接的な切り合い関係はない。建物の規模は桁行で4.7m、梁行で3.1~3.35mを測り、床面積は約15m²である。柱穴の直径は0.5~0.55m、深さは0.4~0.5mを測る。

出土遺物

土器（第41図） P34とした柱穴から短く扁平な瓶の把手が1点出土している。焼けて赤変する。また図示していないが、P31とした柱穴から椀底部片が出土している。1×1間の建物跡は弥生時代の遺構というイメージがあるが、この建物跡は古墳後期に属する可能性が高い。

(4) 土 坑

調査区内の各所から計19基の土坑が検出された。所属時期は弥生時代のものが最も多い、平面プランが円形で中位以下が開口部よりも膨らむいわゆる袋状貯蔵穴が10基ある。

1号土坑（図版13、第42図）

調査区の中央東寄りで検出した。東隣に2号土坑があり、これに一部破壊される。北にはやや離れて26~28号住居跡が、南には20・21号住居跡が分布する。

直径1.6m、深さ0.8mほどの円筒形のやや深い土坑の東側に一辺0.7mほどの方形プランの浅い段がつくやや特殊な形状をした土坑で、円筒形の部分は壁が内傾していて、底面には浅いピットがあ

るが、これらは円形プランの袋状貯蔵穴の特徴によく合致し、本例もおそらく弥生時代前～中期の袋状貯蔵穴の上半分が削平により失われたものであろう。東側に付く浅い方形の段については土層をみても同一の埋没過程で埋まっており、円筒部と一体の遺構と評価される。行橋市下稗田遺跡などにも類例があり、貯蔵穴におけるための段状遺構である可能性もある。埋土は自然堆積の様相を呈し、特に4・5層は古墳時代の遺構埋土と類似することから、最終的な埋没はこの時期とみられる。

出土遺物

土器（図版25、第43図1～11） 1は口縁部外面下位に突帯を付す下城式壺の小片。2～7は口縁部上端に小さな平坦な面を作る城ノ越式の形態となる壺。2は他に比して体部の内縁が顯著で、口縁部は内側へ小さくつまみ出されるとともに、粘土帶を付して外側へ肥厚する。粘土帶が小振りで、一見朝鮮半島に由来する「無文土器」を思わせる形状である。外面に刷毛目が残るが、内面は撫でて仕上げようである。体部最大径付近から下位は真っ赤に変色、それ以上は暗褐色、内面は灰黒色となる。胎土に特異な点は見られない。3は体部が直線的に小さく開いて立ち上がる。やはり口縁部を内側へ小さくつまみ出し、外側に粘土帶を付して肥厚させるが、2より接合がしっかりしている。剥離ではなく、口縁端部付近で欠損することもその証左であろう。体部外面は褐色を呈し、細かい刷毛目がよく残る。内面は赤褐色となり、箠磨きで仕上げる。なお、器肉も赤褐色である。4は小片のため傾きに不安があり、これは器表が荒れている。5の口縁形状は4に似ていて、内縁する体部や粘土帶の貼付状況などは2に近い。口縁部下に1条の範描沈線が巡る。全体に焼けて赤変、器表の剥落が見られる。6は口縁部の内側へのつまみ出しが強く、対して外側は断面三角形となる。7は肉厚となるもので、いずれも器表の残りがよい。体部外面は2点ともに細かい継刷毛、内面は6では横優勢の刷毛目、7では同様な箠磨きで調整される。8は図左右両側辺に透孔が入る脚部で貝殻腹縁を用いて施文する。9は図示部が完周する底部で、全体に焼けて器表が荒れているが底部外面が特に赤変する。10・11も完周、10は焼けて外面が真っ赤となり、内面は剥離している。12もよく赤変。

2号土坑（図版14、第42図）

1号土坑の東に隣接し、これを一部破壊する。また、25号住居跡とも切り合い関係にあり、これに切られるようである。

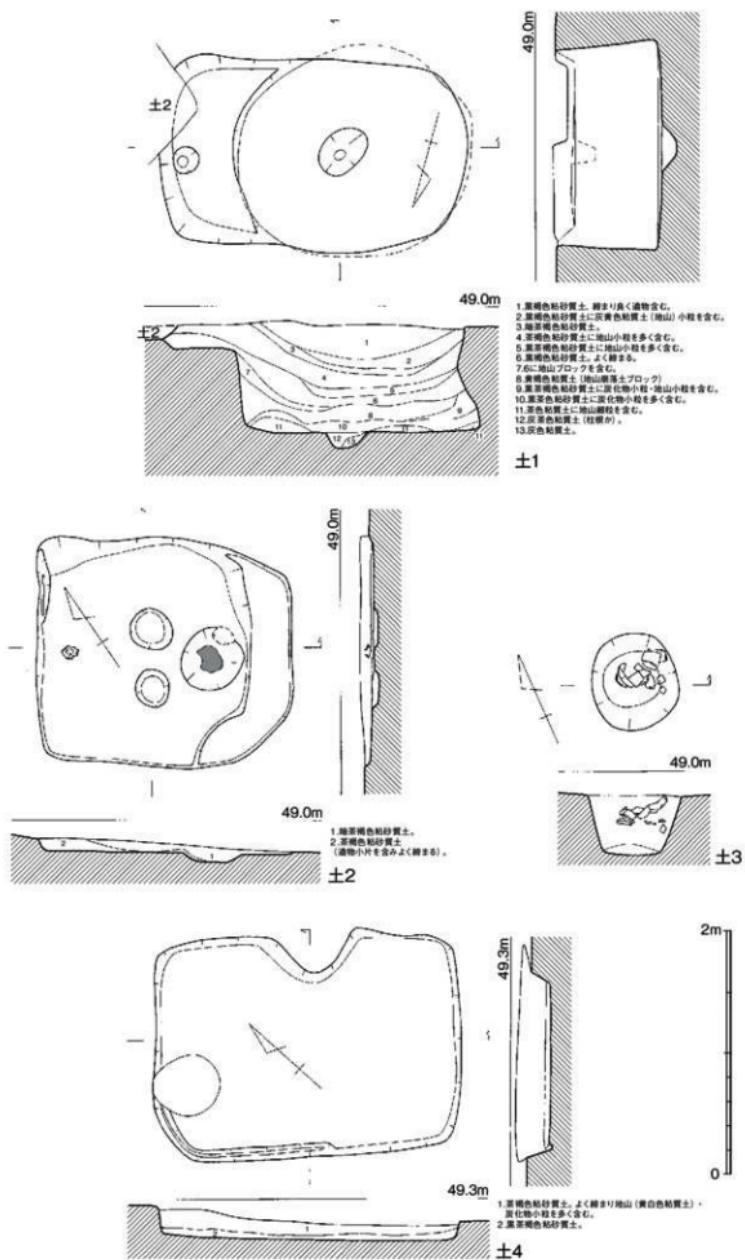
平面プランは略長方形で長軸2.08m、短軸1.86mの規模を持ち、残存する深さは0.1mほどときわめて浅い。底面にはごく浅いピット状の掘り込みが3つほど検出され、中でも特に南東側の大きな1つについては内部に燃土が含まれていて、炉跡の可能性があるとされる。この点を重視すれば、竪穴住居跡のベッド状遺構が四周するタイプの、ベッド状遺構が削平により失われた遺構である可能性もあるが、対応する主柱穴は確認されず、ここでは土坑と報告しておく。

若干出土した土器の中にレンズ状を呈する厚底の底部片がある。

3号土坑（図版14、第42図）

調査区の中央東端、26号住居跡の北西コーナー部付近で検出されたが、26号住居跡の残存深さがきわめて浅く、検出時の識別が困難であったため、当初は26号住居跡の一部を構成する遺構と考えていた。しかし、内部から古墳時代後期の遺物が出土し、26号住居跡が弥生時代後期の遺構と考えられることから、それぞれ別個の遺構と認定した。

直径約0.7mの円形プランを持ち、深さ0.45mで下に向かってすぼまる、小規模な土坑である。



第42図 1～4号土坑実測図 (1/40)

内部から土師器の壺型土器などがまとめて出土したが、いずれも底面からは浮いた状態で検出された。

出土遺物

土器（図版26、第43図13） 体部の一部を欠くものの口縁部から底部まで復元できた土器で、壺と呼ぶべきであろうか。頸部が縮まり、急角度で外反する口縁部は緩く外彎して短く立ち上がる。体部は張りが強く、小さな平底へ続く。被焼した様子は見えないが器表は荒れていて、体部内面の一部に刷毛目が見えるだけである。形状から弥生後期に属する。なお、口縁部から頸部にかけて、径5cmほどの範囲で灰味帯びる緑色の付着物がある。当館が保有する蛍光X線分析装置では特別な金属類を検出できず、有機物あるいは岩石に由来するものであろうという。

4号土坑（図版14、第42図）

調査区の中央東寄り、27号住居跡の南西側に位置する。長方形プランで2.5×1.8mの規模を持ち、残存深さはきわめて浅く0.2mほどである。北東側の辺の中央部が内側に突き出るやや特徴的な形状を持つ。

出土遺物はない。

5号土坑（図版15、第44図）

調査区のはば中央、わずかに南東寄りで検出した土坑である。北に隣接する6号土坑と切り合って、これを破壊している。平面プランは不整長楕円形で、側壁はわずかに袋状を呈する。北側に小さな突出部を持ち、段状になっているが、小ピットが切り合っていたものを同一の遺構と誤認した可能性もあり積極的な評価はしづらい。規模は短軸が1.15m、長軸は1.7m、深さは0.5mほどを測る。埋土は比較的細かく分層でき、自然堆積により埋没した様相を示す。

出土遺物

土器（第43図14） 口縁部の1/4ほどが残存する城ノ越式の壺片。口縁部を逆L字形とするものである。内上面端から頸部外面にかけて真っ黒となり、そのやや下位以下の外面が真っ赤に変色する。器表は荒れて剥落する。他に箋描沈線を巡らせた壺の小片などがある。

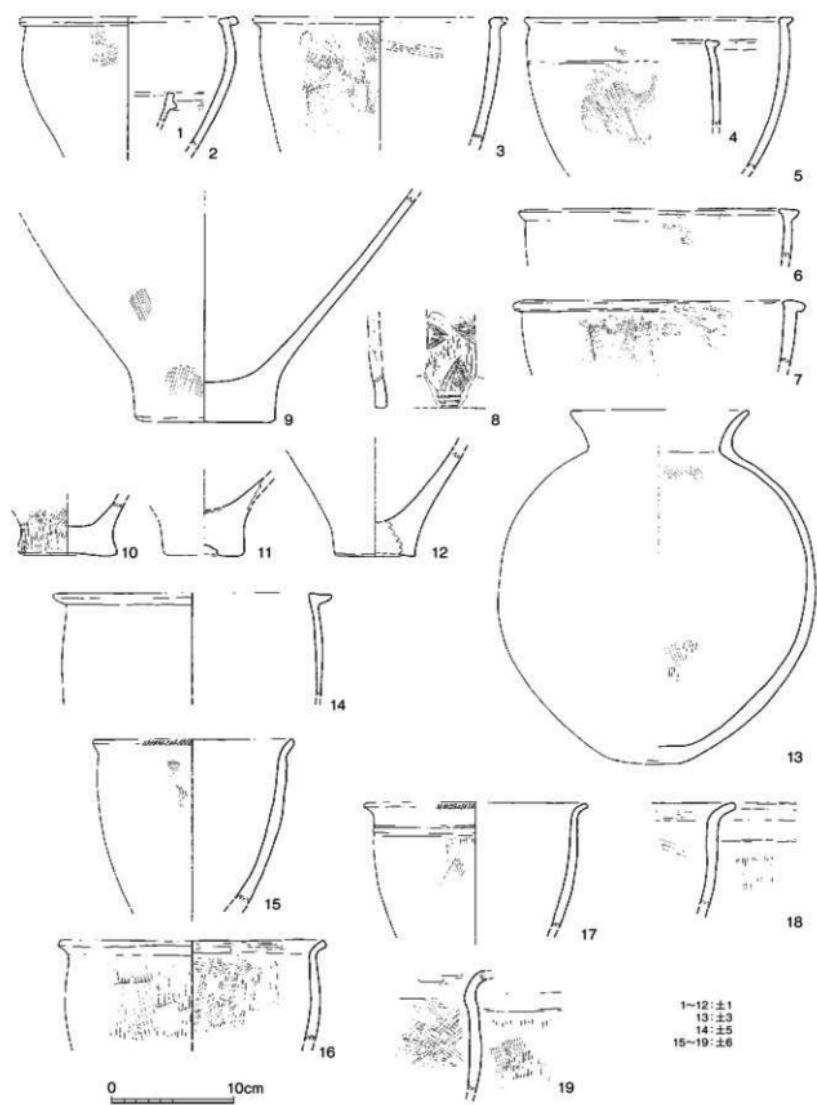
6号土坑（図版15、第44図）

5号土坑とともに調査区のはば中央で検出した。5号土坑により南側の一部が破壊される。平面プランはほぼ円形で側壁は大きく内傾していわゆるフラスコ状を呈しており、袋状貯蔵穴の上半部が削平された様相を示す。開口部径は長軸1.45m、短軸1.4mで、底径は最大2.2mを測る。土層は比較的細分できるが下層は中央から埋没しており、狭い開口部から流入した土が自然に堆積して埋没した状況を示す。

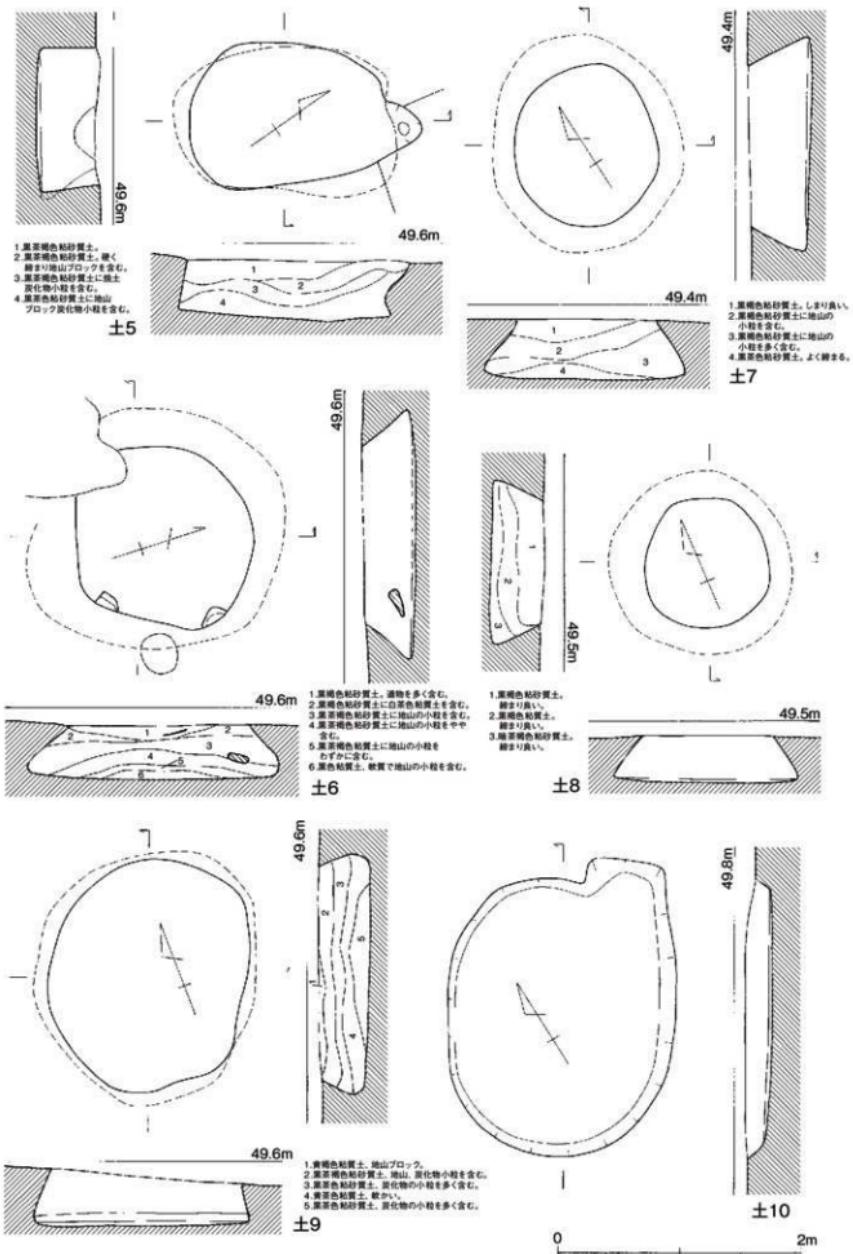
出土遺物

石製品（図版31、第75図41） 図示した面が小さく凹む安山岩で、背面は平滑化しているとは言い難い。

土器（図版26、第43図15～19） いずれも口縁部を緩く外反させて如意形とする壺である。15は口縁部の2/3が残存。口端部下側に小振りの刻みを付す。体部外面は細かい刷毛目、内面は箋磨きで仕上げるようである。残存部下位は内外面ともに赤変する。16は口縁部の外反が強い。器表の残りがよく、体部内外面を箋磨き、継刷毛で調整する。17はやはり口端部下側に小振りの刻



第43図 1・3・5・6号土坑出土土器実測図 (1/4)

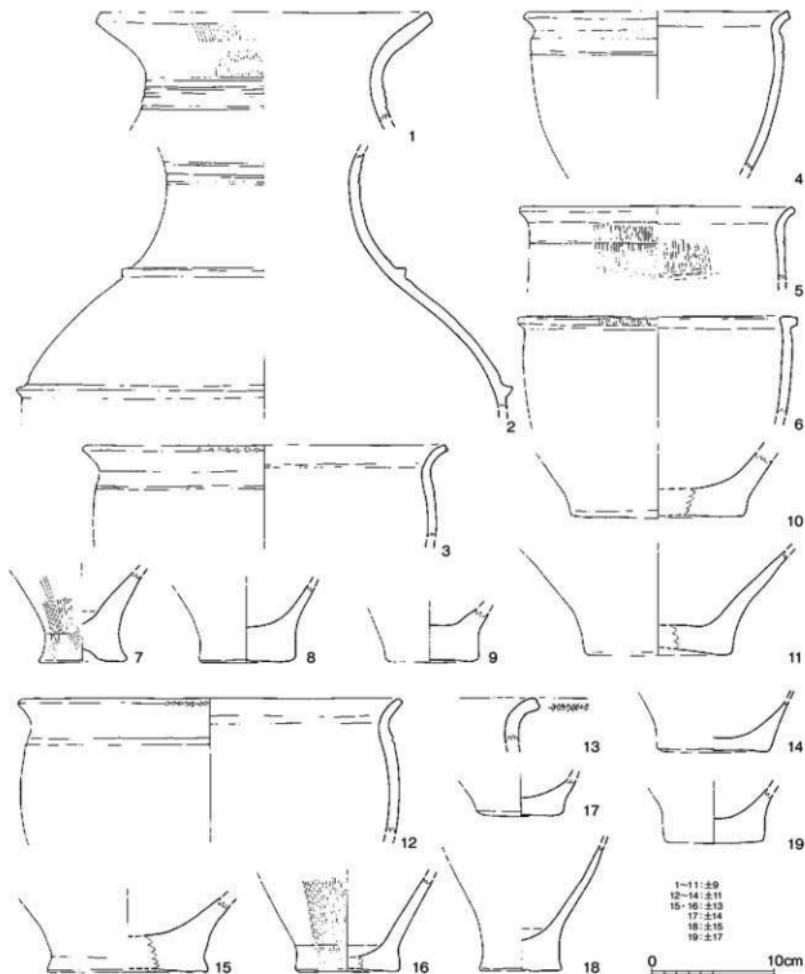


第44図 5~10号土坑実測図 (1/40)

みを付すが、頭部下にも2条の範描沈線を巡らせる。これも体部外面を縱位の刷毛目、内面を範磨きで調整。口縁部の1/3が残存。18は頭部下に1条の沈線を刻む。器表が荒れているが、外面に縱位の刷毛目、内面に範磨きが見える。19は口縁部を欠くが、頭部下に沈線を1条刻むほか、調整痕は18と同様である。図示していないが、厚底となる底部片もある。

7号土坑（図版15、第44図）

調査区の中央やや東寄りで検出した。西側約1mのところに8号土坑が並び、東側には29号住居



第45図 9・11・13・15・17号土坑出土土器実測図 (1/4)

跡が近接する。平面形状は不整円形で、規模は長軸1.32m、短軸1.16mほどを測り、深さは0.35mほどが残る。側壁は著しく内傾しており袋状貯蔵穴の下半部が残された状況である。底径は最大で1.77mと開口部よりもかなり広がる。土層は比較的細分でき、自然堆積の様相を呈する。

出土遺物は少なく図示していないが、口縁部内面を肥厚させる壺片、薄手平底となる底部片など前期内な土器が出土している。

8号土坑（図版15、第44図）

調査区の中央やや東寄りで7号土坑の西に並んで検出した土坑である。平面プランは円形で側壁が著しく内傾する袋状貯蔵穴である。開口部の規模は1.05m×1.02mとやや小型で、底径は大きく膨らみ1.52mほどを測る。残存深さは約0.45mである。

これも出土遺物は少なく小片のために図示していないが、逆L字形となる城ノ越式壺や如意形口縁壺の小片、肉厚となる底部片などがある。

9号土坑（図版15、第44図）

調査区のはば中央部で検出した。南8mほどの位置に6号土坑が、北東4mほどのところに40号住居跡が位置する。平面形状は円形プランで側壁が著しく内傾する袋状貯蔵穴である。規模は開口部径が長軸1.9m、短軸1.6mを測り、残存深さは最大0.45m、底径は最大2.1mほどの規模を持つ。埋土は細かく分層でき、下層は中央部から堆積していく、開口部から流入した土砂が自然堆積した様相を示す。

出土遺物

土器（第45図1～11） 1は口頸部がC字形に大きく開く壺で、口縁部の2/3が残存する。外面は刷毛目で調整し、頸部に4条の範描沈線が巡る。2は肩部及び体部最大径部分のやや上方に断面三角突帯を巡らせる壺で、胎土は良好だが器表が荒れている。なお、上下の突帯間は接合せず、図上復元したものである。3～5は如意形口縁壺。3は口端部下位に微妙に刻み目が見え、幅広く浅い沈線を巡らせる。内面がよく赤片。4も同様の沈線を付すようだが器表の荒れが甚だしい。5は外面全体がよく被熱して赤変し、沈線や調整痕が失われる部分もある。内面では口縁部付近が赤辺、頸部以下は黒色化する。6は城ノ越式壺で、これも赤変が著しい部位が斑状に見られ、内面では黒色化する部分もある。

7～9は壺底部片。いずれも焼けて赤変し、7では外底面を大きく凹ませる。10・11は壺底。

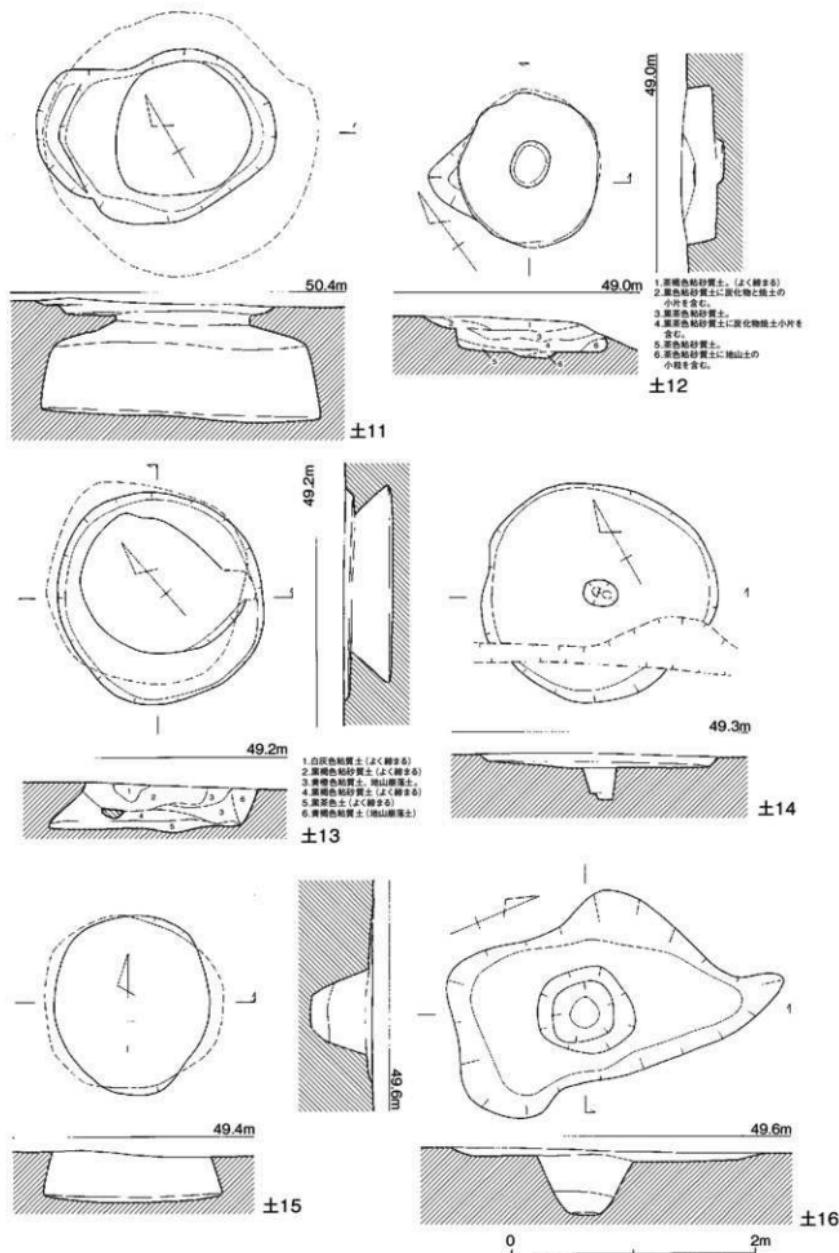
10号土坑（図版16、第44図）

調査区の中央やや南寄りで検出した。5・6号土坑の西に隣接するが、ほかの遺構との切り合い関係はない。平面形状は梢円形を呈し、北東隅部に方形突出部が付く。規模は長軸2.30m、短軸1.84mほどを測り、残存深さは0.2mほどときわめて浅い。

如意形口縁壺や肉厚となる底部の小片がわずかに出土する。

11号土坑（図版16、第44図）

調査区中央やや南寄りの西側で検出した。1号溝の北側に位置する。付近は後世の造成により著しく削平されており、多くの遺構が失われたとみられる。本土坑は大型の袋状貯蔵穴であり、上半部は大きく削平されていて頸部以下の下半部のみが残存していた。検出面では長軸2.0m、短軸



第46図 11~16号土坑実測図 (1/40)

1.4mほどの不整長楕円形状を呈し、急激にすばまって直径1.0mほどの不整円形の頸部を経て、2.3～2.4mほどの直径を持つ袋部へと至る。頸部は5～8cmほどの深さしかなく、崩落に耐えるほど構造には見えないが、上面が著しく削平されていて本来の形状は不明であり、もっとしっかりした頸部を持っていた可能性は高い。袋部の深さは0.6～0.8mほどを測る。

出土遺物

土器（第45図12～14） 12は如意形口縁をもつ甕小片で、体部から口縁部まで器壁の厚さが変わらない。口端部下端に小振りの刻みを付し、頸部下に範描沈線を巡らせる。頸部に指頭痕、内面には範磨きが見える。13も如意形口縁をもつ甕小片で、頸部下に範描沈線を刻む。外面は器表が剥落、内面では範磨きが見える。14は甕底部。

12号土坑（図版16、第46図）

調査区北寄りの東端で検出した。33号住居跡と重複する位置にあるが、33号住居跡が大きく削平された箇所に位置していて、切り合い関係は把握できなかった。ただし、後述するように出土土器や遺構の形状などから、本土坑が先行すると考えられる。本土坑も造成傾斜面に位置していて、上半部は大きく削平されている。検出時の平面形状は西に小さな突出部を持つ不整円形で、底面形状も略円形を呈する。大きさは直径1.2mほどを測り、壁はほぼ直立しつつわずかに内傾する。底面中央に深さ数cmの円形のくぼみを持つ。形状などから、袋状貯蔵穴の下半部と判断される。

如意形口縁甕や厚底となる底部の小片が若干出土している。

13号土坑（図版17、第46図）

調査区の北西コーナー部付近で検出した。36号住居跡と切り合い関係を持ち、36号住居跡の残存深さがきわめて浅いために検出時において遺構同士の切り合い関係は判断できなかったが、出土遺物や遺構の形状などから、本土坑が先行する弥生時代前期の袋状貯蔵穴で、36号住居跡が後出する弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。検出面における平面形状は直径1.7mほどの規模を持つ不整円形で、検出面から5cmほど下がったところで強くすばまり、下半部はラスコ状に広がって直径1.8mほどの不整円形の底面を形成する。頸部は崩落により一部破壊されたとみられ本来の大きさは不明である。

出土遺物

石製品（図版31、第73図29・30） いずれも表面が全体に滑らかとなる安山岩。29は形状不整といつてもよいが、図示した面が明らかに敲打によって凹み、背面もこれは敲打によるものではないがわずかに凹んでいる。また、図左端は欠損していて、これも使用の痕跡であるかも知れない。30はやはり図示した面が敲打により凹み、背面にも同様の跡が見える。また図右下背面、図表面下端、図左側縁で欠損が見られ、これらも使用の結果であるかも知れない。

土器（第45図15・16） 15は壺底部片で1/4ほどが残るが、器表が荒れている。16は1/2程が残存する甕底部片。これも器表が荒れるが内面に範磨き、外面に細かい刷毛目が見える。また、図示していないが薄手平底の底部小片がある。

14号土坑（図版17、第46図）

調査区の北東寄りで検出した。南に29号住居跡が、東に34号住居跡が位置するが、ほかの遺構との直接的な切り合い関係は持たない。付近は烟の歯跡などにより著しく乱されており、本土坑も

顯著に削平されている。検出時の平面形状は直径1.95mほどを測る円形で、残存深さは0.1m弱である。底面の中央に径0.25m、深さ0.25mほどの小ピットがあり、他の類例などから袋状貯蔵穴の底部付近のみが残存したものと判断した。

出土遺物

土器（第45図17） 完周する底部片で、器表が非常に荒れている。

15号土坑（図版17、第46図）

調査区の北東寄りで検出した。南側4mほどのところに40・42号住居跡が位置する。付近はブロック塀の基礎や畑の歓跡により大きく乱され、また著しく削平されている。検出面での平面形状は略円形で直径1.30mほどをはかり、側壁はやや内傾していて底面は口径より広く直径1.50mほどを測る。形状から弥生時代の袋状貯蔵穴と判断される。

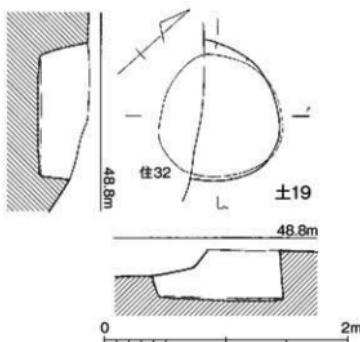
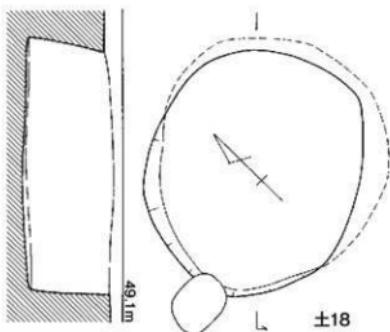
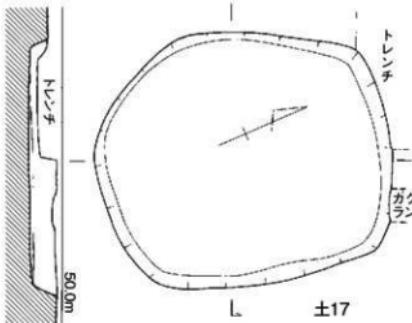
出土遺物

土器（第45図18） やや肉厚となる壺底部片で、図示部はほぼ完周する。外底面から体部外面にかけて大部分が真っ赤に焼け、器表も荒れている。

16号土坑（図版18、第46図）

調査区の中央北寄りで検出した。谷状落ち込みの南端部に位置し、これを破壊している。平面形状は不整長椭円形状を呈し、規模は長軸が2.70m、短軸が1.30mほどを測る。中央に直径0.7m、深さ0.45mほど、黒褐色の埋土を持つピットがあるが、ピット以外の部分の残存深さがきわめて浅く土質の検討が十分にできなかったため、このピットが本来より本土坑の一部を形成するものであったかどうかは定かではない。

出土遺物はない。



17号土坑（図版18、第47図）

調査区の北西コーナー部付近で検出した。付近は調査区の中でも最も削平の著しい付近にあり、遺構の大半が失われているとみられるほか、残された遺構の一部も試掘時のトレ

第47図 17~19号土坑実測図 (1/40)

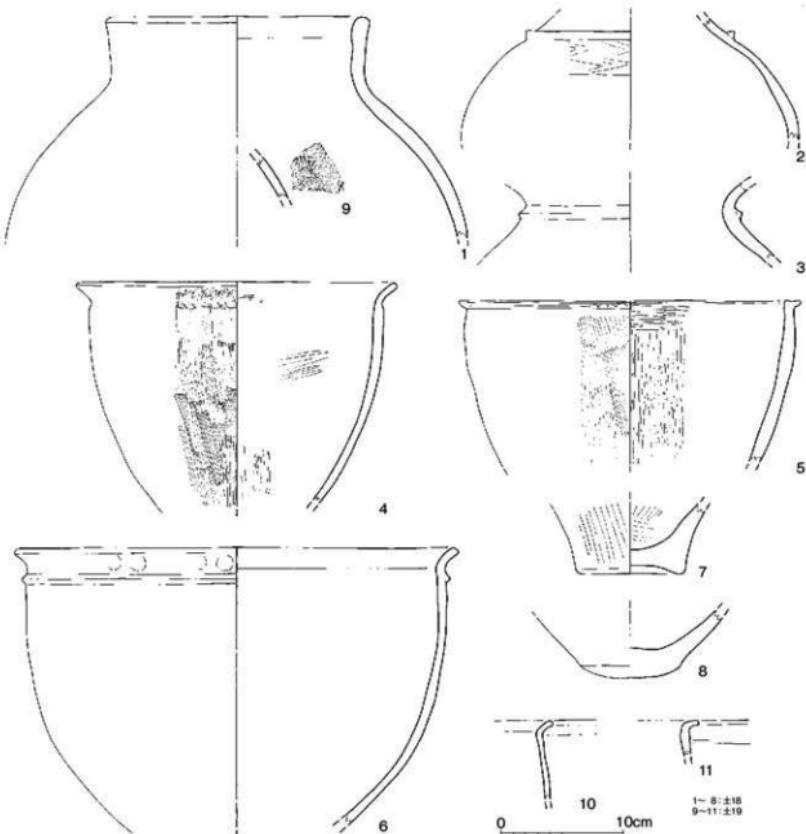
ンチにより破壊されている。検出面における平面形状は不整楕円形で長軸2.45m、短軸2.10mほどを測る。深さは浅く0.2mほどが残るに過ぎない。壁はやや開きながらのびており、袋状貯蔵穴とはやや異なる印象を受ける。

出土遺物

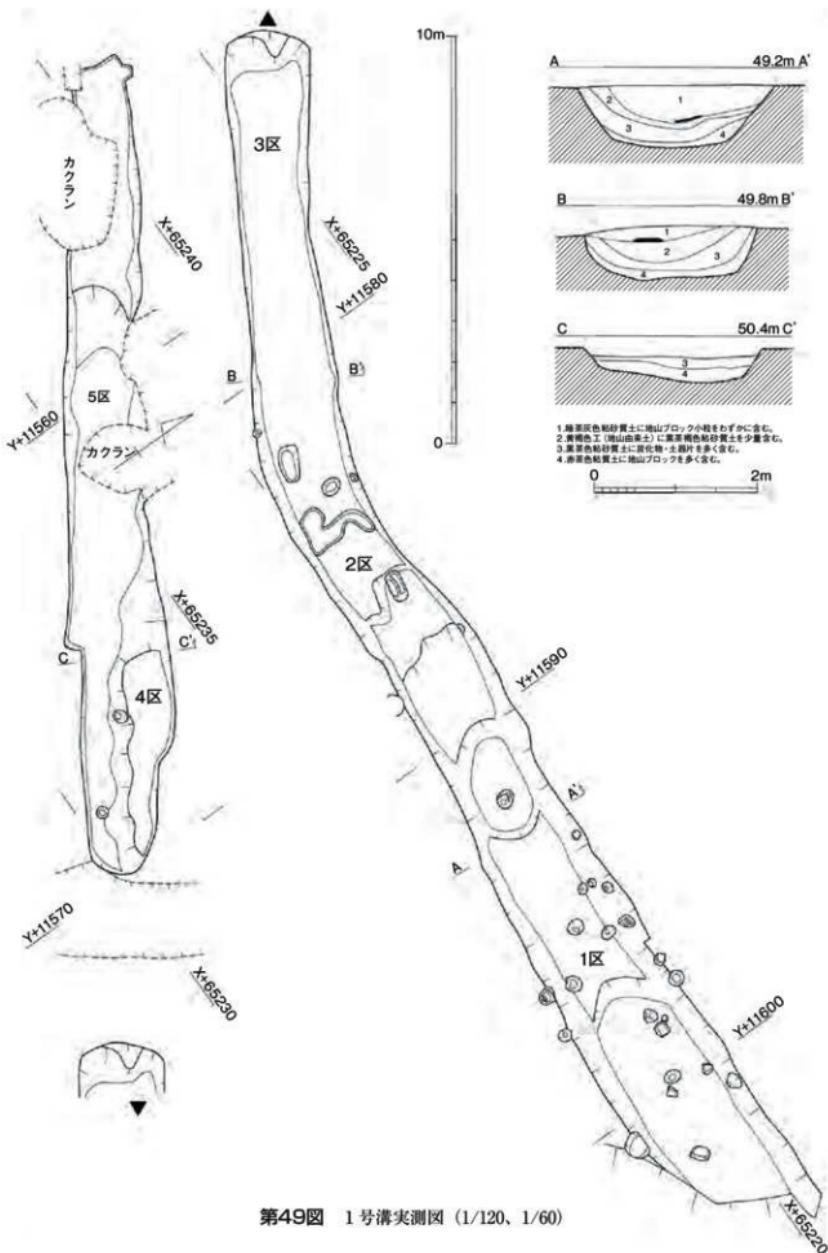
土器（第45図19） 器表が荒れる底部片で、1/3が残存する。ほかに如意形口縁甕などの小片がわずかに出土している。

18号土坑（図版18、第47図）

調査区中央北寄りで検出した。谷状落ち込みの中央東よりで谷状落ち込みと切り合い関係を持ちながら検出された。東側壁の一部が41号住居跡を構成する主柱穴の1つに破壊されており、41号住居跡に先行する遺構である。平面形状は不整長楕円形で長軸2.00m、短軸1.75mを測り、深さは0.7mほどとよく残る。残念ながら土層図を作成しておらず検証はできないが、調査担当者によれば本土坑の埋土は黒褐色粘砂質土と黄褐色粘質土ブロックが互層を形成しつつ3層ほど堆積してい



第48図 18・19号土坑出土土器実測図 (1/4)



第49図 1号溝実測図 (1/120、1/60)

たといい、これらが谷状落ち込みの土層3～5層と共通することから、本土坑は谷が埋没する前に谷の落ち際に掘削され、その後ある程度埋没したあと最終的に谷とともに埋没したと判断できるという。

出土遺物

石製品（図版31、第72図7） 灰色不透明の姫島産黒曜石である。身が薄く、縱長の二等辺三角形形状で基部の抉りは浅い。0.87 g。

土器（第48図1～8） 1は口縁部が直立する変わった壺である。口縁部の1/4が残存。器表が非常に荒れているが、内外面ともに範磨きで仕上げているようである。胎土は精良といってよい。2は肩部に断面三角突帯を付す壺片。焼けて赤変し、外面には大小の弾けがある。横位の鋸歯文を刻むが、原体ははっきりしない。3は頸部に断面三角突帯を付す壺で1/3が残存。全体が真っ赤に焼けて器表が荒れる。4は如意形口縁、5は逆L字形口縁をもつ壺で、両者とも外面は縱位の刷毛目、内面を範磨きで仕上げる。胎土も良好である。6は如意形の口縁をもち、頸部直下に断面三角突帯を付す壺だが、口径に比して浅くなるようで鉢とすべきか。突帯下位以上が赤変、さらに下位は煤けるようである。内面は灰黒色となり、体部内外面は範磨きで仕上げる。7は小さな上げ底となる底部片で、胎土良好、内外全面を範磨きで仕上げる。体部下端外面では通常の数mm幅の範磨きの他に1～1.5cmほどの幅をもつ調整痕があるが、これは範磨き前の撫での痕跡であろう。1/2の残片。8はレンズ状となる完周する底部片で、内外面ともに火熱を受けて赤変が著しい。胎土に含まれる砂粒は石英・長石等透明・白色系のもので、有色砂粒が多い後期のものとは異なっていて、形状から混入であると即断はできない。

19号土坑（図版19、第47図）

調査区北寄りの東端に位置する。32号住居跡と切り合い関係にあり、本土坑が先行する。検出面での平面形状は不整円形で長軸1.15mほどを測り、0.4mほどの深さが残存、側壁は一部がわずかに内傾し、小型の袋状貯蔵穴の底部と考えられる。

出土遺物

石製品（図版31、第75図43・44） 暗褐色に近い色調の軽石で、破面は灰白色に近く纖維状となる部分がある。形状は不整で、使用痕・加工痕といったものは認められない。

土器（第48図9～11） 9は木の葉文をもつ壺の小片。器表が荒れて文様が不明瞭となるが、X形に付加するものではなく、4枚の葉を別個に描いたように見える。10・11は如意形口縁をもつ壺の小片。いずれも肉薄で、10は頸部内面に稜線をもち、11はほぼ直角に近く折り曲げられる。

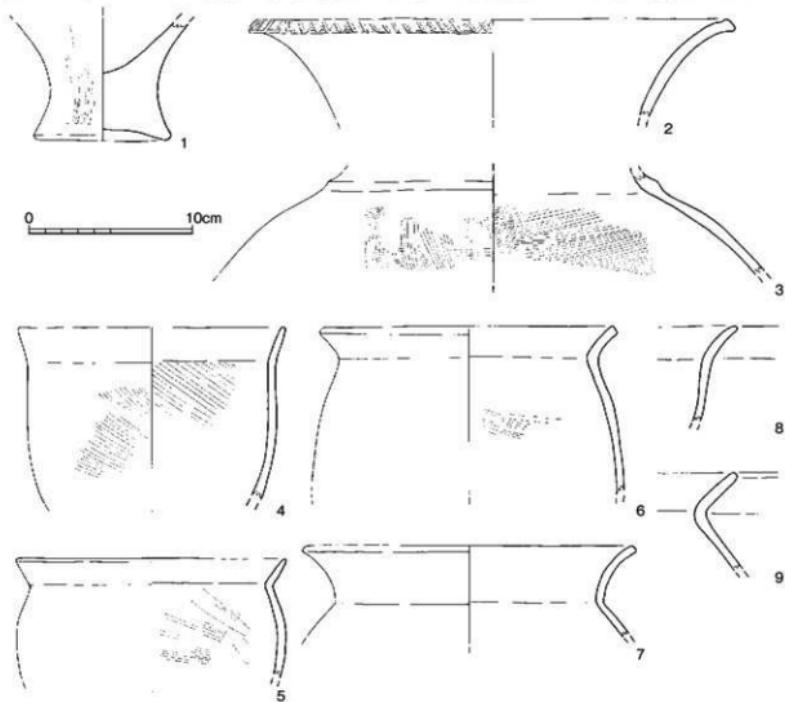
(5) 溝

西ノ原遺跡第3・4次調査区において4条の溝状遺構を検出した。うち最も規模の大きなものが1号溝で、東に隣接する西ノ原遺跡第1次調査A区（豊前市教委により2011年度に調査）、県道を挟んで西に隣接する大西遺跡第4次調査区（福岡県教委により2013年度に調査、本報にて報告）においてもその延長が確認されている。平面プランがおよそ円形に巡る弥生時代後期の環濠と考えられる。ほかに規模の小さな2条の溝を報告するが、いずれも出土遺物に乏しく残存深さもきわめて浅いため、その性格や所属時期等については不明な部分が多い。以下、各遺構ごとに報告する。

1号溝（図版19・20、第49図）

調査区を北西から南東方向に弧を描きながら貫く溝である。調査区の西側は削平により失われているほか、調査区の中程で一部が途切れているが、途切れた部分の東側の終点は壁面が直立気味になつておらず、本来よりこの部分が途切れていて出入り口を形成していたものと考えられる。溝の規模は大きく削平を受けた西側で幅1.8m、深さ0.35mをはかり、比較的よく残る東側では幅3.1m、深さ0.9mを測る。断面形状は逆台形状を呈する。東側の溝底面はテラス状の段を数段設けながら深度が増してゆくという特徴を持つが、これは東に傾斜する旧地形に対応しつつ溝の深さを一定に保とうとした工夫とみられ興味深い。

埋土は4層に分層でき、最下面の4層は溝掘削後まもなく堆積したもので地山に似る。その次の3層の底面には多量の土器が廃棄され、その上に土が土器を含みつつ0.2~0.3m程度堆積していた。2層は厚さ0.05m程度堆積していて、地山ブロックが多く入り、遺物はほとんど含まない。埋土の特徴はやや4層と似た感じがある。最上層の1層の底面には3層と同じく多量の土器が廃棄されていた。造成崖面の東側に当たる西ノ原遺跡第1次調査A区の発掘調査を行った豊前市教育委員会の担当者によれば、本調査区で検出した1号溝の東側延長線上に同じような規模を持つSD-01を検出しており、埋土や遺物の包含状況は本溝とよく類似していたということから、両溝は同一の造構であったと考えられるが、両者の間は段造成により約25m近く削平された空間が存在する。また、



第50図 1号溝1区1層出土土器実測図 (1/3)

本調査区の西に県道犀川農前線を挟んで隣接する大西遺跡第4次調査区でも同様の規模・埋土の溝を検出しておる、巨視的にみると丘陵の頂部を廻る直径125~130mほどの規模を持つ環濠であることがわかる。

出土遺物

調査時に1~5区に分けていて、かつそれぞれ遺物の出土する層は限られていた。非常に多くの石製品・土器が出土しているので、以下では地区割、出土層位にしたがって説明を加える。

1区1層

土器（図版26、第50図） 1は弥生中期初めの甕底部で、混入。底部側面は赤変、底部外面は灰黒色となる。2は口縁部が浅く大きく開く壺で、口端部をわずかに肥厚させて端面にX字形の刻みを施すようであるが、摩滅してよく見えない。3は同一個体であろう。肩部に低い断面三角突帯を付し、内外面を刷毛目で調整する。なお、体部片はもっと張りをもっていたかも知れない。4は体部の1/2が残存するが、口縁部付近は小片であり復元口徑に不安がある。口縁部の外反が弱く、体部の張りも弱い甕で、胎土は比較的良好。5は口縁部が短く外反する小型の甕。6は口縁部が強く外反し、端部に面をもつ。体部の張りは弱い、7は口縁部が大きく外彎して開く壺といつてもよいような器形である。口縁部の1/3が残存、これも口端部に面をもつ。8・9は小片である。

1区3層

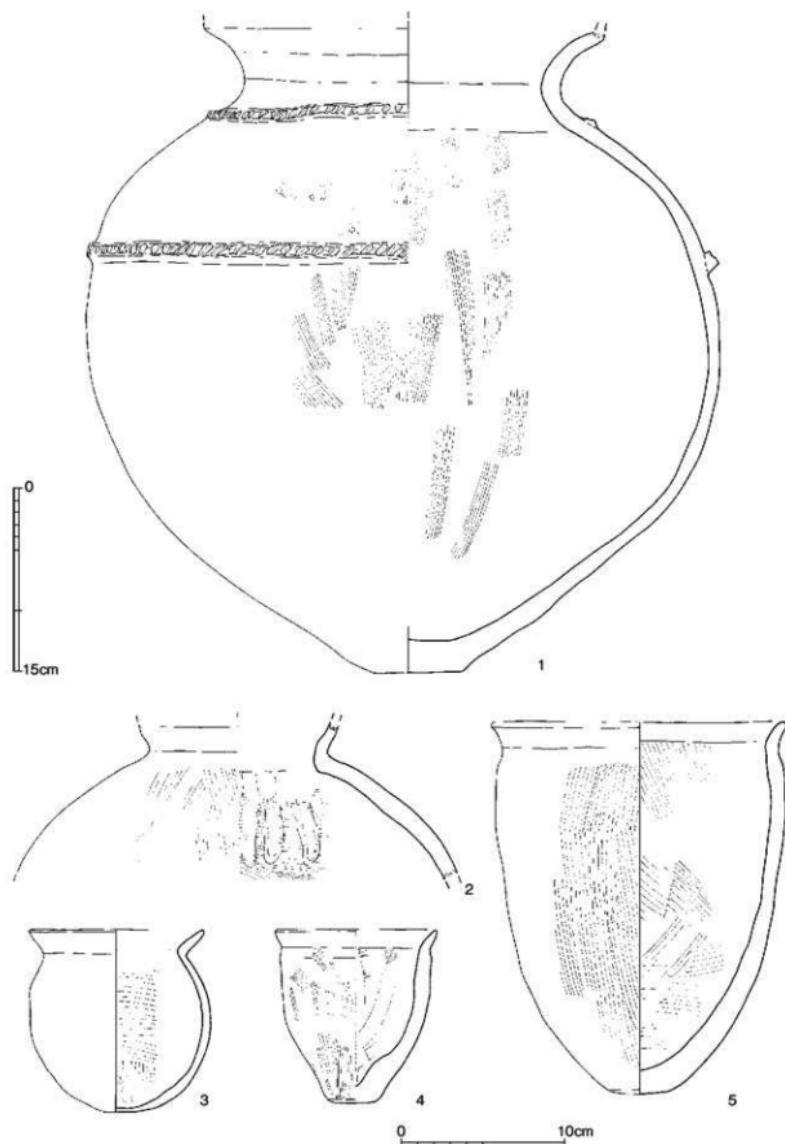
石製品（図版31、第72図9~11・第73図24・25・第75図42） 9~11は石庖丁。9は砂岩製で半分以下しか残存していない。穿孔は片面から行い、孔径は表裏ともに変わらない。また、図表面はよく研磨されるが、図背面では研磨が及ばずわずかに凹面となる部分が存する。刃部は鋭いが、鎬は不明瞭。10は片岩製で両端を欠損する。穿孔は両方から施すが、角度が深く鋭利な道具でなされるようである。図上面では縦位の擦痕が目立つが、背面では斜位の擦痕が優位である。11は輝緑凝灰岩製、いわゆる立岩産で、片端を欠損する。刃部は幅広く研いで形成している。穿孔は両面からのようであるが、これも角度が深く鋭利な工具が使用されたようである。

第73図24・25は図示した面が使用したように見えるが、確信が持てるものではない。これらも表面が比較的滑らかとなる安山岩である。

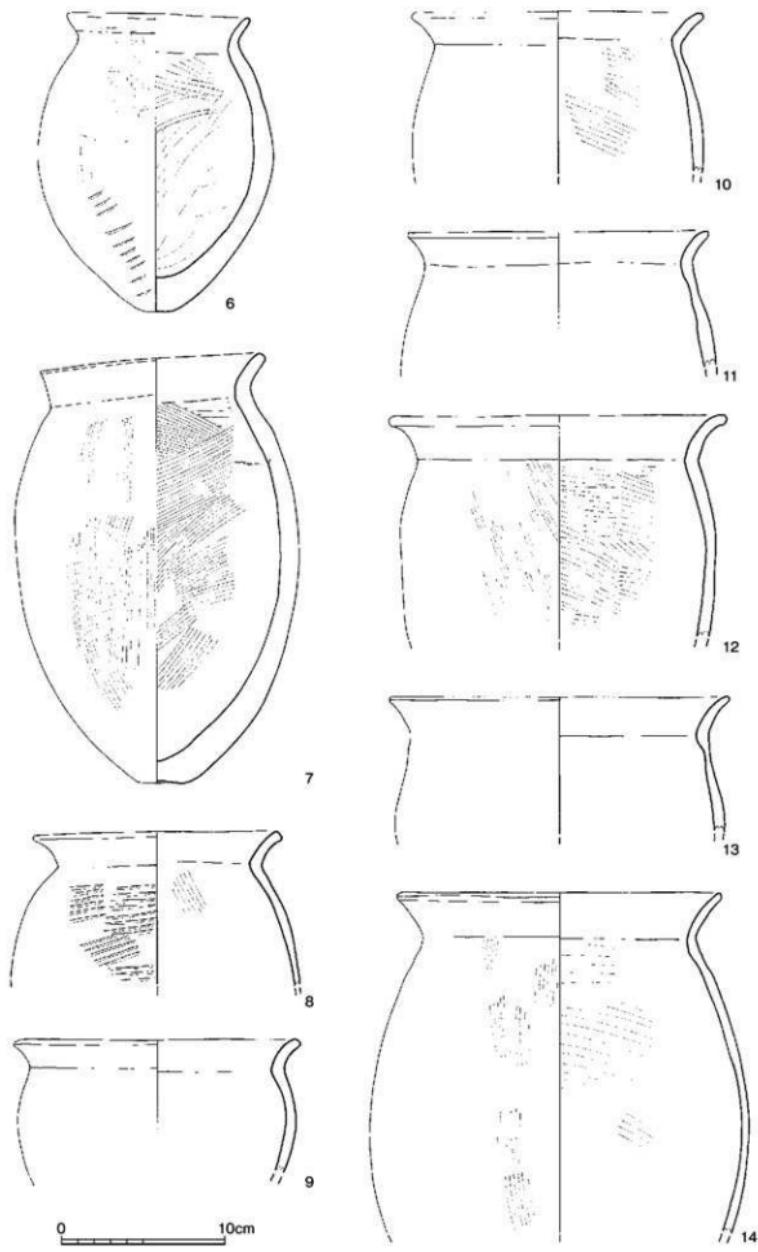
第75図42は方形に近い安山岩で、図示した面がかなり滑らかとなっている。

土器（図版26~28、第51~54図） 1は50cmを超える器高となる壺で、口縁部を全て欠損するが二重口縁壺であろう。頸部の1/2、体部最大径付近で2/3が残存。肩部に断面三角突帯、体部中位や上方に断面不整形となる突帯を付し、それぞれしっかりと深い刻みを入れている。器表が荒れているが、内外面に刷毛目が見える。また、胎土に茶褐色クサリ礫が顕著である。2は口縁部が急角度で立ち上がる壺で、口端部が剥離していて本来の形状ではないようである。頸部の1/4が残存。3は完存する小型丸底の甕。外面は荒れて調整不明、内面は全体に刷毛目が見える。4は肉厚平底の小型甕で、口端部は小片となっていて本来の形状を保つものか不安がある。5は小さな平底をもつが、体部へ丸く移行することから丸底のように見える甕。下半部の1/2、上半部の2/3が残存し、口縁部は小片となる。底部付近の外面は特に器表が荒れていて、頸部や下位以下は煤ける。

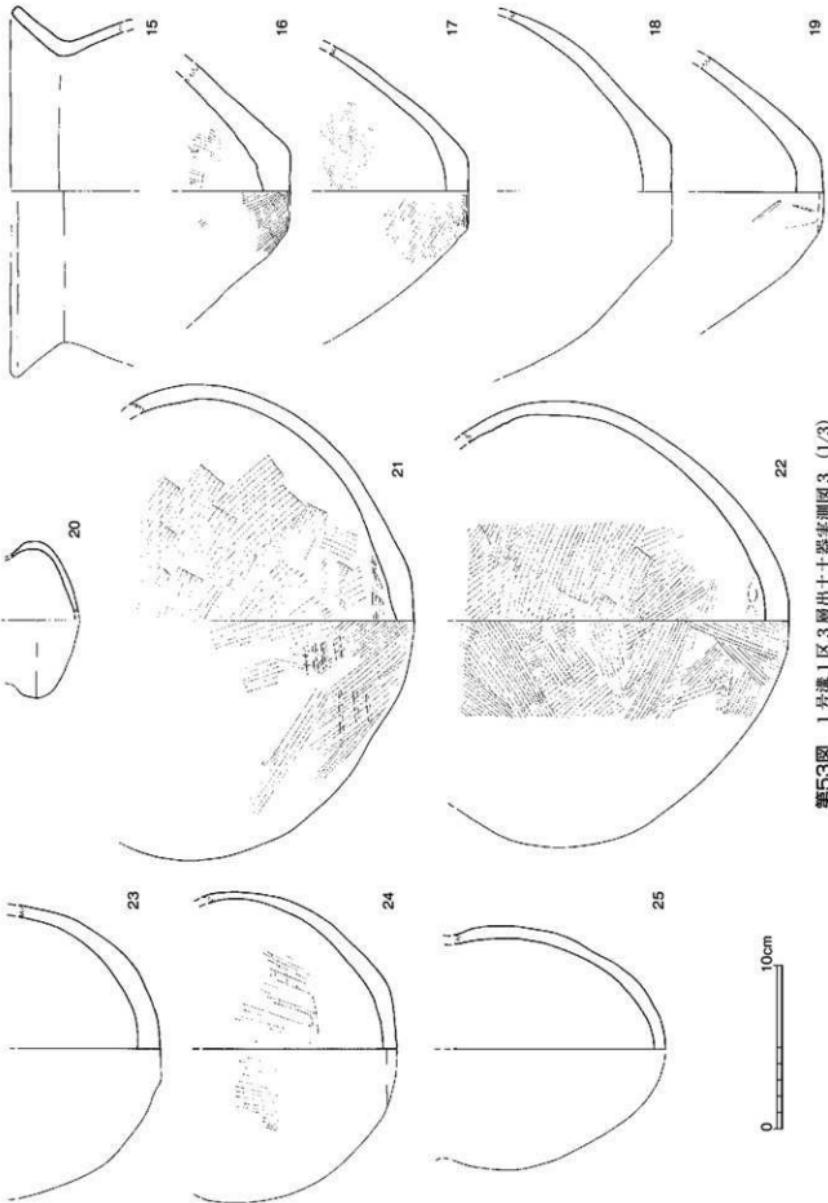
6は小さな平底、張りの弱い体部、小さく外反する口縁部をもつ肉厚長胴の甕である。頸部以下は完存、口縁部は1/4ほどが残存するが、口端部は剥離しているようにも見えて原形を留めている



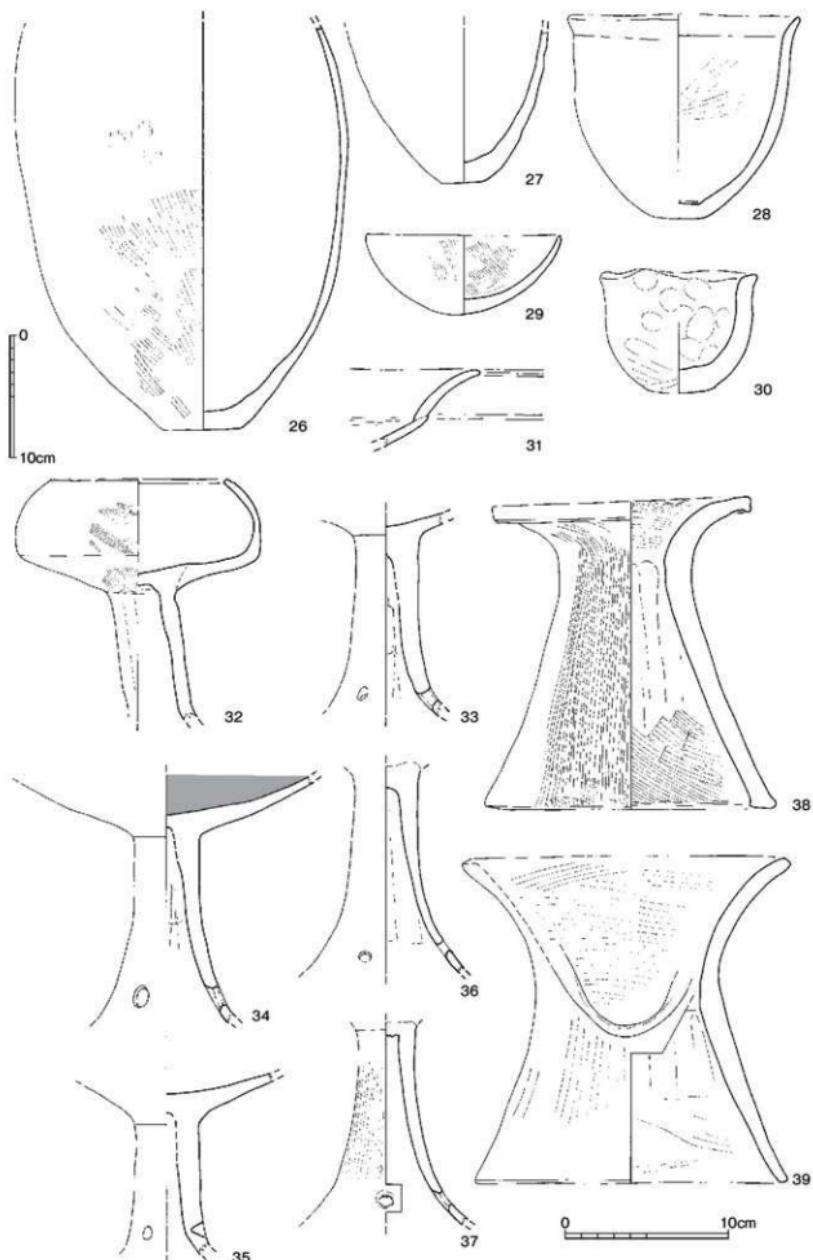
第51図 1号溝1区3層出土土器実測図1 (1は1/4、他は1/3)



第52図 1号溝1区3層出土土器実測図2 (1/3)

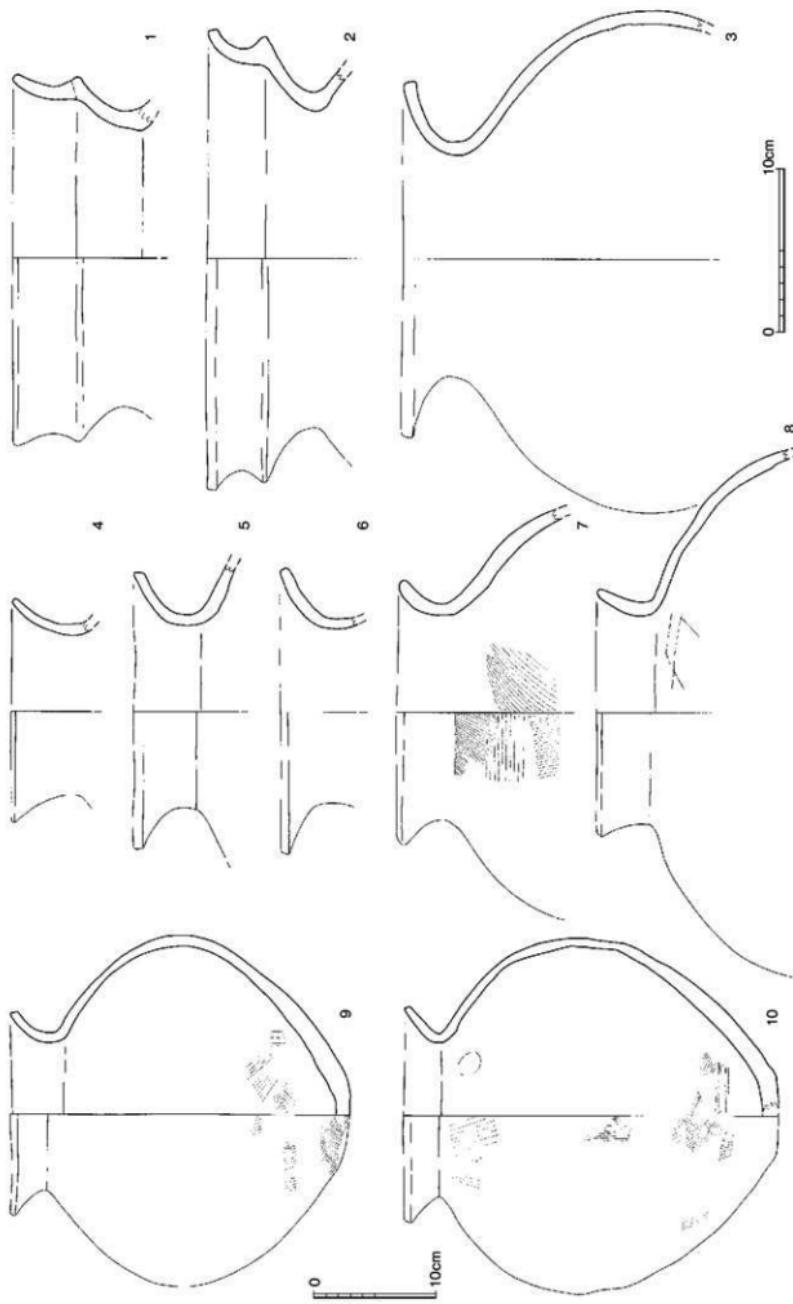


第53図 1号縄1区3層出土土器実測図3(1/3)



第54図 1号溝1区3層出土土器実測図4 (26は1/4、他は1/3)

第55図 1号標2区1層出土土器実測図 1 ($9 \cdot 10$ は1/4、他は1/3)



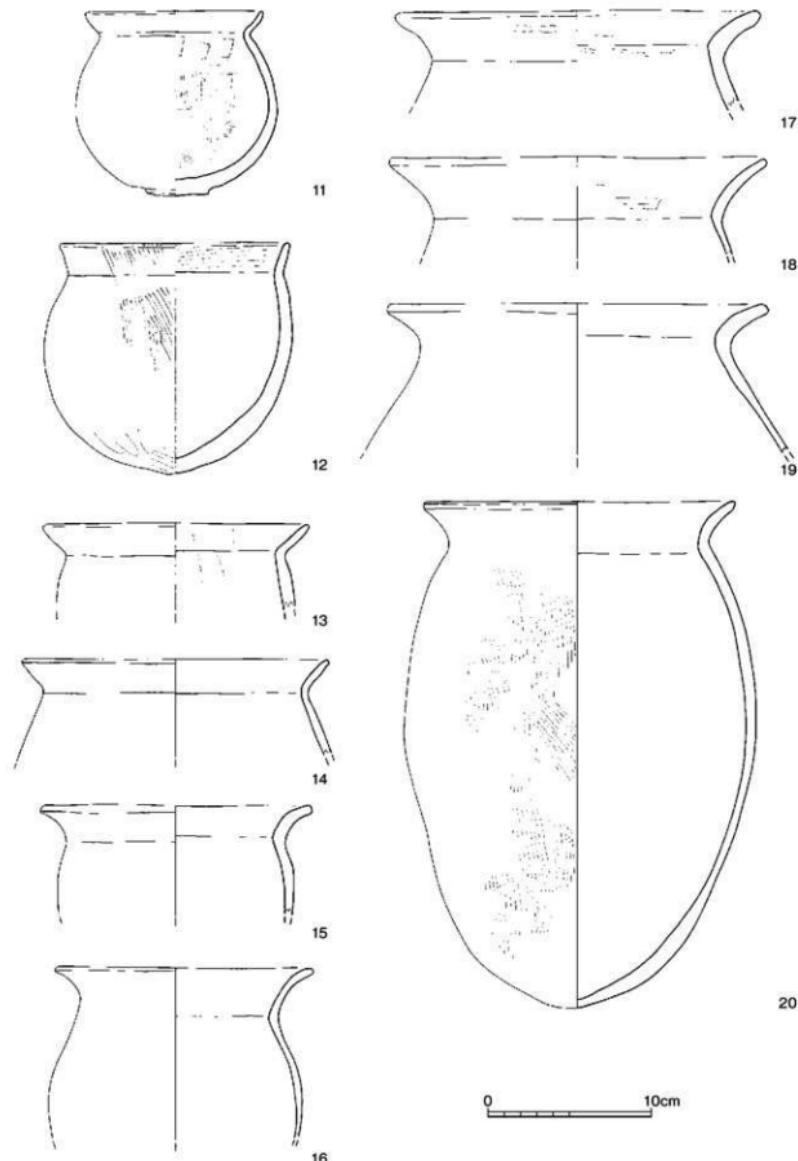
か判然としない。胎土は比較的良好、体部下半が一部煤けている。体部は内面を刷毛目で、外面の下半を疎らな平行叩きで、上半を縦刷毛で調整する。7は法量が異なるが6に通ずる長胴形態の甕で、これには叩き痕は見えない。また、内面に粘土紐接合痕が残る。8は図示部がほぼ完周。口縁部はく字形に外折し、頸部内面に稜をもつ。体部外面には粗い平行叩きが、内面には刷毛目が見える。焼けて赤変し、器表が荒れている。9は体部最大径が上位に来る甕で、これは器表が荒れて調整痕は見えない。10は頸部内面に甘い稜をもち、これも焼けて内外面ともに赤変する。11は短くC字形に外彎する口縁部をもち、全体に赤黒く変色、器表が剥落する。12の口縁部は長く、立ち上がりが急で、端部をさらに反らせている。これは体部内外面を刷毛目で調整、頸部のやや下位以下が煤ける。13も頸部の外反が弱い。焼けて器表が剥落する。14は口縁部がく字形に外反外彎、端部に面を付す。体部内面には疎らな横刷毛、外面には縦刷毛が残る。これも焼けて変色、外面の一部に煤が付着する。15は口縁部が直線的に延びるほかは14に似る。

16～25は底部。16は肉厚となる土器で、平底であるが外縁が丸みをもって体部へ続く。17も同様の底部だが、これは器壁がやや薄い。18は焼けて灰赤色に変色する。これは角閃石・クサリ礫の混入が顕著。19は丸底化が進んだ感じの底部で、肉厚となる。調整技法は判然としないが、外面に工具痕が残る。20は小型偏球形の体部で、胎土精良な小型土器。器肉は黒色だが、内外面は灰黄色となる。器表は荒れている。21は図示部がほぼ完存する。底部もほぼ丸底化し、球形の体部となる。体部内面は遺存状態がよく、外面は一部に叩き痕が見える。22は底部付近が完周するやはり球形体部の土器で、これは内外面ともに遺存状態が良好。23も球形の底部であるが、底部付近の形状が不整となる。肉厚で器表が荒れる。24はレンズ状の底部となり、底部付近は真っ赤に焼ける。25は丸底長胴となる体部で、内外面がほぼ全面で剥落する。

26は長胴平底の甕片で、器表が荒れて角閃石・クサリ礫が目立つ。27も同様の形態の甕であるが、これは底部外縁が丸みをもつ。28は口縁部が強く外反する鉢形の土器で、完周する底部は平底を保つ。内面は丁寧に刷毛目で仕上げる。29はほぼ完存する浅い鉢。胎土は比較的良好であるが、内外面を刷毛目で調整する。30は肉厚の手捏ね土器で、1/2ほどが残存。形状が不整のため、復元口径などにも不安がある。

31は口縁部が強く外反する高杯片で、外面が黒色、内面が明赤褐色となる。32は杯部が未発達な椀形となる高杯で、脚部が歪んで接合する。杯口縁部は強く内彎して、端部には余り変化を加えない。33は脚部に円孔が2個残り、配置から3孔と復元できる。34も脚部は33に似る。大きく開く杯部内面には赤色顔料が塗られているようである。35は通常円孔がある付近に2個の凹みがあって、貫通していない。配置は3個に復元できる。37の円孔は1孔が残るのみで、本来の数は不明。

38はくびれが上位に来る筒型器台で、口縁部にかけて強く外彎し、端部に面を付して変化を加える。胎土は比較的良好で、外面及び内面の上下両端付近に刷毛目がよく残る。内面の中位付近は指撫で仕上げる。また、脚部接地部も刷毛目を施して面を作っている。39は抉り入りの器台。抉りの下端付近は完周、図上端の1/3、下端の1/2が残存する。抉りの下位外面は縦方向に赤変、同内面は煤けている。抉りの無い部分では図上端付近で一部赤変するものの、他の部位に赤変は見られない。また、端部の仕上げ方を見ると、図上端は雜、下端は丁寧である。以上のことから推して、この土器の場合は図示した状態と逆の方向で接地、使用したことが想定される。すなわち、抉りを下にして置き、中で火を焚き、その炎が抉りの下位を変色させたと考えられるのである。



第56図 1号溝2区1層出土土器実測図2 (1/3)

2区1層

石製品（図版31、第72図12・17） 12は石庖丁の残欠。被熱したものが図上半部が赤味を帯びる。穿孔孔は両側から行い、1区3層の3点と異なって角度が浅くなる。片岩製。17は砂岩製砥石で、図上端は欠損、下端はいわゆる砥石としては使用されていないようである。図表裏、両側面の4面がよく使用されていて滑らかとなり、片減りが著しい。仕上げ砥であろう。

土器（図版28・29、第55～58図34） 1は口縁部がわずかに外彎外傾、端部を丸く収める二重口縁壺片で、3/4が残存、胎土は粗い。2は口縁部がより強く外彎し、端部に面を作る1/4の残片。これも胎土は粗いといってよい。3は小片からの作図で、口径や傾きに不安がある。また、剥離面を確認できないが二重口縁の可能性も否定できない。4は口縁部があまり開かずに入り伸びるもので、3/4が残存。胎土は良好といってよい。5・6は浅く大きく開く口縁部をもち、端部に面を作る。ともに3/4ほどの残片であるが、器表が荒れている。7・8は口縁部が短く小さく開くもので、7は頸部の1/2が残存。刷毛目を主体として調整する。8は個口縁部付近が真っ赤となる1/4の残片で、これは体部内面を箆削りで仕上げる。9・10はく字形に外反する口縁部、張りの強い体部は中位近くに最大径部をもち、甕とも呼べるような形態の土器である。いずれも小さな平底となり、内外面とも確認できる痕跡は刷毛目を主体とし、10では頸部内面に指頭痕が見える。

11は口縁部が短く内彎する小型甕で、底部付近は完存。口縁部の1/4が残存する。体部最大径が下位にあって、底部は不整であるが円盤を貼り付けたような平底となる。体部内面は細かい刷毛目で丁寧に調整、外面は荒れているがやはり一部で刷毛目が見える。なお、胎土は精良といつよい。12は口縁部の開きが小さく、張りの弱い体部から尖り気味の丸底へ続く肉厚の甕。これも体部下半は完存し赤変、上半は黒色化する。外面底部付近は箆削り、上半は刷毛目、内面は荒れて見えない。13は口縁部がわずかに内彎する肉厚の小片で、復元口徑には不安がある。14は口縁部外面にわずかな膨らみがあるが内面はほぼ直線的となるもので、器表は荒れている。15～20は口頸部がC字形に彎曲して開くもので、細部はそれぞれ異なる。15は口縁部が短く肉厚となる小片で、これは復元口徑に不安がある。16・18は口縁部が長く高く開くもので、16は体部が一部赤変する。17は肉厚となる口縁部で、頸部内面に弱い稜をもつ。19は体部が張るようである。20は底部付近が完存、口縁部の1/3が残存する長胴の甕で、底部付近が赤変して器表がより荒れている。体部外面は刷毛目がわずかに観察でき、内面は荒れて調整痕は見えない。胎土に角閃石・クサリ礫が目立つ。

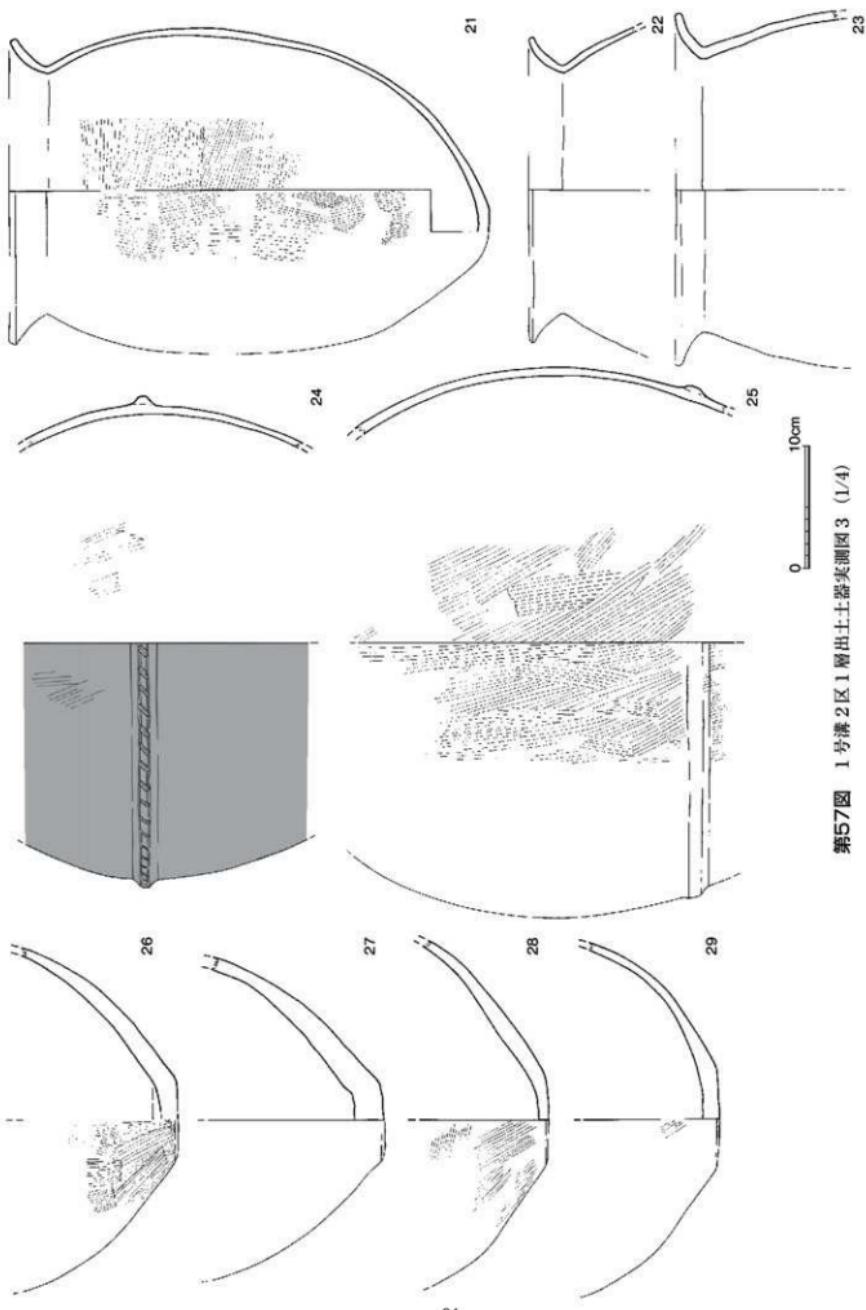
21～23はく字形に外折する口縁部をもつ。21は底部から口縁部まで接合するが、欠損部も多い。底部は小さく膨らむものの外縁に弱い稜線をもち、張りの弱い長胴となる。底部付近が真っ赤に変色、その上位には煤が隨所に付着する。内面は全体に黒変するが、底部付近がより顕著であり、焦げ付きによるものであろう。内外の器表は荒れているが、なお全体に刷毛目が観察できる。22・23は1/4ほどの残片で、いずれも器表が荒れる。24は体部最大径付近に断面梯形となる突帯を付し、箆状工具による刻みを付すもので、外面には赤色顔料を塗布するようである。25は最大径部の下位に低平な突帯を巡らせている。これは器表の残りが非常によい。26～29は平底となる底部であるが、28はわずかに膨らみを見せる。

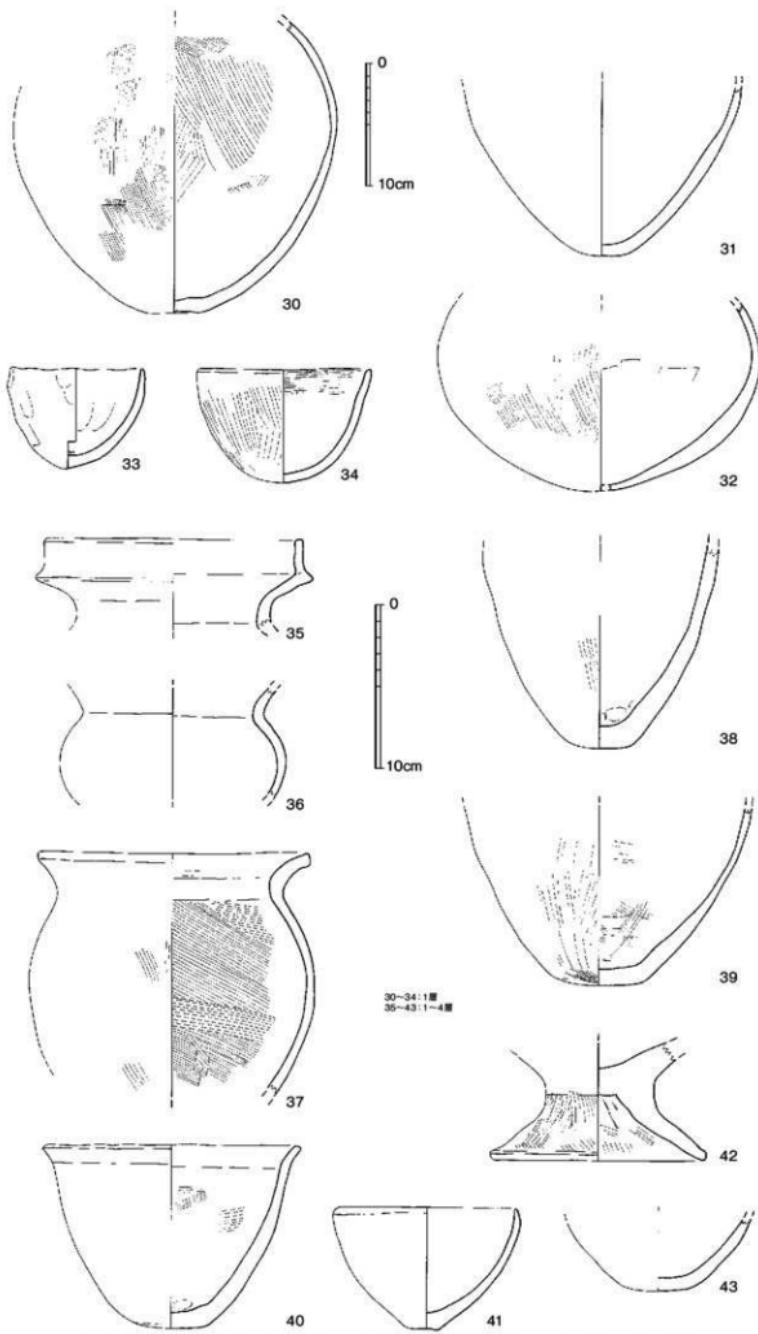
30は底部がわずかに凹んでいる。31は小さな平底をもつ完周する底部。32は張りの強い体部をもち、底部に明瞭な平底は見えない。

33・34はいずれも口縁部の一部を欠くほかはほぼ完存する鉢。33は口縁部がやや不整となるものの、胎土・作りともに良好。34は赤く焼き上げるようである。

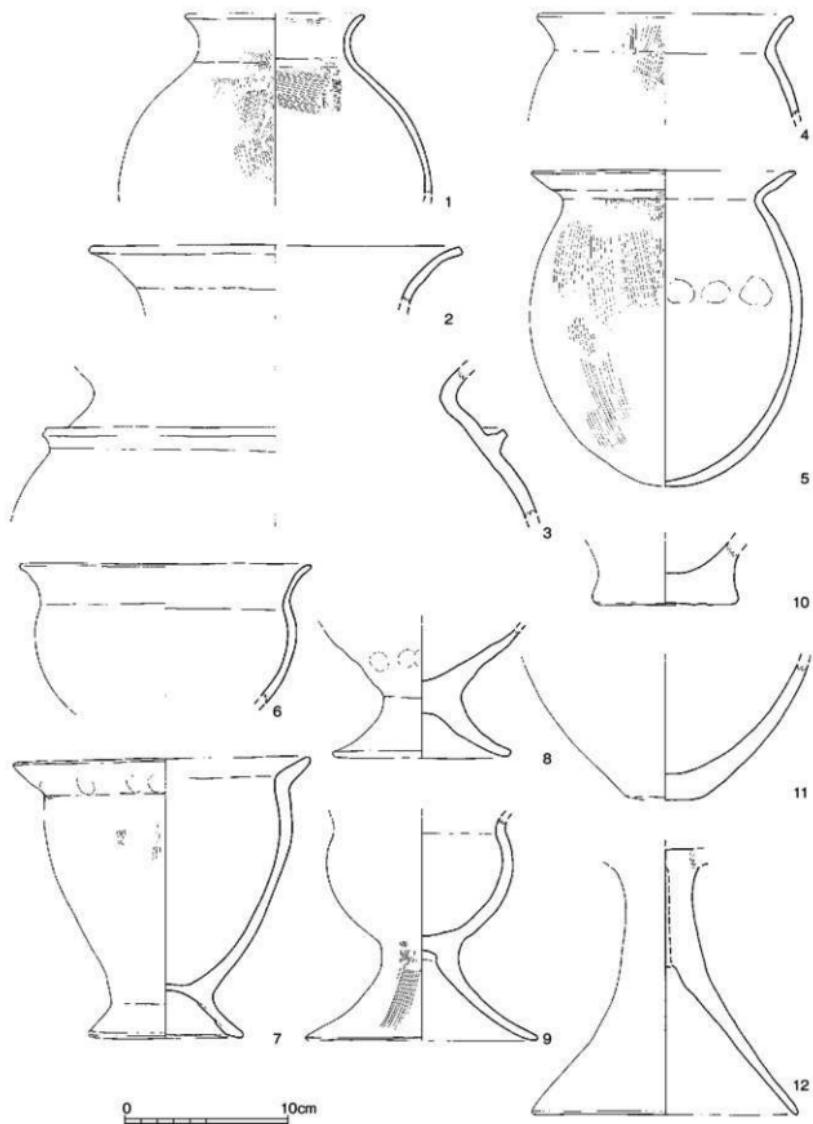
第57図 1号棟2区1層出土土器実測図3 (1/4)

0 10cm





第58図 1号溝 2区 1層 4・同 1~4層出土土器実測図 (30~32は1/4、他は1/3)



第59図 1号溝2区3層出土土器実測図 (1/3)

2区1～4層

分層せずに取り上げた遺物である。

土器（第58図35～43） 35は口縁部が直立する二重口縁壺片で、器表が荒れている。36は小型壺であろうか。器表は荒れているが体部内面を鏡磨きで仕上げるようである。37は口頸部がC字形となる壺で、図示部はほぼ完周する。口縁部が体部より肉厚で、端部に面をもつ。38は肉厚でレンズ状に小さく膨らむ底部に張りの弱い長胴の体部をもつ壺で、胎土は比較的良好といえる。39もわずかにレンズ状に膨らむ底部で、これは赤変する。40も小さく膨らむレンズ状の底部を持つ鉢で、口端部に面をもつ。41は不整となる小さな平底をもつ鉢で、体部から口縁部にかけて連続的に緩く内彎する。42は肉厚となる脚。43は外縁が丸みをもつ平底の底部。

2区3層

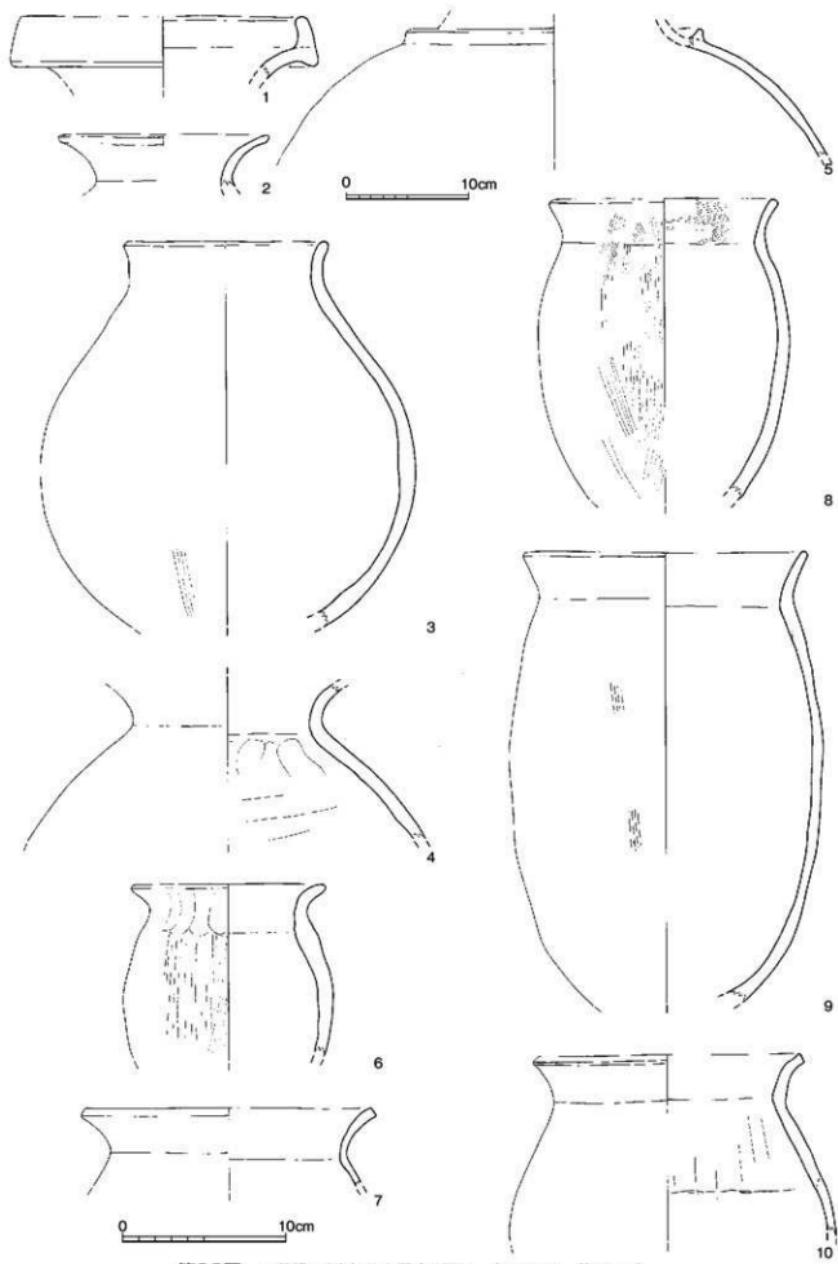
石製品（図版31、第72図13・14・18） 13は凝灰岩製ではば完存する石庖丁。長さ11.6cm、中央の幅4.3cm、厚さ7mmを測る。背は丸く刃部には鋒をもつ。図表裏ともに研ぎが及ばない凹面が残り、穿孔は両面から浅い角度で行われる。14は片岩製石庖丁でこれもほぼ完存。形状が整い、長さ12cm、中央幅5.5cm、厚さ7mmを測る。全体に細かい擦痕が顯著で、両面に研ぎが及ばない面があるが、これは使用時の破損であるかも知れない。穿孔は比較的鋭利な穿孔具で両側から施す。18は粘板岩製の砥石片で、図左側面がからうじて本来の形状を留めるようで、他の側面は全て欠損する。図表裏の2面が非常に滑らかになっていて、これも仕上げ砥であろう。

土器（図版29、第59図） 1は頸部がよく縮まり、口頸部がC字形となる壺で1/4が残存。胎土は良好といってよい。2は広口壺口縁部として図示したが、脚部の可能性もある。外面中位の線は粘土紐の継ぎ目であるが、破面で接合痕を確認できない。3は肩部に突出する籠状の突帶を付す土器で、器表が荒れる。4は口縁部の外反が弱く、5は強く外反する壺。6は丸底の底部から口縁部まで残存部が多いが器表が荒れている。7は鉢あるいは壺で、頸部の縮まりが弱く、口縁部は大きく高く聞く。小片からの復元であり、口径に不安がある。8は脚付の壺ではば完存する。胎土粗く、口縁部が不整になるなど雑な作りといえる。体部下半から脚台内部まで真っ赤に変色している。9は脚付土器の底部付近。10は弥生時代前期の完存する底部。11は外面がわずかに膨らむ底部で、残存部はほぼ全体に赤変、上端付近が黒色化する。12は無孔の高杯脚部。ほぼ中実に近い部分には径1cmの円孔が伸びているが、その入口から下位に向かって正対する2本の継ぎ目状の皺が残ることから、少なくとも皺以上の部分は通常の粘土紐巻き上げではなく、2つの粘土塊で棒を挟むようにして成形したものであろう。

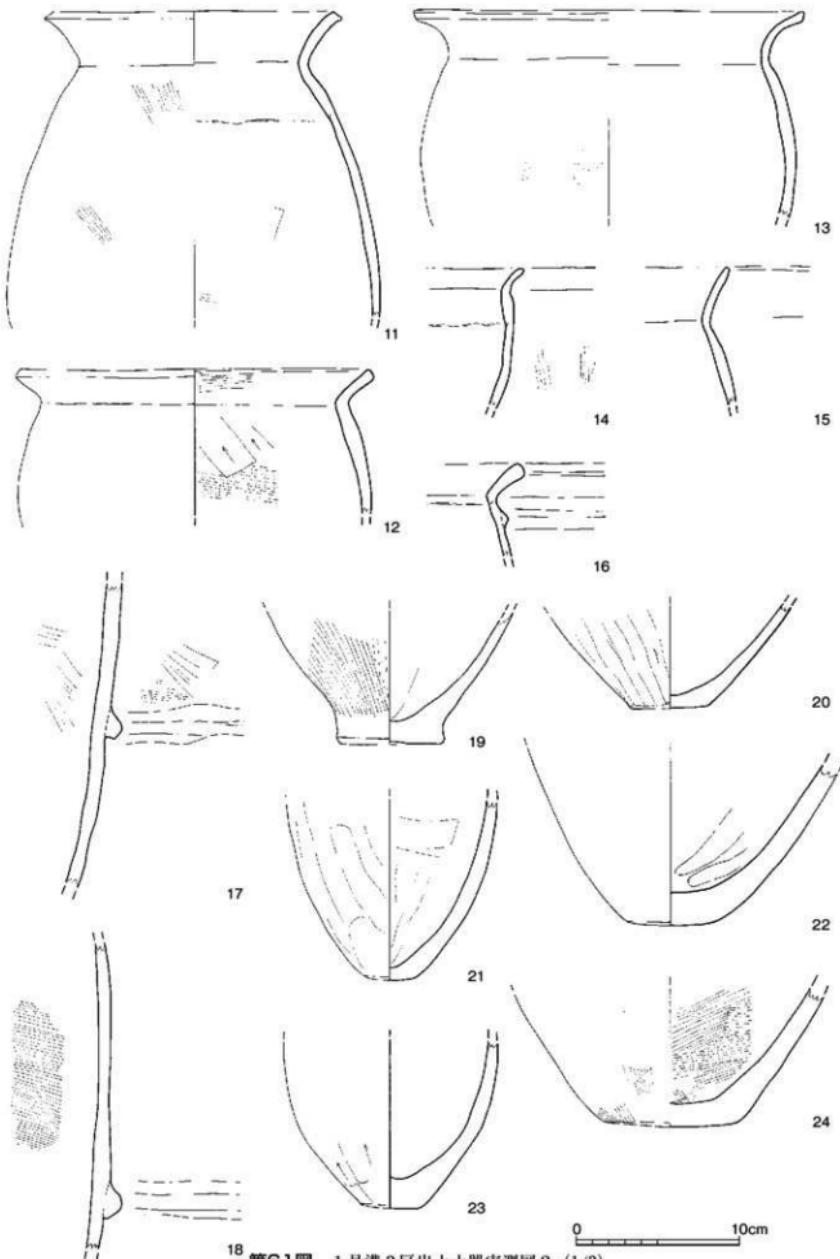
3区

石製品（図版31、第72図19） 砥石で滑らかな面はなく、どの面もザラザラとしているが、図表裏両面及び左側面は凹面となり、左側面などには条線も認められる。砂岩製砥石であろう。

土器（図版29・30、第60～63図） 1は二重口縁壺片で、最大1cmに近いクサリ縫を胎土に含む。2は口縁部が浅く大きく聞く口縁部で、これは小片のために復元口径に不安がある。3は体部

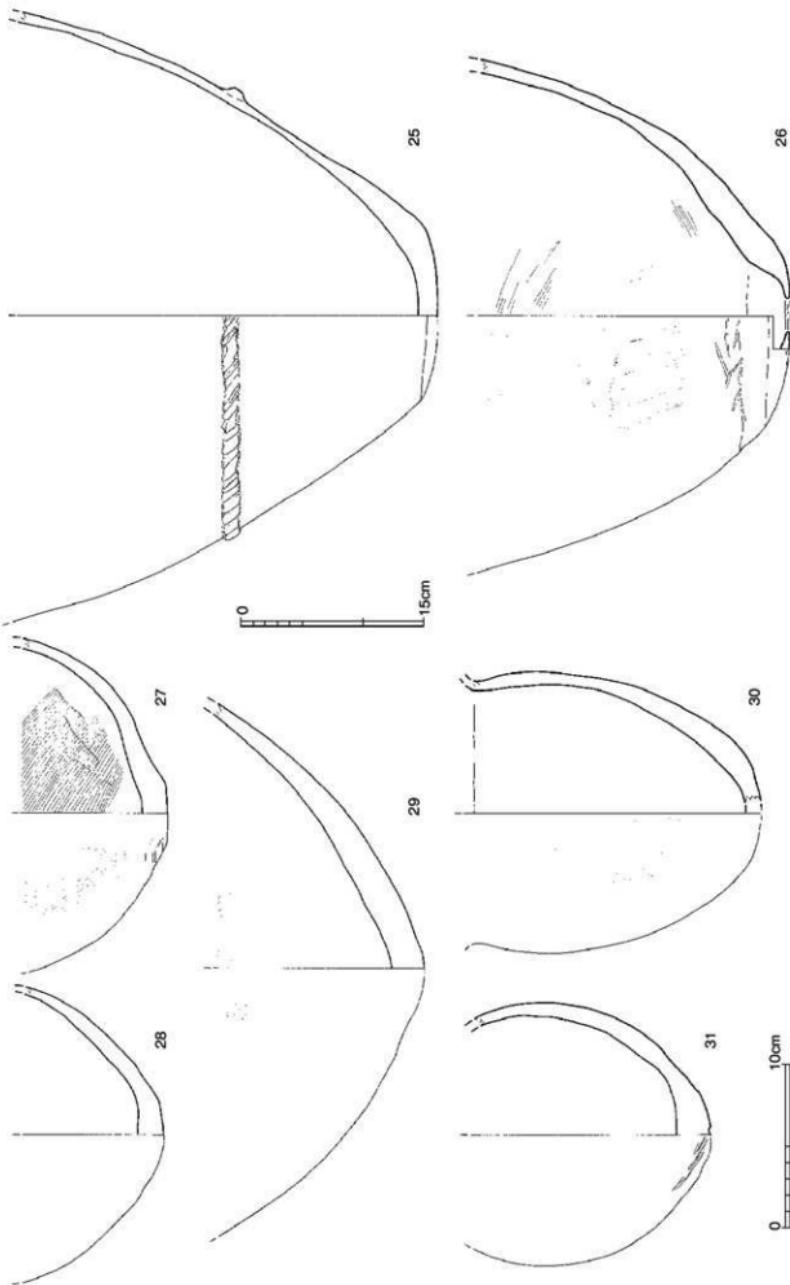


第60図 1号溝3区出土土器実測図1 (5は1/4、他は1/3)



第61図 1号溝3区出土土器実測図2 (1/3)

第62図 1号溝3区出土土器実測図 3 (25は1/4, 他は1/3)

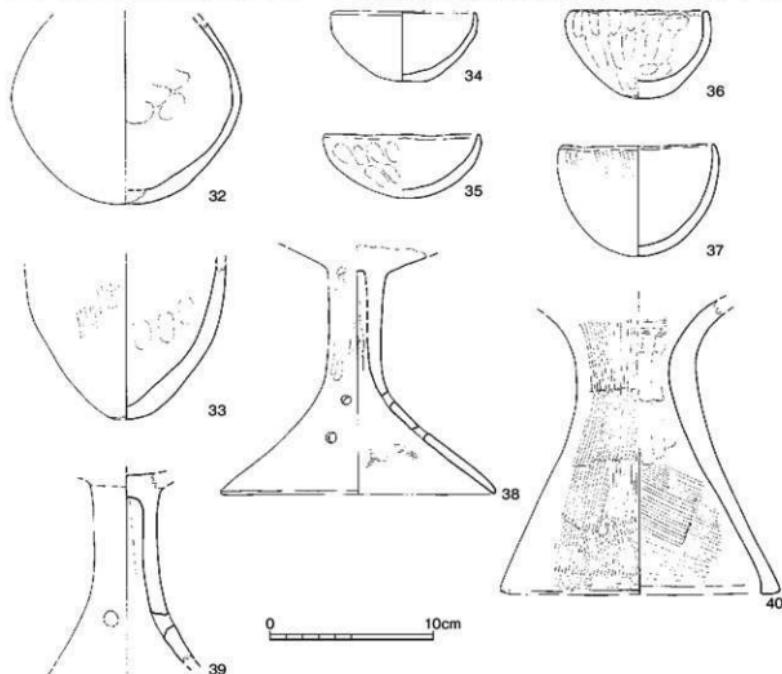


から口縁部にかけて緩く彎曲してすぼまり、口縁部がほぼ直立に近く立ち上がる。内外の器表が荒れているが、体部の一部に細かい刷毛目が見える。4は3に似るが口縁部の外反が強い。5は肩部に突出する断面方形の突帯を巡らせる残片。突帯はシャープに作られる。

6は口頭部がC字形を描く小型の壺で、肉厚となる。頭部外面に指撫で、体部外面に疎らな刷毛目が残る。7も口頭部が同様の形態となるが、これは口端部に面を作る。外面が赤変。8・9は口縁部の外反が弱く直線的に伸びる。8は外面に刷毛目がよく残り、体部内面は範磨きで仕上げているかも知れない。9は器表が荒れるが、わずかに刷毛目が見える。10は口縁部が小さく外反外彎するもので、口端部に面をもつ。体部内面には工具の幅が残るが、弱い刷毛目というべきであろう。

11は10に似るがより強く外反する。これは体部外面の一部に刷毛目が見える。12はく字形に外反する口頭部で、これは内面頭部下で一部削りが使用されている。13は口頭部がC字形に強く外彎するもので、外面では肩部以下に煤が、内面下端付近には焦げ付きが見られる。14は口縁部が短く外反、15は長く伸びる壺の小片。16はく字形の口頭部の下に断面三角突帯を付す中期前半の壺小片である。

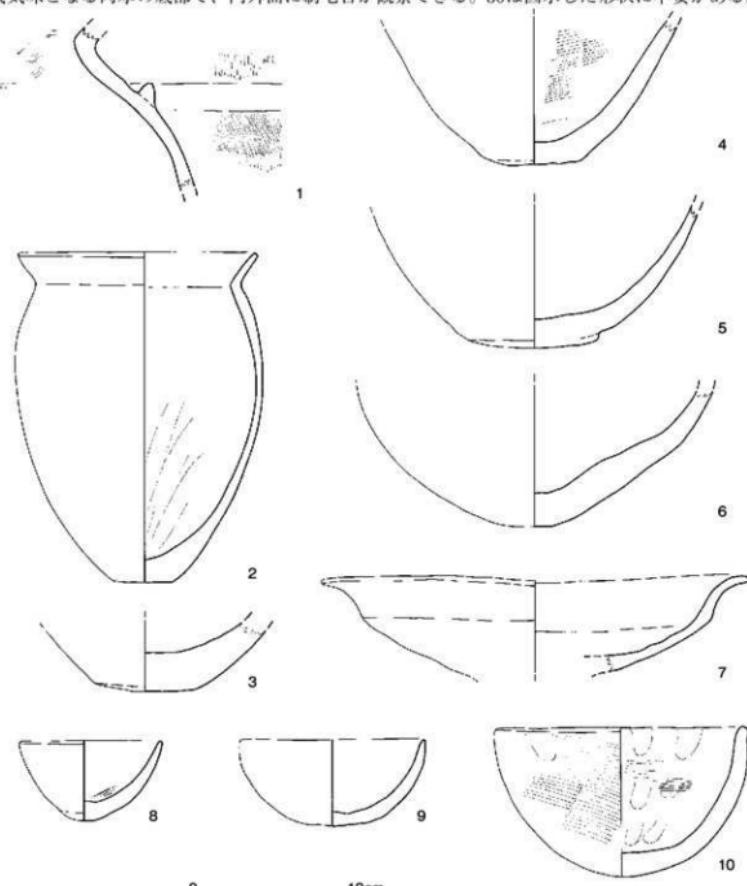
17・18は突帯をもつ体部片で、いずれも突帯は不整である。19は胎土に有色の砂粒を含まず、器形的にも弥生前期のものとしてよい。内面底部付近が赤変する。20は平底の底部片で、体部外面は幅の狭い範削りのようである。これも有色の砂粒を含まず、胎土が異なっている。搬入品であろうか。21もなお小さな平底となる。これは体部外面を範削り、内面を撫でて仕上げるようであ



第63図 1号溝3区出土土器実測図4 (1/3)

る。22は肉厚となる底部で、器表が荒れるが内面に微かに指撫での痕跡が見える。23は全体に赤変する平底の底部。24も肉厚で全体に赤変する平底の底部である。

25はレンズ状に膨らむ底部で、体部界にしっかりとした稜線が入る。器表が荒れて刻みの本來の形状もはっきりしないが、刷毛目原体を用いているよう見える。26もレンズ状の底部をもつもので、外面の刷毛目が及ばない部分の表面が平滑化せず、粗雑な作りで終わっている。底部は図のように中央から偏して不整円孔が開いているが、孔の縁が薄くなっていて、意図的なものとは思えない。孔の上2.5cmの附近から器壁が急に薄くなっていて、ここに充填した粘土塊が剥離したものであろう。27は小さな平底が突出する底部で、作りが粗雑である。28は外面全体が赤変する底部であるが、形状不整なために底部の中心を特定できず、掲載した形状に不安がある。29は尖底気味となる肉厚の底部で、内外面に刷毛目が観察できる。30は図示した形状に不安がある底部



第64図 1号溝4区出土土器実測図 (1/3)

片。31は図示部がほぼ完周する土器で、破面は器表が黄褐色系、その内部は黒色となっている。全体に被熱して赤色あるいは黒色に変色する。

32は球形に見えるが、小さな平底が残存している。33はレンズ状の小さな底部をもつ肉厚の土器。34~36は手捏ねミニチュアの土器。34は底部付近が完周、口縁部はほとんどを欠く。口縁部付近の外面が一部赤変、器表が荒れる。35の内面はよく平滑化している。36は小さな平底の底部をもち、口縁部が不整となる完形品。37は身が深い砲弾形の鉢で、これは外面を刷毛目で調整する。口縁部はやはり不整となるが、胎土・作りともに良好といえる。38は円孔を2段3方向に配する高杯脚部で、器表が荒れる。39も3方に円孔を置く。40はくびれ部が高い位置にある器台で、脚部外面の3/4ほどが赤変、残る部分は黒変する。

4区

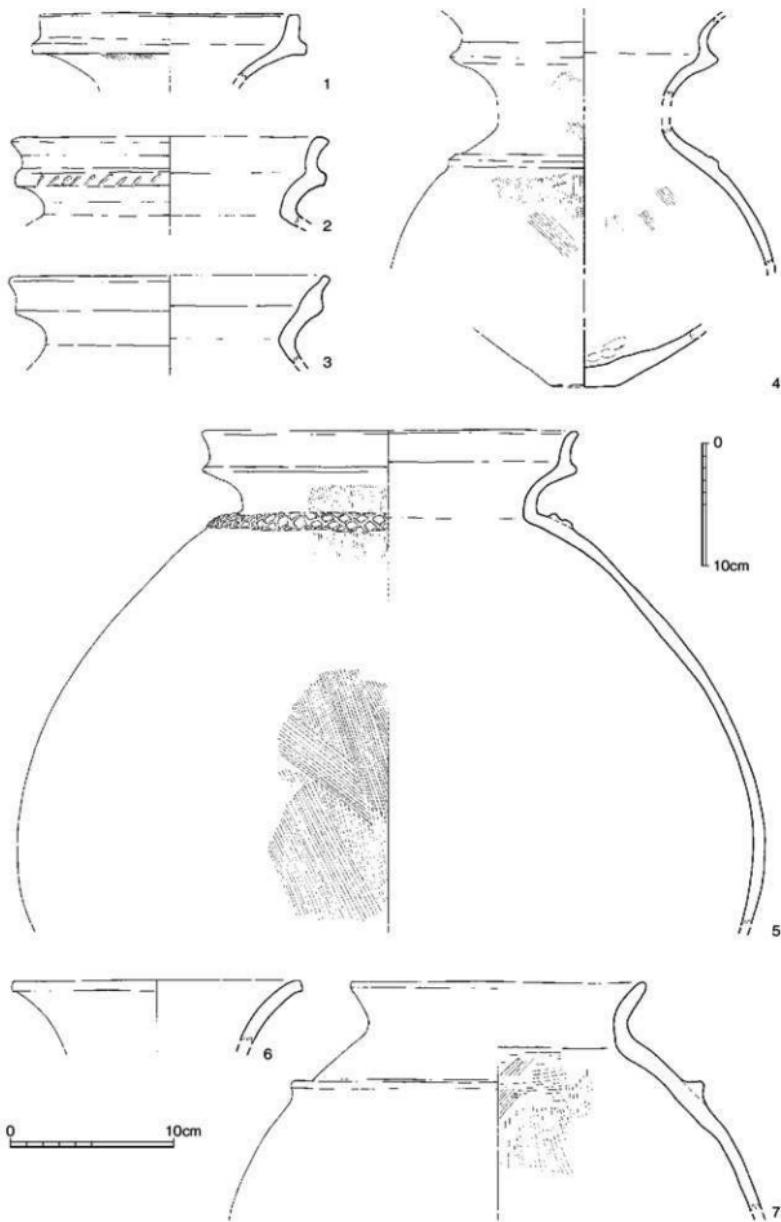
土器（図版30、第64図） 1は肩部に高い突帶を巡らせているが、その形状はシャープさを欠く。胎土は良好といってよい。2は口縁部がく字形となる甕で、体部下半は完周する。平底の底部は正円でなく扁円形となっている。体部内面に指撫で痕が残る。3はレンズ状に小さく膨らむ内厚の底部。4は平底となる底部で外面は赤変、残存部上端の一部が黒色化する。5は底部の成形が雑で余分な粘土塊が潰れたようになる不整なもので、図示部はほぼ完周する。6は肉厚となる土器で、小さな平底をもつ。7は図示部が完周する高杯片で、口縁部が強く高く外擣する。8は胎土良好、丁寧に作られたミニチュア土器で、底部は凸レンズ状となる。9は楕形となり、底部は完周、口縁部はほとんどを欠く。10は鉢形で、これも肉厚となる。

5区3層・搅乱

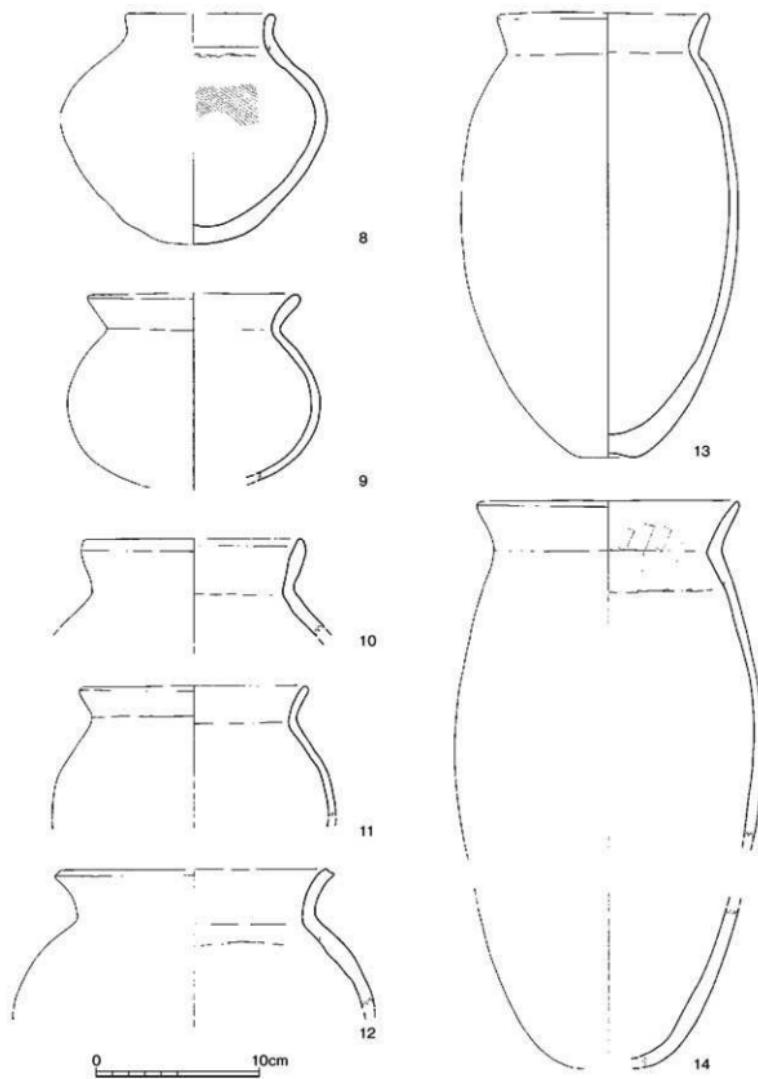
土器（図版30、第65~68図） 1~5は二重口縁壺。1は頸部が籠状に小さく突出し、口縁部が肉厚となって直立する。2は頸部に丸味をもたせ、そこに刷毛目原体を用いた刻みを付す。3では外面はしっかりと屈曲するが、内面は直線的となる変わった形状の土器である4は各部が接合しないが同一個体であろう。口縁部は垂直に近く強く外擣し、肩部に断面台形となる突帶を巡らせる。5は口縁部の1/4が残存し、復元口径31cm、残存高41cmの大型土器である。頸部下に籠状工具を用いた刻みを付す突帶を巡らせる。器表が荒れて内面の調整痕は不明。6は大きく開く口縁部小片。7は口縁部がC字形を描き、肩部に断面三角突帶を巡らせる。これは内面に刷毛目が見える。

8~10は壺とも甕とも呼べそうな器形である。8は丸底・張りの強い体部から緩く内擣してほぼ直立する口縁部へ続く。頸部以下は完存。9もやはり張りの強い体部から強く締まった頸部、く字形に外反する口縁部となるが、口縁部がやや肥厚する。10はわずかに外傾直行する口縁部をもつ。11~12は口縁部がC字形に外反する甕で、外反の度合いがやや異なる。13~14は長胴の甕。13は口縁部の外反が弱く、14はく字形に外反する。13の底部は若干上げ底で肉厚となり、底部付近が完周する。14は肩付近以上・体部中位・底部付近とあって、前二者を図上復元している。底部付近は丸底傾向の底部であるため、傾きに不安がある。底部付近の残片は全面真っ赤となり、それ以上の残片も内面の大部分が赤変している。15は球形の体部で、内面に刷毛目が見える。16は図示部が完周するが、丸底化していく底部中心が判然としないため、形状に不安がある。17は胎土良好、丁寧に作られた鉢で器壁が薄い。

18~21は高杯で、いずれも器表が荒れて調整痕は見えない。18は口縁部が短く弱く外反するもので、円孔は3方に穿たれる。19は18に比して口縁部の開きが大きく、長く伸びる。脚部に残る

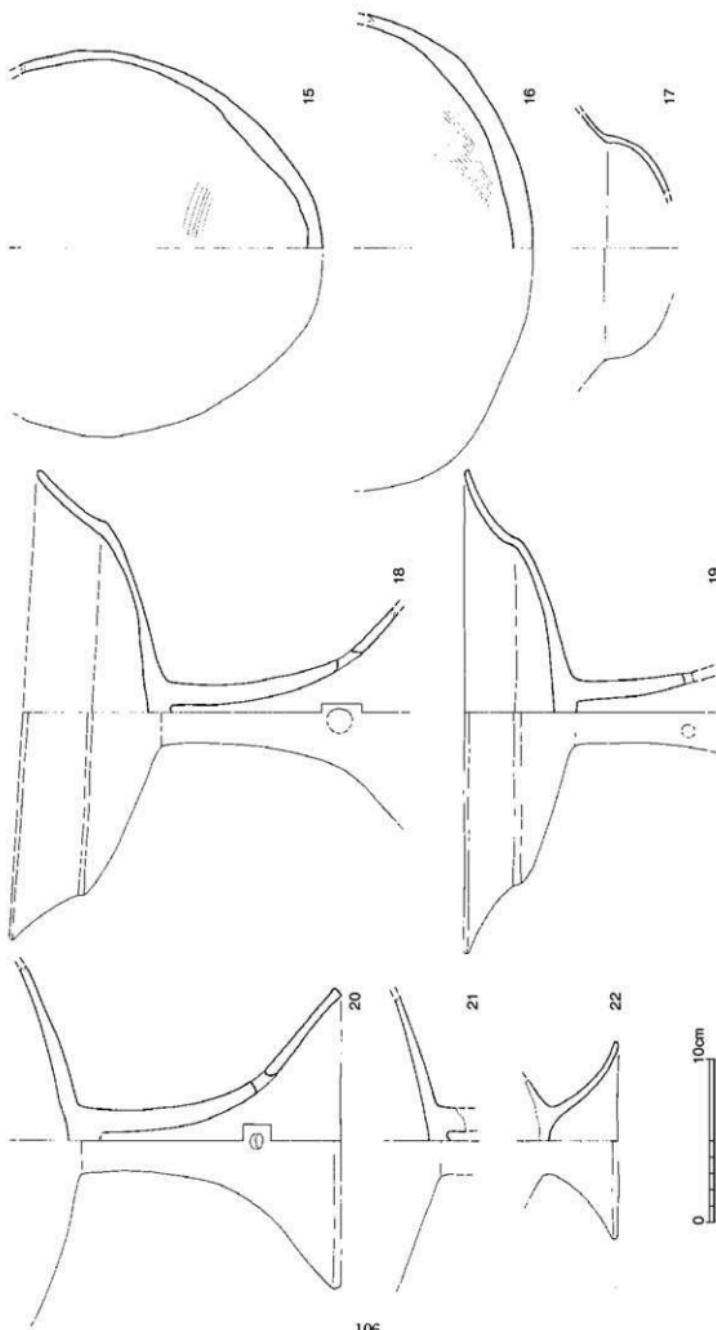


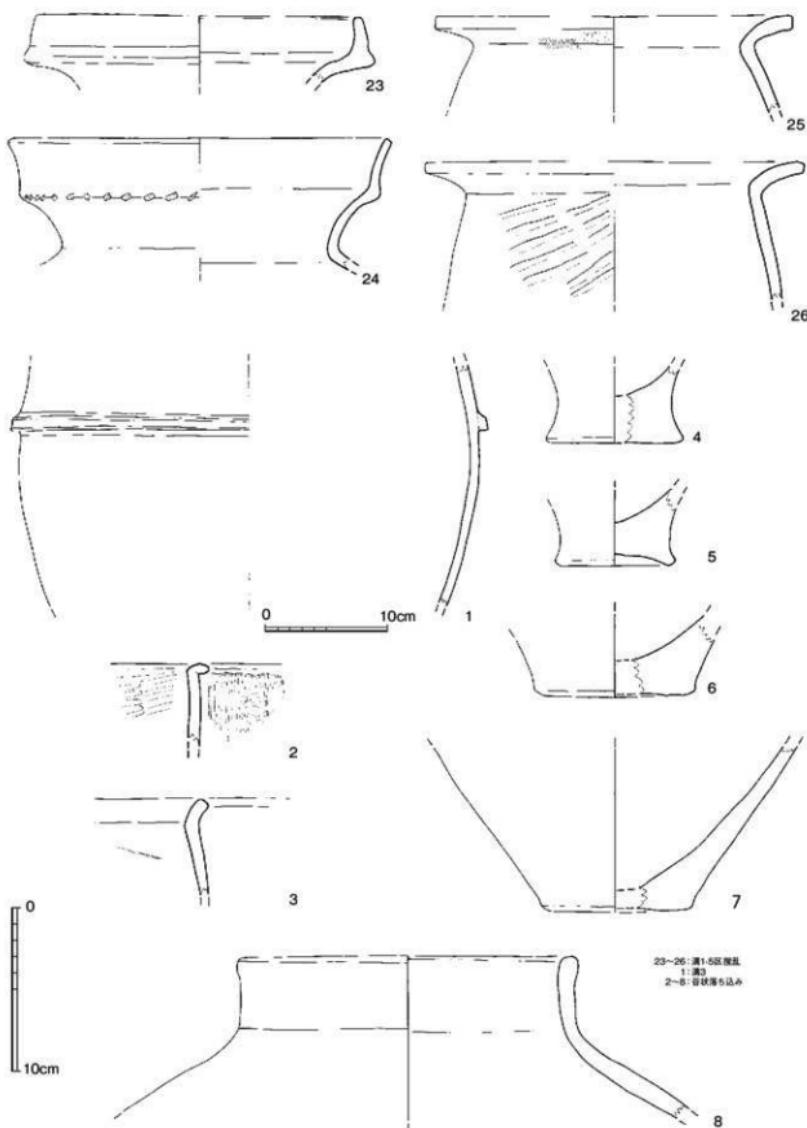
第65図 1号溝5区3層出土土器実測図1 (4・5は1/4、他は1/3)



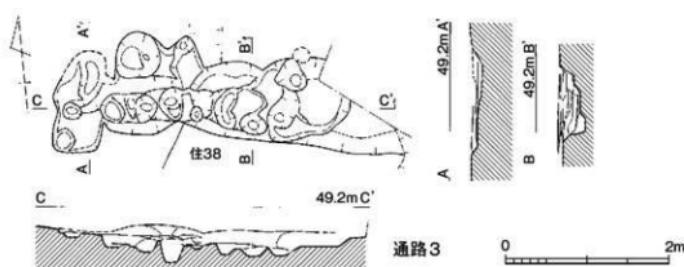
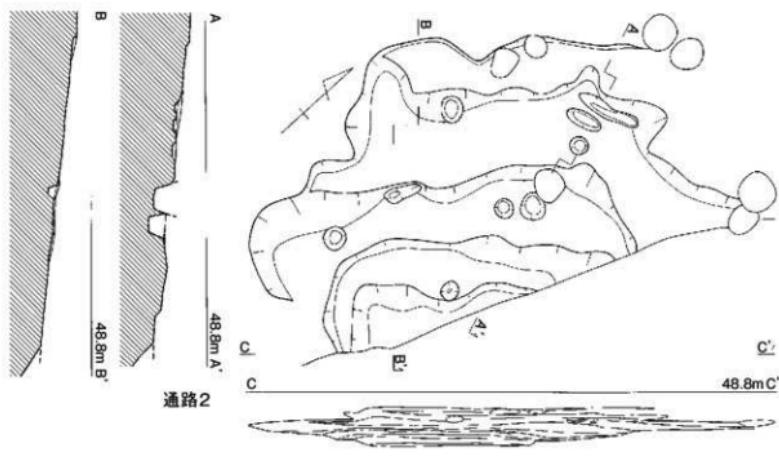
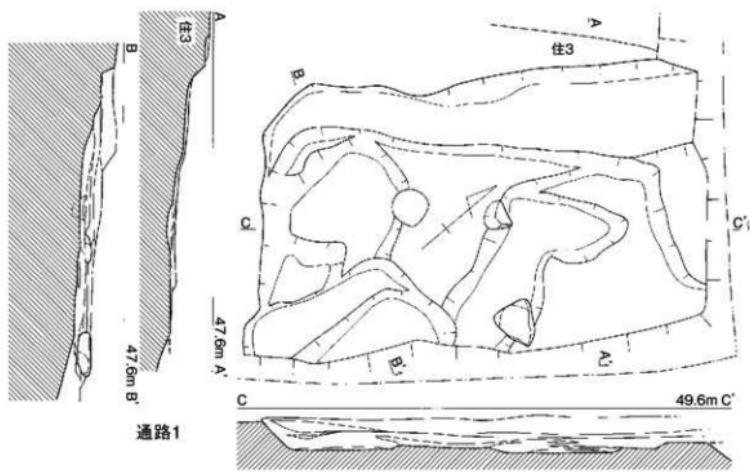
第66図 1号溝5区3層出土土器実測図2 (1/3)

第67図 1号縛5区3層出土土器実測図3 (1/3)





第68図 1号溝5区攪乱・3号溝・谷状落ち込み出土土器実測図（1は1/4、他は1/3）



第69図 1～3号通路状造構実測図 (1/60)

円孔は3方であるが、位置的に高いことから上下2段に穿たれていた可能性がある。20は相対する2孔が残存することから4孔であろう。22は大きく開く脚台で、器壁が薄い。

23～26は5区に掘り込まれた擾乱からの出土である。23は口縁部がわずかに内傾直行する二重口縁壺。24は頸部がC字形となって口縁部がわずかに外彎して高く立ち上がる二重口縁壺で、屈曲部に刻みを付す。25・26は口縁部が強く外折し、肉厚となる甕である。いずれも口端部に面をもち、25は器表が荒れて見えないが、26では粗い叩き痕が微かに見える。

2号溝（第5図）

調査区南寄りの中央やや東にて検出した溝状遺構である。1号溝に破壊され、14号住居跡を破壊する遺構として検出されたが、深さがきわめて浅いこと、また切り合い関係にある14号住居跡の深さも浅いことから、両者の前後関係についてはやや疑問も残る。切り合い関係に間違いがないければ、弥生時代後期中葉の遺構ということになろう。残存深さは0.1m前後で、埋土については記録がなく不明。出土遺物はない。

3号溝（第5図）

調査区の南東端部で検出した。4号住居跡と切り合い関係にありこれに破壊される。検出面で幅1m弱、深さは最も深いところで0.3mほどを測り、溝底には複雑な段が認められる。1号通路状遺構の延長方向に位置することから、連続する遺構である可能性も考えたが、4号住居跡との切り合い関係には整合性がない。

出土遺物

土器（第68図1） 比較的しっかりとした断面長方形の突帯を巡らせた体部片。突帯は小さく波打つ。

4号溝（第5図）

調査区の南西端部で検出した。付近は著しく削平されていて遺構の残存状況はきわめて悪く、最も深いところでも0.1m程度である。幅は4.5mほど、検出長は10mほどで南側の調査区外にのびる。埋土は淡灰褐色粘砂質土で締まりがなく、比較的新しい遺構の特徴を持つ。西に隣接する県道とほぼ並行してのびることから、県道改良以前の道路に伴う施設の可能性がある。出土遺物はない。

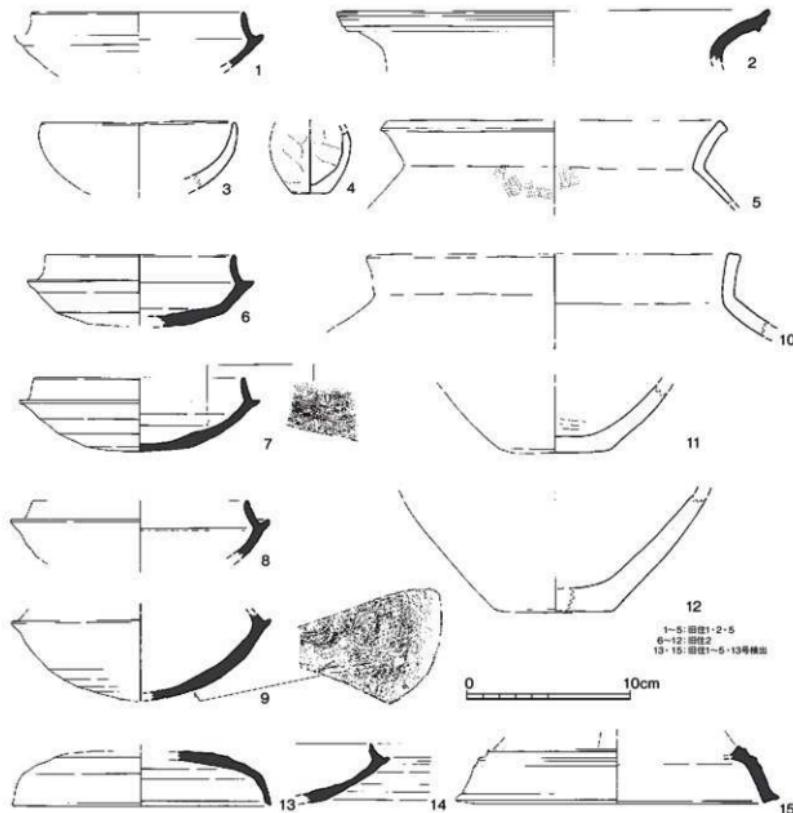
（6）通路状遺構

調査区周辺は尾根状丘陵の東側緩斜面に位置し、旧地形は東側が低く西側が高い斜面を形成していた。東端には造成崖面があつて現地形は寸断されていたが、崖面の東側下位に位置する西ノ原遺跡第1次調査地においても、弥生時代後期・古墳時代後期の集落の広がりがみられ、ほんらいには傾斜面の全体に集落が展開していたものと判断された。この集落の広がる傾斜面に、主に傾斜に直交するようにして不整形の溝類似遺構が3条ほど検出された。これらの遺構はいずれも底面に複雑に凹凸がみられ、通常の溝状遺構とはやや異質な感があり、しばしば道路として報告される波板状凹凸痕跡にも類似する様相を呈する。以上から、これらの遺構については通路状遺構と考えて報告することとした。

1号通路状遺構（第69図）

調査区の南東端部で、3・4・13号住居跡と切り合いを持ちつつ検出された。当初は溝底に形成されていた段についてそれぞれ1・2・5号住居跡として調査を行っていたが、検出時より切り合いも不明瞭で住居跡としては違和感があった。しかし、全体としてのプランは3・4・13号住居跡を間違いなく切っていて明瞭であった。

住居跡として調査をしたもの、床面からは柱穴やカマド、炉跡などが全く検出されなかった。また、それぞれの住居跡間の埋土の層位も明瞭ではなかったため、駄目押し段階で残していたベルトを除去して再度精査した。すると、底面は南東から北西方向へ浅く6段のテラスを形成しており、住居跡の床面とは異なる状況であった。以上の点から、3つの住居跡と考えていた掘り込みについて一連の遺構であると認定し、長軸5.5m、短軸3.4m、深さ0.17～0.47mを測る通路状遺構として報告することとした。



第70図 通路状遺構出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

土器（第70図） 当初、重複した住居跡を想定して掘削したことから、注記が3つに分かれている。1～5は「1・2・5号住居跡」、6～12は「2号住居跡」、13～15は「1～5・13号住居跡検出」で、それぞれに添って紹介する。

1・2は須恵器。1は口縁部の1/3が残存する杯身で、胎土・作りは良好。2は口端部を肥厚させて2条の甘い凹線を刻むとともに、小振りの突帯を端面に近い位置に付して変化を付けている。これも胎土・作りともに良好で、残存部全面が灰を被って黒色化する。口縁部の1/4が残存。3も胎土・作りともに良好な椀で、口縁部の1/4が残存する。器表は荒れている。4は手捏ねの小型品であるが、胎土精良で、この種の土器としては器面も平滑化している。5は甕の小片で、復元口径に不安がある。口縁部がく字形に外反、端部に面をもつ。

6・7は口縁部付近の1/4が残存する杯身。7は焼成が甘く、内面に籠記号が刻まれる。8は杯身小片、形状は先の2点に似る。9は口縁部を欠失する。胎土は精良といってよく、外面は灰を被って黒色化する。内面に籠記号が刻まれるが、通常先の尖った工具で刻むところを先端が丸い工具で弧線を刻んでいる。10は口頸部が短く直立する壺の小片で、茶褐色クサリ礫が目立つ。11はやや丸みを帯びる底部片で、胎土は比較的良好、外面全体が焼けて灰黒色あるいはピンク色となる。12もまだ平底となる底部片。これは被熱の痕跡が見えない。

13～15は須恵器。13は小片からの復元で、口径に不安がある。天井部・口縁部の境は曖昧で、口端部にはしっかりとした面を付している。回転籠削りを含めて、全体に粗雑な作りである。14は杯身小片。15は脚部片で、透孔の痕跡が残る。

2号通路状遺構（図版20、第69図）

調査区の中央東端で、崖面に広がるように検出した遺構である。付近には17・20・21・22号住居跡などが密集するが、本遺構と他遺構の切り合い関係はない。南東から北西方向へ浅広いテラスを5段分検出している。本来は削られた崖面から下へと続いていたと思われ、上下ともに互いに数mほど段がのびていたと思われる。1号通路状遺構と同じく丘陵下から階段状の通路であったと思われる。長軸6.0m、残存短軸3.6m、遺構面から最下段で0.45m程度低くなる。古墳時代後期の遺構と考えたいが、隣接する17・20～22号住居跡との距離は1m前後しかなく、竪穴住居に周堤帯が存在していた可能性を考慮すると、これらの住居群と同時併存していたと想定することは難しく、所属時期については再検討が必要かもしれない。

須恵器を含む土器片が若干出土しているが、図化に堪えるものはない。

3号通路状遺構（第69図）

調査区の北東端部で検出した。38号住居跡を切り、ほぼ東から西へ長さ4.8m程度、幅1.0～1.2mを検出した。当初は溝と考え掘削していたが、底面には径0.18～0.35m程の円・楕円形プランのピットが連続して検出されたこと、また出土する遺物のほとんどが磨滅し親指ほどになった土器ばかりでバラス状を呈していることから、古代道路状遺構との類似性を考えた。埋土はかなり硬化しており灰褐色土（マンガン・土器片含む）であった。溝状の部分から出土している磨滅土器が路面のバラス、または詰められた土の繋ぎの役目をしていると考えられる。また底面のピットは古代道路跡という「波板状遺構」と考えられるが、規模で言うと通路と考えるほうが妥当である。38

号住居跡を切っていることから古墳時代後期以後のものとしか断定できない。深さは0.1~0.14cm程度である。なお北西約1kmに所在する大村・青畠地区の青畠向原遺跡1号不明遺構（豊前市教委1999）も同様な特徴をもち、北東から南西方向へ向いている。出土遺物はない。

(7) その他の遺構と遺物

谷状落ち込み（第71図）

調査区北側で長さ17m、調査区側の幅約10mほどの谷状の浅い落ち込みを検出している。16号土坑付近から北方向に向かって次第に深くなって、遺構面から最大0.4mの深さとなる。時期は調査区内でも古いようで、弥生時代前期末～中期初頭頃に埋没している。この時には18号土坑も同時に存在していたようで谷と同時期に埋没している。その後、41・43・44号住居跡が建てられている。埋土は地山をベースにする黄褐色粘土ブロックと黒褐色土が混ざるもので、遺構面検出時には綺まりのない地山の二次堆積土が現れていた。農道を挟んで北側の小調査区は搅乱によって削られた部分があるが、本来はそちら側にも谷が続いている低くなつた窪みとなっていたと思われる。

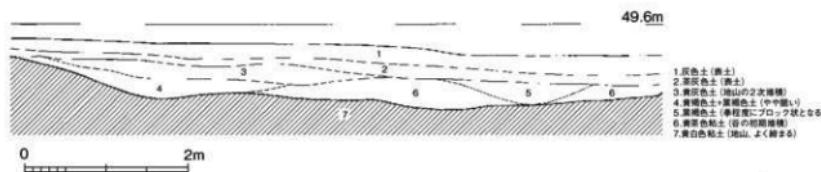
出土遺物

出土遺物は少ないが、須恵器や明らかに古墳後期に属する土器はないようである。

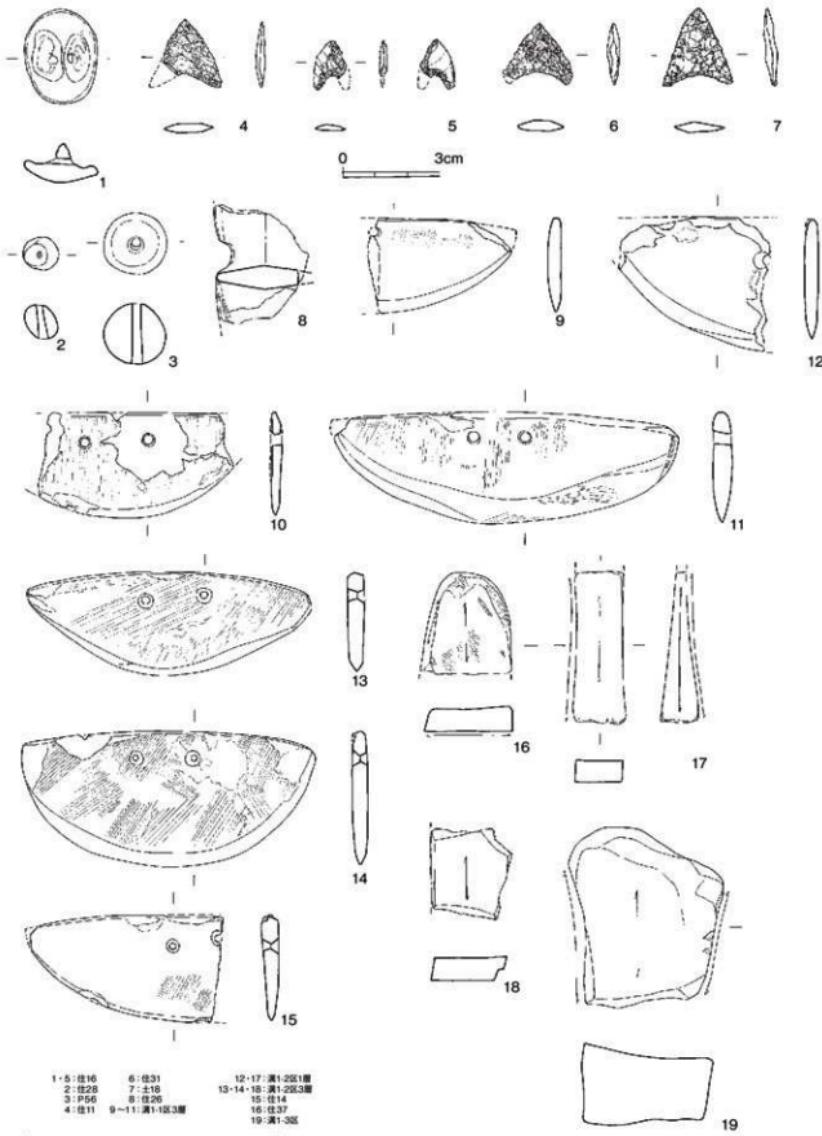
土器（第68図2～8） 2は口端部に粘土帯を貼り付けるものでいわゆる城ノ越式としてよかろうが、しっかりとした断面逆L字形とならず、一見朝鮮系無文土器のような趣がある。外面は細密な縦刷毛、内面は箆磨きで仕上げる。3は如意形口縁をもつ甕小片。これは器表が荒れる。4・5は極度に発達したものではないが、肉厚となる甕底部片。4は底部外縁から体部下端にかけて、5では体部外面が赤変する。6・7は立ち上がりが浅く壺の底部であろう。6は内面を箆磨きで仕上げるよう、残存部外面は赤変する。7は内底面付近に多くの弾けが見られ、体部下端付近が灰黒色、以上が黄褐色となる。器表は荒れる。8は肩部から直立する口縁部にかけて緩く彎曲する壺形の土器で、18号土坑出土品と同一個体のようである。

柱穴等出土遺物

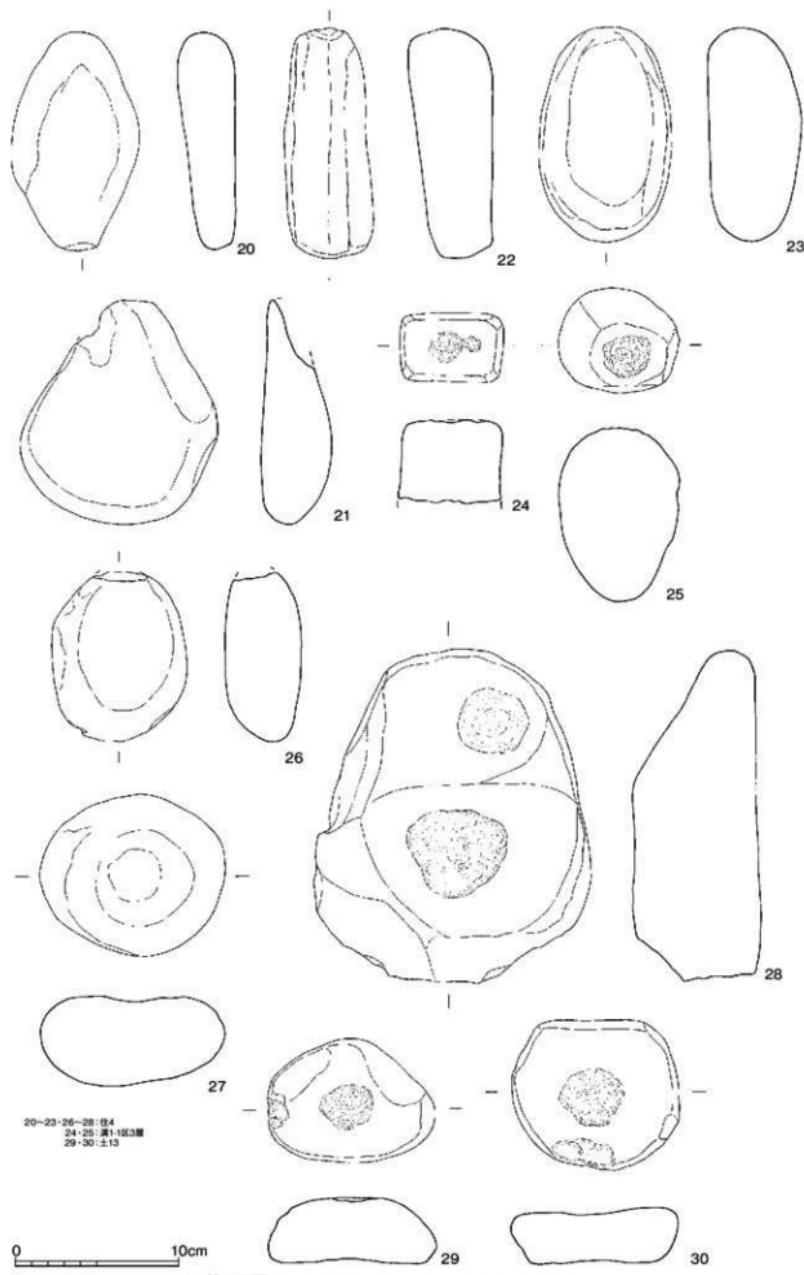
P56（図版31、第72図3） 1号溝東端付近の北側、4号土坑の東に近接する遺構である。図はそこから出土した球形の土玉。胎土は通常の土器同様、焼成は良好で堅固な作りである。中央には5mmの穿孔を施す。16.5g



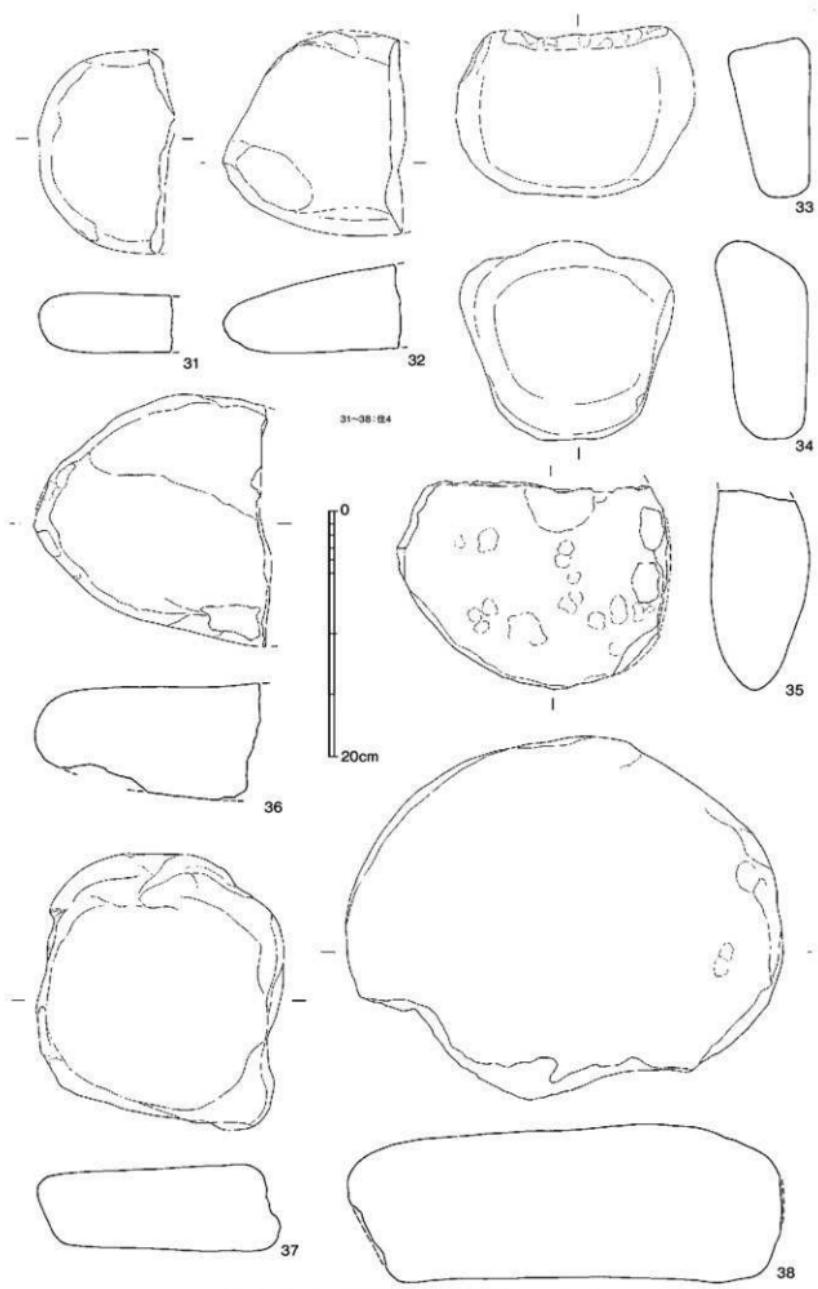
第71図 谷状落ち込み土層実測図（1/60）



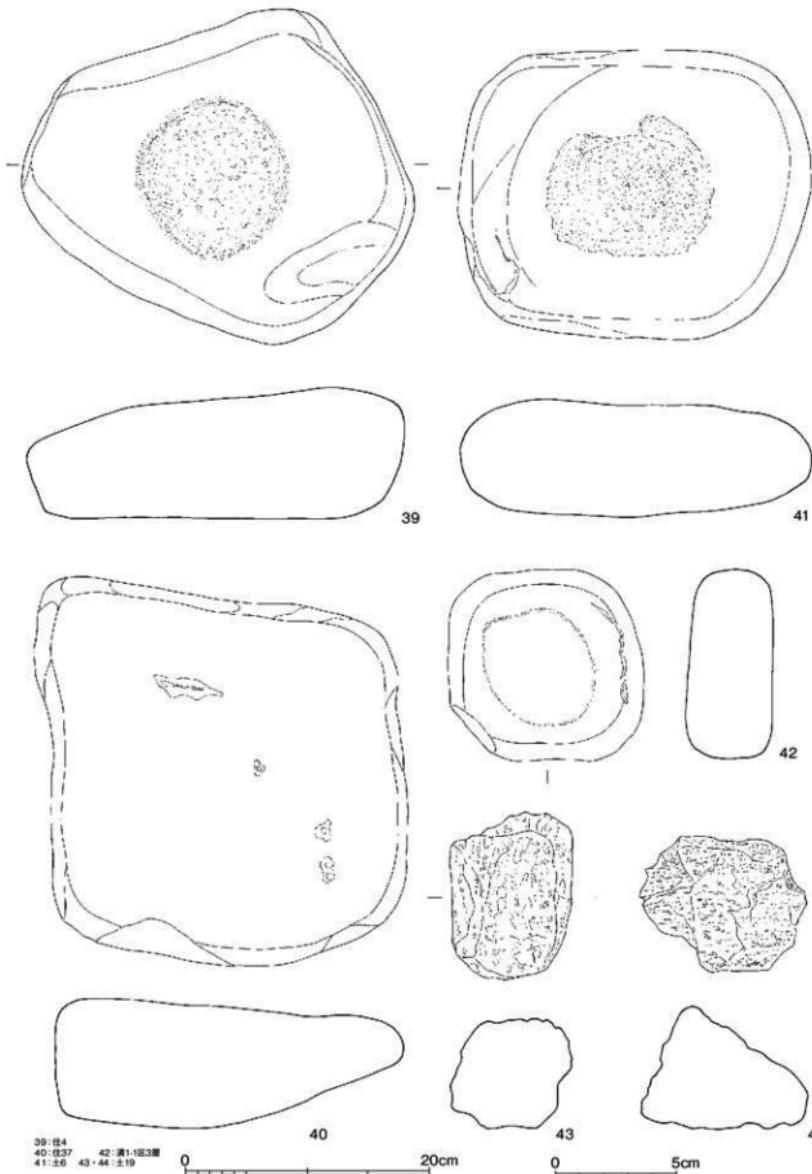
第72図 西ノ原遺跡出土土製品・石製品実測図1 (4~7は2/3、他は1/2)



第73図 西ノ原遺跡出土石製品実測図2 (1/3)



第74図 西ノ原遺跡出土石製品実測図3 (1/4)



第75図 西ノ原遺跡出土石製品実測図 4 (43・44は1/2、他は1/4)